

さん の がわ い せき  
三ノ側遺跡

山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う発掘調査報告書

2013年3月

山梨県教育委員会

山梨県産業労働部

さん の がわ い せき

# 三ノ側遺跡

山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う発掘調査報告書

2013年3月

山梨県教育委員会

山梨県産業労働部



正誤表 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第290集「三ノ側遺跡」

頁・図版番号等	誤	正
P.9 1号竪穴建物跡	遺構:第26図	遺構:第4図
P.17 3.溝状遺構	一覧表(第_表)	一覧表(第1表)
P.19 4.土坑・ピット	一覧表(第_表)	一覧表(第2表)
P.21 5.遺構外出土遺物	(第_55図)	(第54・55図)
P.58 第33図(図中遺構名)	1号竪穴建設跡	1号竪穴建物跡
P.60 第35図(図中遺構名)	2号竪穴建設跡	2号竪穴建物跡
P.61 第36図(図中遺構名)	3号竪穴建設跡	3号竪穴建物跡
P.62 第37図(図中遺構名)	4号竪穴建設跡	4号竪穴建物跡
P.69 第44図(図中遺構名)	5号竪穴建設跡	5号竪穴建物跡
P.96 (2)土器胎土と器種	(図65)	(図64)
抄録 所在地ふりがな	やまなしけんつるぐんかみ やごちようめ	やまなしけんつるしかみ やごちようめ
抄録 所在地	山梨県都留郡上谷五丁目	山梨県都留市上谷五丁目



三ノ側遺跡上空から東側を望む



三ノ側遺跡全体写真（合成写真）

甲斐型の土師器甕



1号竪穴建物跡



9号竪穴建物跡



13号竪穴建物跡

堀之内原タイプ・相模系の土師器甕



4号竪穴建物跡



11号土坑

駿東型の土師器甕



7号竪穴建物跡



12号竪穴建物跡

### 三ノ側遺跡のあらまし

三ノ側遺跡は、山梨県都留市田原から上谷にかけて存在する大規模な遺跡です。1981（昭和56）年と2001・2002（平成13・14）年には、今回の調査区よりも西側の地点で都留市教育委員会によって発掘調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居跡（竪穴建物跡）などが発見されています。特に1981（昭和56）年に行われた発掘調査



調査地点上空から遺跡西側を望む

では、皇朝十二銭の和同開珎や富寿神宝と呼ばれる銅鏡、銅製の小壺などが出土しています。

古代（奈良・平安時代）の山梨県は甲斐国と呼ばれていました。甲斐国の中には、「山梨」「八代」「巨

麻」「都留」の4つの郡があり、三ノ側遺跡のある現在の山梨県都留市周辺は、当時の都留郡に含まれます。また、都留郡の中には、「相模」「古郡」「福地」「多良」「加美」「征茂」「都留」の7つの郷が置かれています。三ノ側遺跡周辺は、この内の多良郷にあたるとされ、都留市教育委員会による調査で当時の貴重品が出土していることから、多良郷の中でも中心的な役割を持つ集落が存在したのではないかと考えられています。

今回の発掘調査は、山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴うもので、工事に先立って、2011（平成23）年6月から12月にかけて行われました。調査を行った場所は、県立谷村工業高等学校の西側に隣接する水田として利用されていた区画で、それまで考えられていた三ノ側遺跡の範囲の中でも最も東側の地点にあたります。

発掘調査の結果、奈良・平安時代の竪穴建物跡13軒、掘立柱建物跡4棟、溝状遺構7条、奈良時代から中世にかけての土坑129基などが発見されました。また、



7号竪穴建物跡のカマド



9号竪穴建物跡の土師器甕出土状況



4号竖穴建物跡



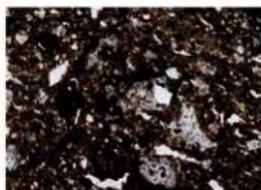
4号竖穴建物跡から出土した土師器

8,500年前※猿橋溶岩流出期)から現代に至るまでの詳細な地層の堆積状況のデータを得ることができました。

2011・2012(平成23・24)年に谷村工業高校の敷地内で行われた試掘調査の結果から、三ノ側遺跡の範囲はさらに東側へ広がることがわかりました。今回の調査で得られたデータを含め、今後の調査研究の進展とともに三ノ側遺跡および都留郡多良郷の全体像が明らかにされていくことが期待されます。



胎土分析の顕微鏡写真 (パリノ・サーヴェイ株式会社撮影)



豊穴建物跡のカマドを中心に、土師器や須恵器などの土器、刀子などの鉄製品が出土しました。この中でも、土師器の壺には、甲斐国(甲府盆地)で作られた甲斐型土器の他に、都留郡内に多く見られる堀之内原タイプ、現在の神奈川県にある相模地方で作られた相模型、静岡県東部で作られた駿東型といった様々な地域のものが見られました。このことは、三ノ側遺跡周辺の地域が、甲斐国だけではなく周辺の国々と強い結びつきを持っていたことを示していると考えられます。

今回の発掘調査で出土した土師器の産地を特定するために、4号豊穴建物跡から出土した土師器を試料として、胎土(土器の原材料となる土)の分析を行い、土器の産地の特徴を示す基礎的なデータが得られました。また、上杉陽先生(都留文科大学名誉教授)による調査地点の地層の観察によって、縄文時代早期(約



地層の堆積状況

## 序 文

本書は、2011（平成 23）年度に発掘調査が行われた三ノ側遺跡の発掘調査報告書です。三ノ側遺跡は、山梨県都留市田原から上谷にかけて立地する遺跡で、今回の調査は、山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設工事に伴い実施しました。

三ノ側遺跡は、今回の調査が実施される以前から、東西約 540 m、南北約 170 m に渡って分布すると推測される大規模な遺跡でしたが、今回の調査に先立って行われた試掘調査や、2011・2012（平成 23・24）年度に行われた県立谷村工業高等学校敷地内における試掘調査の結果、従来よりもさらに東側へ遺跡の範囲が広がることが確認され、現在では、東西約 860 m の範囲が遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）として登録されています。

三ノ側遺跡の範囲内においては、過去に都留市教育委員会による発掘調査が 2 回実施されており、奈良・平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物、土坑などが発見されています。特に、1981（昭和 56）年に今回の調査地点から西へ 100 m ほど離れた地点での発掘調査では、皇朝十二銭の和同開珎・富寿神宝や銅製の小壺といった県内でも希少な遺物が出土しました。遺跡周辺は古代の甲斐国都留郡に置かれた 7 つの郷の内、多良郷にあたる地点と推定されており、三ノ側遺跡には多良郷の中でも中心的な役割を担った集落が存在したのではないかと考えられています。

本発掘調査では、奈良・平安時代の竪穴建物跡 13 軒、掘立柱建物 4 棟、溝状遺構 7 条、奈良時代～中世の土坑 129 基などを検出しました。遺物は、竪穴建物跡を中心に出土し、甲府盆地で生産された甲斐型の土師器や在地産の堀之内原タイプの他、相模型、駿東型といった周辺地域から持ち込まれた土師器甕が見られます。このような土師器甕の多様性から、当時の三ノ側遺跡周辺の地域が、甲斐国だけでなく周辺の国々と強い結びつきを持っていたことが窺えます。また、4 号竪穴建物跡から出土した土師器の一括資料について胎土分析を実施し、それぞれの土器型式における産地について興味深いデータが得られました。

本書が、古代甲斐国における都留郡・多良郷の実態や甲斐国と周辺国との情勢を考える上で、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

最後に、調査にあたって御指導・御協力をいただいた関係者、関係機関に厚く御礼を申し上げます。

2013 年 3 月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 八巻與志夫



## 例　　言

- 1 本書は、山梨県都留市上谷に存在する三ノ側遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査であり、山梨県産業労働部から山梨県教育委員会が依頼を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
- 3 発掘調査および整理作業は山梨県埋蔵文化財センターが行った。
- 4 本書の執筆・編集は、依田幸浩、加々美鮎実が行った。また、第4章は自然科学分析を委託したパリノ・サーヴェイ株式会社の報告書を掲載した（第1節 胎土分析の薄片観察表は割愛）。
- 5 発掘調査・整理作業及び本書の刊行にあたり、測量基準点及びグリッド杭設置を株式会社イビソクに、遺跡の空中写真撮影及び写真測量・図化を株式会社シン技術コンサルに、金属製品の保存処理を公益財團法人 山梨文化財研究所に委託した。
- 6 遺構の測量及び図化には電子平板「遺構くん」を使用した。
- 7 遺構・遺物の写真については、依田、青木真一が撮影した。胎土分析試料の写真はパリノ・サーヴェイ株式会社撮影の写真を、また遺跡の空中写真は株式会社シン技術コンサル撮影の写真を使用した。
- 8 本書にかかる記録図面・電子データ、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 9 調査にあたり、次の方々からご教示、ご協力をいただいた。記して謝意を表する。（順不同・敬称略）  
上杉　陽、奈良泰史、守屋雅幸、都留市教育委員会

## 凡　　例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は図中に示した。原則として、遺構は竪穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・ピット：1/60、溝状遺構：1/150・1/60、カマド：1/30、遺物は土器：1/3、鉄製品：1/2である。
- 2 遺構番号は、本調査における調査区全体の通し番号とした。
- 3 調査区内には世界測地系座標に基づく5m四方のグリッドを設置し、全体図におけるX・Y軸延長線上の数字は座標線の数値である。よって南北のグリッド線および図中の方位マークは真北を指す。
- 4 遺構図版中のドットマークや出土遺物に付した番号は、遺物図版の番号に対応している。
- 5 遺構断面図の左側基点に付した数字は標高(m)を表す。
- 6 遺構図版中の網点は焼土・灰白色粘土範囲を表す。遺物のドットは●が土師器、▲は須恵器、■は青磁、◆は金属製品、◇は炭化物を示し、番号はそれぞれ遺物図版の番号と対応している。遺物図版中の遺物断面は、黒塗りが須恵器、網点が灰釉陶器・青磁を表す。
- 7 遺物観察表に記載した色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1990版による。
- 8 本報告書中遺跡分布図には、国土地理院発行の1/25,000地図を利用した。

# 目 次

巻頭写真図版

あらまし

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の目的と課題.....	1
第3節 発掘調査の経過.....	1
第4節 室内調査等の経過.....	2
第5節 調査組織.....	2
三ノ側遺跡発掘調査にかかる法的手続きおよび報告事項.....	2
第2章 遺跡の位置と環境.....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
第3章 調査の方法と成果.....	6
第1節 発掘調査の方法.....	6
第2節 調査地点の基本順序.....	6
第3節 発見された遺構と遺物.....	9
溝状遺構一覧表.....	22
土坑・ピット一覧表.....	23
遺構図版.....	26
遺物図版.....	58
遺物観察表.....	82
金属製品観察表.....	90
第4章 自然科学分析.....	91
第1節 胎土分析.....	91
第2節 放射性炭素年代測定・樹種同定・土壤理化学分析.....	109
第5章 総括.....	118

写真図版

## 図版目次

第1図	三ノ側遺跡と周辺の遺跡位置図	4
第2図	三ノ側遺跡周辺詳細図	5
第3図	三ノ側遺跡全体図・基本土層図	7・8
第4図	1号竪穴建物跡	26
第5図	2号竪穴建物跡	27
第6図	3号竪穴建物跡	28
第7図	4号竪穴建物跡（1）	29
第8図	4号竪穴建物跡（2）	30
第9図	4号竪穴建物跡（3）	31
第10図	5号竪穴建物跡	32
第11図	6号竪穴建物跡	33
第12図	7号竪穴建物跡	34
第13図	8号竪穴建物跡	35
第14図	9号竪穴建物跡（1）	36
第15図	9号竪穴建物跡（2）・10号竪穴建物跡（1）	37
第16図	10号竪穴建物跡（2）	38
第17図	11号竪穴建物跡（1）	39
第18図	11号竪穴建物跡（2）・12号竪穴建物跡（1）	40
第19図	12号竪穴建物跡（2）	41
第20図	13号竪穴建物跡	42
第21図	1号掘立柱建物跡	43
第22図	2号堀立柱建物跡・3号堀立柱建物跡	44
第23図	4号堀立柱建物跡	45
第24図	1号溝状遺構・2号溝状遺構・4号溝状遺構	46
第25図	3・5～7・II層1～5号溝状遺構・32・116号土坑・1号ビット	47
第26図	II層6・8～11・15・17～19・24・26～29号溝状遺構・35・135号土坑	48
第27図	1～24・26号土坑、II層2号溝状遺構	49
第28図	25・27～31・33・34・39・41・48～60号土坑、II層14号溝状遺構	50
第29図	61～65・67～73・75～82・84号土坑	51
第30図	85～92・94～107号土坑	52
第31図	108～115・117・119～129号土坑	53
第32図	130～134・136～140、II層2～6号土坑	54
第33図	1号竪穴建物跡出土遺物（1）	58
第34図	1号竪穴建物跡出土遺物（2）	59
第35図	2号竪穴建物跡出土遺物	60
第36図	3号竪穴建物跡出土遺物	61
第37図	4号竪穴建物跡出土遺物（1）	62
第38図	4号竪穴建物跡出土遺物（2）	63
第39図	4号竪穴建物跡出土遺物（3）	64
第40図	4号竪穴建物跡出土遺物（4）	65

第41図	4号竪穴建物跡出土遺物（5）	66
第42図	4号竪穴建物跡出土遺物（6）	67
第43図	4号竪穴建物跡出土遺物（7）	68
第44図	4号竪穴建物跡（8）・5号竪穴建物跡（1）出土遺物	69
第45図	5号竪穴建物跡（2）・6号竪穴建物跡（1）出土遺物	70
第46図	6号竪穴建物跡（2）7号竪穴建物跡（1）出土遺物	71
第47図	7号竪穴建物跡（2）出土遺物	72
第48図	7号竪穴建物跡（3）8号竪穴建物跡（1）出土遺物	73
第49図	8号竪穴建物跡（2）・9号竪穴建物跡出土遺物	74
第50図	9号竪穴建物跡（2）・10号竪穴建物跡出土遺物	75
第51図	11号竪穴建物跡（1）出土遺物	76
第52図	11号竪穴建物跡（2）・12号竪穴建物跡出土遺物	77
第53図	13号竪穴建物跡、1～4号堀立柱建物跡、1号溝状遺構出土遺物	78
第54図	7号溝状遺構、11・23・24・79・115号土坑、遺構外（1）出土遺物	79
第55図	遺構外（2）出土遺物	80
第56図	鉄製品	81
第57図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その1）	98
第58図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その2）	99
第59図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その3）	100
第60図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その4）	101
第61図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その5）	102
第62図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その6）	103
第63図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その7）	104
第64図	胎土中の砂の粒径組成散布図	104
第65図	碎屑物・基質・孔隙の割合	105
第66図	腐植含量とリン酸含量の相関図	114

## 表 目 次

第1表	溝状遺構一覧表	22
第2表	土坑一覧表	23
第3表	出土遺物観察表	82
第4表	金属製品観察表	90
第5表	試料一覧および胎土分類結果	91
第6表	放射性炭素年代測定および暦年較正結果	110
第7表	樹種同定結果	111
第8表	土壤理化分析結果	113
第9表	三ノ側遺跡竪穴建物跡一覧表	121

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

今回の三ノ側遺跡における埋蔵文化財発掘調査は、山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパスの建設事業に伴うものである。山梨県立産業技術短期大学校都留キャンパスは、職業能力開発促進法に基づき山梨県の富士・東部地域のニーズに応じた技術系人材の育成を目的として、山梨県立谷村工業高等学校の西側に隣接する水田地に建設が計画され、平成25年4月に開校予定である。

三ノ側遺跡は山梨県都留市田原から上谷にかけて存在する遺跡で、過去には今回の調査地点周辺において都留市教育委員会による発掘調査が行われている。その結果、昭和53年の詳細分布調査では土器片が、昭和56年、平成13、14年に行われた発掘調査及び平成20年の試掘調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡（竪穴建物跡）などが発見されている。

県立産業技術短期大学校都留キャンパスの建設予定地が三ノ側遺跡の分布推定範囲に隣接していることから、平成23年5月に埋蔵文化財を確認するための試掘調査が行われ、予定地のはば全城から奈良・平安時代の遺構・遺物が検出された。この結果を受け、それまでの三ノ側遺跡の範囲が東側へ拡大変更されるとともに、本格的発掘調査が実施されることとなった。

## 第2節 調査の目的と課題

本格的調査に先立って実施された試掘調査において、奈良・平安時代の竪穴建物跡や土坑が確認されていることから、これらの遺構・遺物を記録保存することを目的とする。

三ノ側遺跡は、東西約860mにわたる範囲に遺跡が存在すると想定される大規模な遺跡であることから、これまでに調査が行われた他の地点と遺構の分布状況を比較し、遺跡の推定範囲の精度を上げることを課題とする。また、三ノ側遺跡周辺は、古代甲斐国都留郡多良郷にあたると推定されるため、国府の置かれた甲府盆地や周辺地域とどのような関わりを持っていたのかを捉えることを課題とする。

## 第3節 発掘調査の経過

発掘調査は、平成23年6月29日から12月26日まで実施した。調査における排土場所の確保や、調査の終了した地点から段階的に工事を行う計画のため、調査区を3地点に分割して調査を行ったが、整理作業の段階で調査区を一つにまとめた。

6月6日 発掘調査に先立ち、県産業人材課、県教育厅学術文化財課、埋蔵文化財センターの三者による現地協議。

6月29日 調査区へ入るための谷村工業高校敷地内からの通用路を整備。

6月29日～7月14日 第1地点（調査区南側）表土剥ぎ。

7月5日 発掘作業員出勤開始。

7月14日 第1地点測量基準点・グリッド杭設置。

9月30日 第1地点空掘・全体図写真図化用測量。

第1地点調査終了（竪穴建物跡7軒、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構18条、土坑・ピット54基）。

10月1日 第1地点一部埋戻し。

10月3日～10月17日 第2地点（調査区北側西）表土剥ぎ作業。

10月17日 第2地点測量基準点・グリッド杭設置。

11月17日 第2地点空掘・全体図写真図化用測量。

11月28日 第2地点調査終了（竪穴建物跡5軒、掘立柱建物2棟、溝状遺構11条、土坑・ピット64基）。

11月28日～12月7日 第2地点埋戻し・第3地点（調査区北側東）表土剥ぎ。

- 12月12日 第3地点測量基準点・グリッド杭設置。
- 12月19日 上杉陽氏現地指導。
- 12月21日 第3地点空撮・全体図写真図化用測量。
- 12月26日 第3地点調査終了（堅穴建物跡1軒、溝状遺構5条、土坑23基）。撤収作業。

#### 第4節 室内調査等の経過

今回の発掘調査での遺物出土量は、プラスチック収納箱にして14箱になり、平成23年度には室内における基礎的整理作業として、遺物の注記・接合復元を平成24年1月6日から3月23日まで、平成24年度には本格的整理作業として、遺物の実測・トレースを平成24年7月2日から12月26日、遺物・写真的整理を2月4日から3月中旬まで行った。また、これに並行して、遺構・遺物図版の作成、原稿執筆を進め、本報告書を刊行した。

また、発掘調査・整理作業の段階で抽出した資料について自然科学分析・保存処理を行い、平成23年度には、炭素年代測定・樹種同定・土壤理化学分析、金属製品の保存処理、平成24年度には、胎土分析の業務委託を行った。

#### 第5節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 平賀孝雄（平成23年度） 八巻與志夫（平成24年度）

次長 八巻與志夫（平成23年度） 福島一雄（平成24年度）

調査研究課長 高野玄明（平成23年度） 米田明訓（平成24年度）

資料普及課長 山本茂樹

調査担当者 資料普及課資料第一担当 依田幸浩 青木真一（平成23年度発掘調査・基礎的整理作業）

資料普及課資料第二担当 依田幸浩 加々美鯨実（平成24年度本格的整理作業・報告書刊行）

作業員

発掘調査 天野美津子 有賀国男 石井 昇 石倉千春 奥脇光夫 長田泰彦 斎田文雄 片岡和子 小林正彦  
三枝俊貴 佐藤 専 鈴木英夫 高尾和美 高部晴緒 忠見千穂 田中憲一 田中奈津代  
椿 孝二 遠木常久 三井孝明 森田晋二 山田正之 横田夏江 渡辺久美子 渡辺めぐみ  
渡邊洋一 渡邊 亮

整理作業 新谷和美 小林奈苗 流石利枝子 佐藤文子 佐野眞雪 依田和美

#### 三ノ側遺跡発掘調査にかかる法的手続等

- 平成23年6月16日 山梨県立産業技術短期大学校分校整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書を山梨県産業労働部と山梨県教育委員会で締結。
- 平成23年6月29日 文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出。（教理文第323号「産業短期大学校建設に伴う三ノ側遺跡の発掘調査報告・実施について」）
- 平成23年12月26日 山梨県教育委員会教育長へ発掘調査の終了を報告。（教理文第921号「山梨県立産業技術短期大学校分校整備事業に伴う発掘調査終了報告について」）
- 平成24年1月13日 文化財保護法第100条第2項の規定により埋蔵文化財発見の通知を山梨県教委幾委員会教育長へ提出し、大月警察署への通知を依頼。（教理文第323号 - 1「埋蔵文化財の発見について（三ノ側遺跡）」）

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

三ノ側遺跡は山梨県都留市田原から上谷にかけて立地している。都留市は山梨県の東南部に位置し、東は上野原市・南都留郡道志村、西は南都留郡富士河口湖町・西桂町、南は富士吉田市・南都留郡忍野村・中山湖村、北は大月市に接している。周囲を山に囲まれ、富士五湖の一つである中山湖を水源とする桂川が南西から北東へ流れている。桂川は下流では相模川と名前を変える。都留市の大部分は御坂山地と道志山塊による山間地が占め、桂川とその支流である鹿留川、杓子流川、大幡川、菅野川、朝日川などによって形成された河岸段丘上の平坦面に市街地が展開している。主要な交通網としては、桂川に沿う形で市内を走る国道139号、中央自動車道、鉄道の富士急行線があげられる。

三ノ側遺跡は桂川右岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査地点は、県立谷村工業高校の南西側に接する元は水田として利用されていた区画である。調査地点の標高は約494mで、調査着手前は水田の小区画ごとに段差が設けられ、全体としては北側へ緩やかに低くなっていた。発掘地点から北へ約300m離れた地点を桂川が流れる。南側は道志山塊の御正体山から生出山へ尾根が伸びている。発掘地点から南側の山裾までの距離は250mほどである。また、寛永16年(1639)に完成した十日市場大堰(谷村大堰)から流れる家中川と寺川が調査地点を南北に挟むように南西から北東方向へ流下している。

### 第2節 歴史的環境

三ノ側遺跡は東西約860mにわたる範囲に遺跡が分布すると推測される大規模な遺跡である。昭和56年(1981)には、今回の調査地点から西へ100mほど離れた地点で都留市教育委員会による発掘調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居跡(竪穴建物跡)が発見されている。この調査では、皇朝十二銭の和同開珎や富寿神宝、銅製の小壺が出土している。さらに平成13・14年(2001・2002)の都留市教育委員会による発掘調査において、今回の調査地点から西へ300mほど離れた地点で奈良・平安時代の竪穴建物跡が発見され、平成20年(2008)に行われた試掘調査では、竪穴建物跡のカマド部分が確認されている。

三ノ側遺跡の周辺には、縄文時代～中世の遺跡が存在し、集落跡の遺跡の多くは、桂川やその支流沿いに発達した河岸段丘上に立地している。

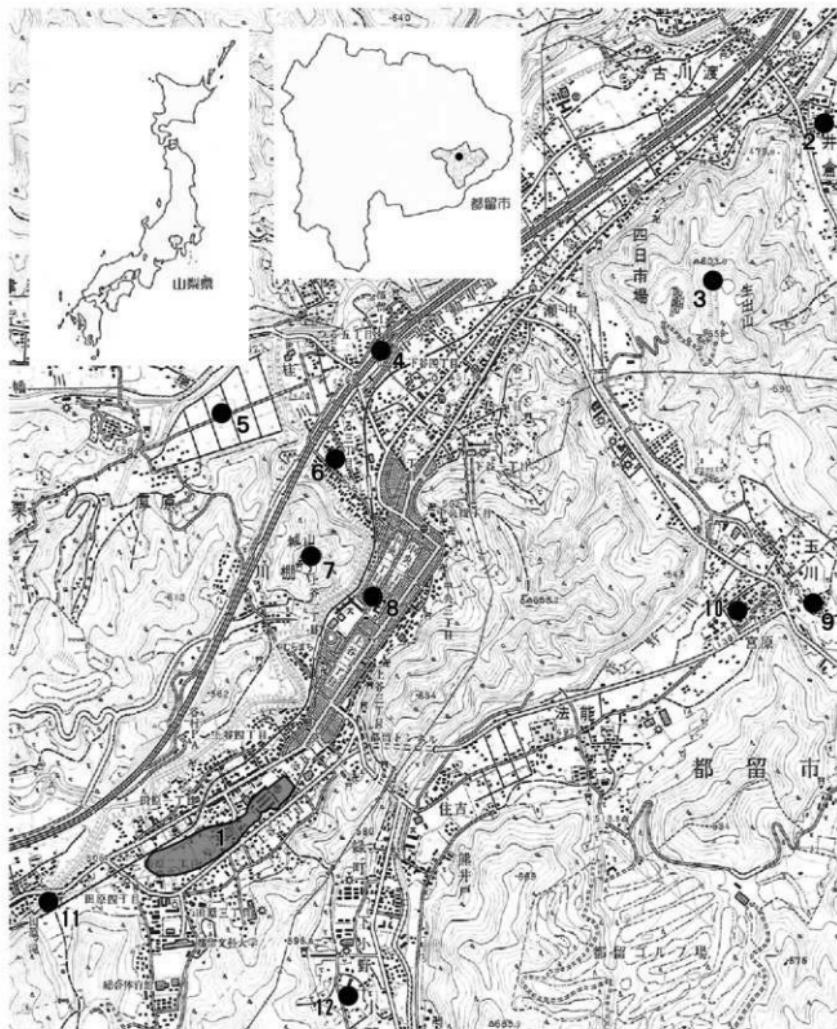
縄文時代では、縄文時代早期の竪穴建物跡が発見された玉川金山遺跡や生出山山頂遺跡、縄文時代前期後半から中期後半の竪穴建物跡が発見された美通遺跡、縄文時代中期末の大環状配石遺構が発見され全国的に注目された牛石遺跡などが存在する。

弥生時代では、玉川金山遺跡、生出山山頂遺跡、美通遺跡、牛石遺跡、宮原遺跡などが認められる。

都留市域では、弥生時代中期以降、特に古墳時代を通じて遺跡がほとんど見られない状況にあるが、平成23年(2011)に、三ノ側遺跡から北へ2kmほど離れた城ノ腰第2遺跡の中で山梨県埋蔵文化財センターによる試掘調査が行われ、古墳時代の土器片が出土している。他に古墳時代の遺跡として、散布地ではあるものの十二割海戸遺跡がある。

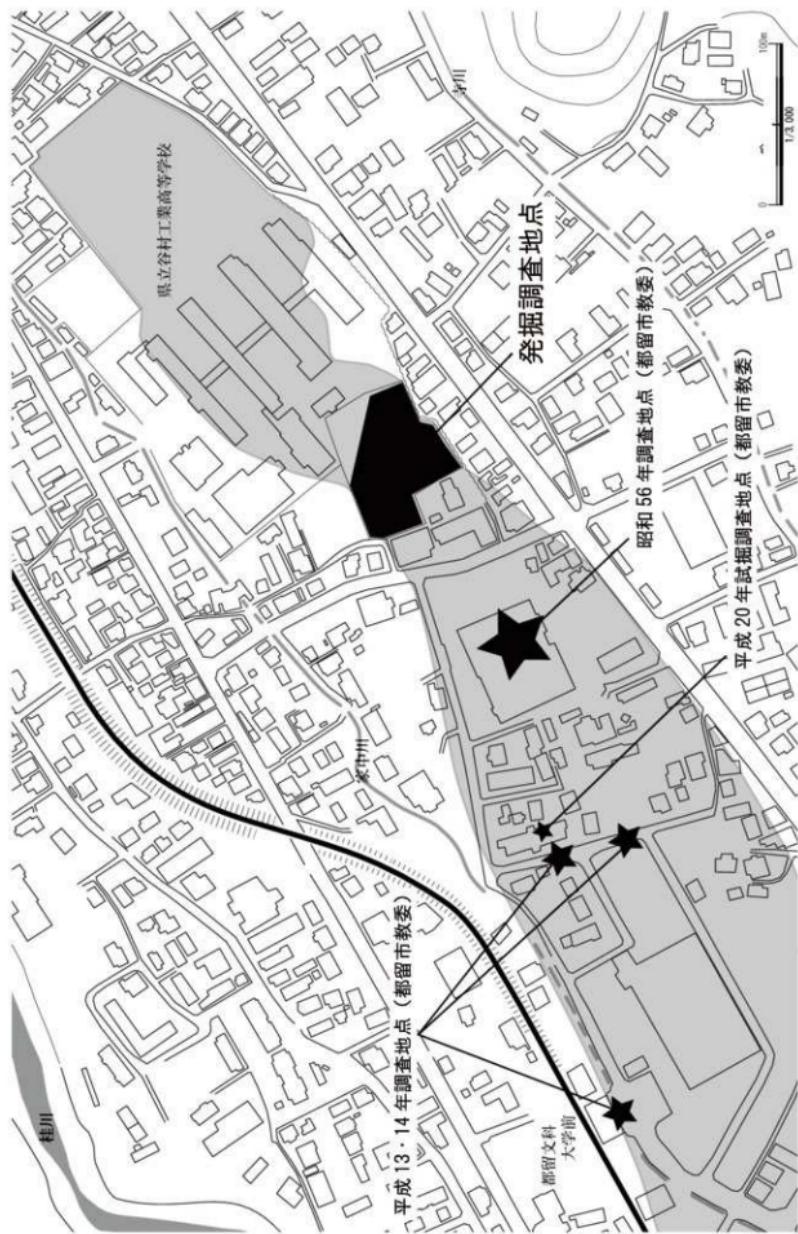
8世紀に入ると遺跡の数は再び増加し、奈良・平安時代には桂川沿いに大規模な遺跡が現れるようになる。三ノ側遺跡を含め、竪穴建物跡群が発見された牛石遺跡や美通遺跡、小溝と土坑・ピットがあり組んだ畠に圍わると想定される遺構が検出された鷹の巣遺跡、玉川金山遺跡などがある。三ノ側遺跡周辺は、古代甲斐国(現在の山梨県)の都留郡多良郷にあたるとされ、三ノ側遺跡の立地する都留市田原の地名は「多良」に由来すると考えられている。

中世になると、小山田氏によって勝山城や谷村城が築かれ、近世にかけて領主が変遷する。江戸時代初期の秋元氏治世下では、十日市場大堰の開削によって新田の開墾と石高の増加が図られた。三ノ側遺跡周辺は谷村城下町に近い水田地帯であったと推測される。



- 1 三ノ側遺跡（奈良・平安・中世）  
 2 美通遺跡（縄文・弥生・奈良・平安～近世）  
 3 生出山山頂遺跡（縄文・弥生・平安）  
 4 鷹の巣遺跡（縄文・奈良・平安）  
 5 牛石遺跡（縄文・奈良・平安）  
 6 城ノ腰第2遺跡（古墳・平安）  
 7 勝山城跡（中世・近世）  
 8 谷村城跡（中世・近世）  
 9 玉川金山遺跡（縄文・弥生・奈良・平安）  
 10 宮原遺跡（縄文・弥生）  
 11 十日市場大堰（近世）  
 12 十二割海戸遺跡（古墳・奈良・平安）

第1図 三ノ側遺跡と周辺遺跡位置図 ( $S = 1 / 25,000$ )



第2図 三ノ側遺跡周辺詳細図 ( $S = 1 - 3,000$ )

※ シャドウは 2013 年 3 月時点の調査範囲

## 第3章 発掘調査の方法と成果

### 第1節 発掘調査の方法

発掘調査は、調査区域内に排土置き場を確保する必要があり、また、産業技術短期大学校の建設工事着工との兼ね合いから、調査区内において3回の反転を行った。まず調査区の南側半分を調査した後、残る北側のさらに西側半分、最後に北側の東側の半分という手順である。調査区を地点ごとに分けずに整理作業の段階で、一つの調査区にまとめてある。このため、遺構番号は調査区の南側から北側の西寄り、さらに北側の東の順で大きくなっている。

調査区内には世界測地系座標に基づく5m四方のグリッドを設定した。調査区の南北方向に南からアラビア数字で1・2・3・・・、東西方向に西からアルファベットの大文字でA・B・C・・・の順で記号を付し、それぞれが交差する地点をA-1グリッド、B-1グリッドのように表す。

表土層の除去は重機によって行い、事前の試掘調査で確認されていた奈良・平安時代の遺物包含層または遺物確認面の直上まで表土を除去した。表土層除去後は、人力で遺物包含層及び遺構確認面の精査を行い、発見された遺構については、土層觀察用のベルトを設けるか、半裁して確認しながら掘削した。各遺構は、平面図・土層断面図などを作成し、出土遺物の位置を記録した。また、出土した遺物については、微細なものを除きトータルステーションを用いて位置の記録を取った。調査の進捗状況および発見された遺構や遺物の状況は、小型一眼レフカメラやデジタルカメラで撮影し記録した。また、土坑内から検出した溶岩礫の平面図や調査区全体図の作成には、トータルステーションによる測量と手持ちデジタルカメラの写真および空中写真撮影による写真からの図化を利用した。

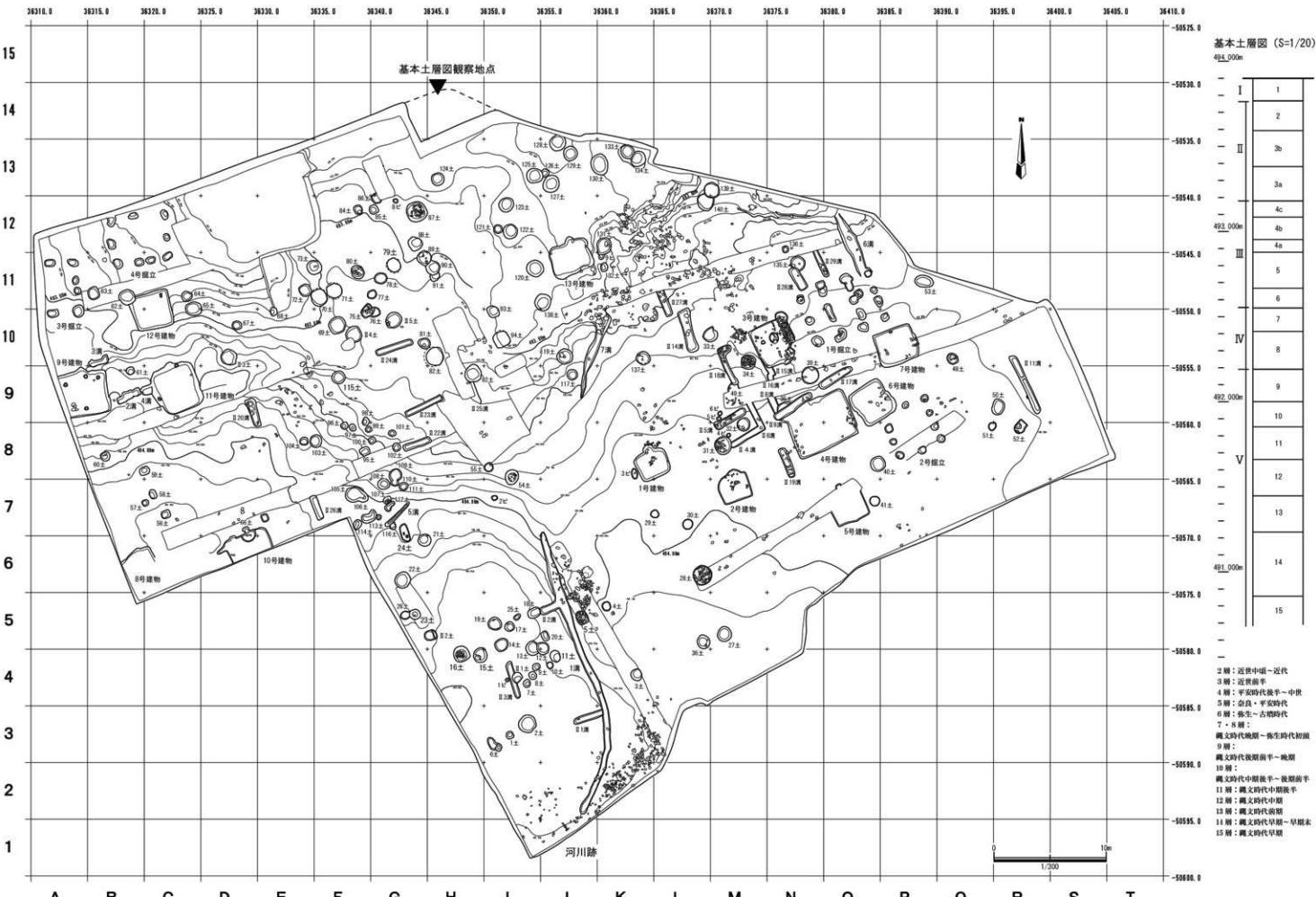
### 第2節 調査地点の基本層序

本格的発掘調査の事前に行われた試掘調査では、現地表である水田の作土層と鉄床層（第I層）の下層にスコリア及び砂礫を含んだ褐色土層（第II層）、やや粘性の強い黒褐色土層（第III層）、黄褐色土層（第IV層）、赤色・黒色スコリアを多く含む暗褐色～黒褐色土層（第V層）の順で各層が確認された。第II層から下層は、調査区の中央部分から北側にかけて厚く堆積するようになり、北側へ低く傾斜していることから、調査区の中央部に地形の変換点があったことがわかる。特に第II層が厚く堆積しているので、第II層に多くの土壤の流入があったことがわかる。土層の堆積状況は調査区の地点によってやや異なり、調査区の南側では、第II層と第III層が第I層によって削平されている。また、第IV層は元々の地形が低くなる調査区の北側周辺に堆積している。

この内、奈良・平安時代の遺物包含層は、第III層にある。また、第II層から掘り込まれる土坑及び溝状遺構が確認されたため、奈良・平安時代の遺構よりも新しい時期の遺構として遺構番号の頭に「II層」を付けて区別している。

本格的調査の中では、もっとも地形が低くなる調査区北側の調査区壁付近を掘り下げ、上杉陽氏による土層の細分・時期比定をして頂いた。これにより、第II層の上部から掘り込まれる土坑及び溝状遺構が江戸時時代中期以降に比定されることがわかった。

試掘調査による土層（第I～V層）と上杉氏による土層細分（第1～15層）を併記し、第3図に示す。ただし、表土層（第I層）を除く各層の厚さは地点ごとに異なり、調査区の南側へ向かうほど、相対的に薄くなっている。



第3図 三ノ側遺跡全体図 (S = 1 / 300)・基本土層図 (S = 1 / 20)

※「建物」：堅穴建物跡、「柱立」：掘立建物跡、「溝」：溝状構造、「土」：土坑、「ビ」：ビット

## 第3節 発見された遺構と遺物

### 1. 竪穴建物跡

1号竪穴建物跡（遺構：第26図、遺物：第33・34図）

【位置】調査区ほぼ中央のK-7・8、L-8グリッドに位置する。

【形状・規模】東西2.87m×南北2.25m。やや東西方向が長い隅丸長方形。

【検出状況】竪穴の深さは遺構確認面から33cm、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に地山が固く縮まっていた。柱穴は確認されなかった。竪穴外西側にピット（3号ピット）があるが、1基のみであり、本建物跡に伴うものかは不明である。

【カマド】竪穴北壁のほぼ中央に設けられる。明確な火床面は検出できなかったが、燃焼部と推定される地点でわずかに焼土化した地山を検出したので、火床面は竪穴の床面とほぼ同じ高さになると思われる。奥壁も床面とはほぼ同じ高さから竪穴の壁を60cmほど外側へ掘り込み、斜めに立ち上がる。左袖にあたる部分から径20cmほどの溶岩礫を一つ検出したが、カマド前面から竪穴の中央部周辺にも溶岩礫が散乱して検出されており、人為的に破壊された印象を受ける。カマド部分の覆土には灰白色粘土が混入しており、カマドは溶岩と粘土で構築されていたと考えられる。

【遺物出土状況】カマドを中心に土師器甕の破片が出土し、駿東型の甕が多く見られる（2・3・7～14）。カマドの前面右側からは、甲斐型の土師器甕の胴部から底部にかけての破片（6）が出土した。この破片は、2号竪穴建物跡出土の破片と接合することから、建物廃棄時のカマド祭祀に使用された土器である可能性も考えられる。竪穴南東側の床面からは完形の須恵器环（15）が出土した。竪穴東側の覆土上層からは、端部に穴の開けられた手鍤（第56図1）が出土した。

【その他】本建物跡の東側では、10～20cmほどの溶岩が多量に含まれた地山が調査区の南北方向へ帯状に分布しており、本建物跡のカマドから北東コーナー周辺の地山にも溶岩が多く見られた。

【時期】奈良時代（8世紀後半）。

2号竪穴建物跡（遺構：第5図、遺物：第35図）

【位置】1号竪穴建物跡から南東へ5mほど離れたM-7・8グリッドに位置する。

【形状・規模】東西2.75m×南北2.45mの隅丸方形。

【検出状況】竪穴の深さは遺構確認面から19cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。西側の壁は溶岩を多く含んでおり、掘り方を正確に捉えられなかった。床面は全体的に地山が固く縮まっていた。竪穴のやや北西コーナーに寄った西壁沿いから直径20cm、深さ20cmほどのピットが1基確認された。竪穴の周辺でピットは確認されなかった。

【カマド】竪穴北壁の中央やや東寄りに設けられる。床面と同じ高さから竪穴の壁を45cmほど外側へ掘り込み、奥壁は斜めに立ち上がる。カマドの覆土中には径10cmほどの溶岩礫が散乱し、焼土と灰白色粘土が混ざって検出されただけであったが、地山が焼土化した火床面は明確に残っていた。1号竪穴建物跡と同様にカマドの前面から竪穴中央にかけて溶岩礫が散乱しており、人為的に破壊された可能性が高い。カマドは溶岩と灰白色粘土で構築されていたと考えられる。

【遺物出土状況】カマド中心に土師器甕の破片が出土した。駿東型の甕（8・9）の他、小型のロクロ甕（3）や在地の堀之内原タイプの胎土によく似たハケメ調整の小型甕（4・7）などが見られる。また、1号竪穴建物跡の項でも触れたが、本建物跡出土の甲斐型の土師器甕の破片と1号竪穴建物跡出土の破片が接合している（1号竪穴建物の6）。カマドに近い竪穴北壁沿いの覆土上層からは、須恵器高台付环（11）が出土した。覆土上層からは刀子（第56図2）が出土した。

【その他】本建物跡の西側に溶岩を多く含む地山が南北方向へ帯状に分布しており、本建物跡の床面や西側の壁

面にも溶岩が多く見られた。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

### 3号竪穴建物跡（遺構：第6図、遺物：第36図）

〔位置〕調査区東側のM-10、L-9・10グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西2.76m×南北3.78m。南北方向が長い隅丸長方形。竪穴の東側をII-12号溝に切られる。南西コーナーのあたりをII-15号溝に切られる。

〔検出状況〕竪穴の深さは遺構確認面から48cm。東壁を除いて壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁からは径10～30cmほどの溶岩が多量に検出された。本建物跡はもともと溶岩を多く含む地山に構築されており、竪穴を掘る際に出た溶岩を東壁にまとめたものと考えられる。床面は全体的に地山が固く締まっていた。竪穴中央北西寄りの床面から直径30cm、深さ20cmほどのピットが1基確認された。竪穴の周辺でピットは確認されなかった。

〔カマド〕竪穴の東壁中央や南寄りに設けられる。東壁の溶岩礫に接するように竪穴の床面とほぼ同じ高さで地山が焼土化した火床面を検出した。火床面の両側には袖石を設置していた痕跡と思われる窪みがある。背面の東壁から火床面上層にかけて溶岩礫が検出されたため、カマドの構築材か東壁から崩れてきたものか判別できなかった。このため、カマドの奥壁や煙道の形状を捉えることができなかった。

〔遺物出土状況〕カマドや覆土を中心には土師器甕の破片が出土したが、小破片が多く、個体として捉えることのできるものは見られない。また、ごく少量であるが、土師器環（1）や須恵器（18～19）の破片も出土した。土師器甕には、壺之内原タイプが多く見られ、体部外面にヘラ削りを施すもの（7・8・14）とナデを施すもの（3～6・12）がある。他には、口クロ整形の甕（15）や駿東型の甕（9・11・13・16・17）が見られるが、いずれも小破片である。

〔その他〕竪穴のほぼ中央にある土坑状の窪みは、近年の掘削による攪乱であり、覆土から電線に用いられる碍子やビニール片が出土した（当初はII層13号溝としたが、後に欠番）。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

### 4号竪穴建物跡（遺構：第7～9図、遺物：第37～44図）

〔位置〕調査区東側のN-0-8・9グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西5.82m×南北4.47m。東西方向が長い隅丸長方形の大型の竪穴建物跡である。北西コーナー部分を35号土坑に切られる。北壁中央のカマドの煙道付近をII層9号溝に切られる。西壁沿いの覆土上層ではII層10号溝に切られる。

〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは56cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に地山が固く締まっていたが、西側の壁際は軟弱で、周囲の床面に比べてやや深くなり、地山に含まれる溶岩礫が多く見られた。竪穴内や竪穴周辺からピットは検出されず、柱穴は確認できなかった。

〔カマド〕竪穴北壁のほぼ中央に設けられる。火床面は竪穴の床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を80cmほど外側へ掘り込み、斜めに立ち上がる。奥壁上部および煙道部はII層9号溝によって失われていた。袖部は検出されなかった。火床面の上層には焼土粒子と灰白色粘土を多量に含む暗褐色土が堆積しており、焼土粒子と灰白色粘土はカマド前面から竪穴の北東コーナー周辺にかけて床面上に広く堆積していた。カマドおよび竪穴内から礫は検出されず、灰白色粘土を主体としてカマドを構築していたか、カマド廃棄時に持ち去られたと思われる。カマド構築材（灰白色粘土）の分布状況から、カマドが人為的に破壊された状況が窺える。

〔遺物出土状況〕遺物はカマド周辺を中心に竪穴内全体から多く出土した。他の竪穴建物に比べて土師器環の点数も多い。土師器甕は、後の甲斐型甕につながっていくと思われる赤褐色で胎土に花崗岩類を多く含むもの（15・

25)、堀之内原タイプもしくは相模型、駿東型といった一見して特徴の異なる様な産地のものが見られるが、堀之内原タイプ・相模型の甕が比較的多い。須恵器は土師器に比べると極端に少ないが、壺や蓋、甕などが出土した。覆土中からは、刀子が4点出土（第56図3、5～7）し、1号建物跡でも出土した端部に穴のある鉄製品（手鎌）が1点（第56図4）出土した。また、竪穴中央付近の覆土上層からはワゴの刃口（107）の破片が出土した。

4号竪穴建物跡出土の土師器一括資料について胎土分析を実施し、肉眼による遺物観察における産地推定と類似する結果が得られた。詳細な分析結果は、第4章に掲載してある。

〔その他〕カマドから検出した炭化材の樹種同定を実施し、クヌギ節との結果が出ている。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

#### 5号竪穴建物跡（遺構：第10図、遺物：第44・45図）

〔位置〕調査区東側、4号竪穴建物跡から南へ3mほど離れたO-7グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西3.2m、南北不明。カマドの奥壁部分を除いて北側の約1/3が試掘トレントによって失われているが、隅丸の方形と推測される。

〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは30cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に地山が固く縮まっていた。柱穴は確認されなかった。

〔カマド〕竪穴北壁のほぼ中央に設けられる。火床面は床面と同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を方形に掘り込み、斜めに立ち上がる。袖部周辺の状況は試掘トレントにより失われているため不明である。カマドの覆土からは径10cm前後の溶岩礫を少量検出したが、構築材として用いられたものかは判断しかねる。

〔遺物出土状況〕カマドから甲変型の土師器甕（9・12）が比較的多く出土した。土師器や須恵器の壺は小破片で量も少ない。また、試掘調査の際にもカマド周辺を中心に土師器甕が出土した。破片の中には、わずかであるが駿東型の土師器甕（10）も見られる。

〔時期〕奈良時代～平安時代（8世紀後半）。

#### 6号竪穴建物跡（遺構：第11図、遺物：第45・46図）

〔位置〕調査区東側のO-8・9、P-9グリッドに位置する。4号竪穴建物跡の東側に隣接している。

〔形状・規模〕東西3.29m×南北3.43mの隅丸方形。竪穴西壁の北西コーナー付近は歪に外側へ膨らんでいるが、埋没段階で壁面が崩落したためと思われる。

〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは57cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は南壁際の部分を除いて全体的に地山が固く縮まっていた。南壁際はやや軟弱で、地山を明確に検出するまで掘削したため結果的に周溝状に窪んでいるが、土層断面から周溝の存在は確認されなかった。柱穴は確認されなかった。

〔カマド〕竪穴東壁のほぼ中央に設けられる。溶岩礫を組んだ両袖が残る。火床面は竪穴の床面と同じ高さにあり、地山が焼土化していたが、焼土の範囲はまばらで量も少なかった。奥壁は竪穴の壁を掘り込まず、東壁と同様にほぼ垂直に立ち上がる。カマド覆土は竪穴の覆土と大差なく、やや灰白色粘土や焼土ブロック・焼土粒子が多く見られる程度であった。両袖石周辺の覆土にも少量ではあるが灰白色粘土が混入していたことから、溶岩礫と灰白色粘土を用いて構築されていたと推測される。

〔遺物出土状況〕遺物は竪穴内全体から出土したが、覆土中からのものが大半である。カマドからは、堀之内原タイプの土師器甕の破片が多く出土した。また、カマド前面の床面からは、甲変型の土師器甕（13）が出土した。覆土上層からは、刀子（第56図8）が出土した。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

## 7号竪穴建物跡（遺構：第12図、遺物：第46～48図）

【位置】調査区の東側、6号竪穴建物跡のから北東へ1mほど離れたO-10、P-9・10グリッドに位置する。

【形状・規模】東西3.55m×南北3.21mのやや東西方向が長い隅丸長方形。竪穴の南側を試掘トレンチが南北方向に通過しているため上部が一部失われている。

【検出状況】遺構確認面から床面までの深さは46cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に地山が固く締まっていた。柱穴は確認されなかった。西側の床面から径15～20cmほどの溶岩礫が3つ並んで検出されたが、建物の施設に関わるものか不明である。

【カマド】竪穴東壁のほぼ中央に設けられる。溶岩礫を組んだ両袖が残り、両袖ともに最上部の礫だけ扁平な砂岩を縱方向に配置している。今回の調査で検出したカマドの中では、構築材に溶岩礫以外の礫が使用されている唯一の例である。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を10cmほど外側へ掘り込んで、やや傾斜して立ち上がる。燃焼部の焼土の上層に灰白色粘土ブロックを多く含む土壊が堆積しており、礫と灰白色粘土を用いて構築されていたと推測される。

【遺物出土状況】カマドを中心とし土師器甕の破片が出土した。駿東型甕（6・7・11～13）が多く見られる。竪穴北壁際の床面上から甲型の土師器環（5）が逆位で出土した。

【時期】奈良時代（8世紀後半）。

## 8号竪穴建物跡（遺構：第13図、遺物：第48・49図）

【位置】西側の調査区壁に接するB・C-6グリッドに位置する。

【形状・規模】東西不明、南北約3m。東西方向の規模は竪穴西側が調査区外に伸びているため不明である。竪穴の南側は後世の耕作等によって攪乱を受けていたため、壁の立ち上がりが不明瞭であるが、調査区壁の断面で壁の立ち上がりを確認し、規模を判断した。形状はおそらく隅丸方形になると思われる。

【検出状況】残存する壁面の高さは42cmであるが、壁面上部が耕作によって削平されていることが、調査区壁断面から確認された。壁面は上部が開き気味に立ち上がるが、スコリアを多く含む地山が脆いために埋没の段階で崩落したものと思われる。床面は全体的に地山が固く締まっていた。柱穴は確認されなかった。

【カマド】竪穴北壁に設けられる。正確な位置は不明であるが、北壁の中央やや東寄りにあたると思われる。奥壁から火床面両脇にかけて溶岩礫を検出した。これらの礫は元位置から移動していると思われるが、袖部の名残と考えられる。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、焼土化した地山が検出された。奥壁は竪穴の壁を15cmほど掘り込んで斜めに立ち上がる。カマド覆土に灰白色粘土が多く含まれており、溶岩礫と灰白色粘土で構築されていたと考えられるが、攪拌された状況からカマドが人為的に破壊された可能性が高い。

【遺物出土状況】カマドを中心とし甲型の土師器甕が出土した。竪穴の北東コーナー付近からは底部に「キ」と刻書された甲型の土師器環（1）が出土した。

【その他】カマドから検出した炭化材の樹種同定を実施し、ブナ属との結果が出ている。

【時期】平安時代（9世紀前半）。

## 9号竪穴建物跡（遺構：第14・15図、遺物：第49・50図）

【位置】西側の調査区壁に接するA・B-9グリッドに位置する。南から北へ低くなる緩斜面に構築されている。

【形状・規模】東西不明、南北3.82m。東西方向の規模は竪穴西側が調査区外に伸びているため不明であるが、隅丸方形になると思われる。

【検出状況】調査区壁断面の観察から壁面の高さは南壁で62cm、北壁で30cm。緩斜面に構築されているため、高低差がある。床面は全体的に地山が固く締まっていた。南西側床面には溶岩礫が露出している。壁面はやや開きながら立ち上がる。柱穴は確認されなかった。竪穴北東コーナー付近の外側に3号溝があり、溝の両端がピッ

ト状に窪んでいるが、この他に竪穴の周囲を巡るピットなどは検出されなかった。

〔カマド〕竪穴北壁に設けられる。正確な位置は不明であるが、北壁の中央もしくは中央やや東寄りにあたると思われる。右袖部は構築材の灰白色粘土と心材の溶岩礫が残っているが、左袖部は灰白色粘土が周囲に崩れて形状を留めていない。溶岩礫も左袖周辺からは検出されなかった。人為的に破壊された可能性が高い。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を40cmほど外側へ掘り込み斜めに立ち上がる。カマドの右袖先端周辺から竪穴の中央やや東寄りにかけて、床面から10cmほど上層の覆土中にまとまつた径10~40cmほどの溶岩礫を検出した。また、小規模ながら竪穴の西側からもまとまつた溶岩礫を検出した。これらの溶岩礫はカマドの構築材としては、巨大なものが多く、量が多すぎるため、建物廃絶後に外部から持ち込まれたものと考えられる。このような溶岩礫は12号竪穴建物跡にも見られる。

〔遺物出土状況〕カマド右袖部の右側、北壁際の床面から5~10cmほど上層で土師器甕が2点出土し、甲斐型甕(4)とやや小型の駿東型甕(8)が押しつぶされた状態で重なっていた。竪穴南東側からは須恵器の蓋(14)が出土した。カマド内部の遺物は小破片が多く、量も少なかった。

〔その他〕調査区壁の断面からは、本建物跡の上層に表土の直下から掘られた後世の溝状遺構が確認されたが、建物跡の覆土までは達していなかったため、平面では検出されなかった。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

#### 10号竪穴建物跡（遺構：第15・16図、遺物：第50図）

〔位置〕調査区西側の調査区南壁に接するD-E-6・7グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西3.99m、南北不明。南北方向の規模は竪穴南側が調査区外に伸びているため不明であるが、隅丸方形になると思われる。北壁にあるカマド部分が66号土坑を切っている。北西コーナーの辺りで突出している部分は、掘削の際に地山が検出されなかつたため掘り進めたが、漸移的に地山に変わり明確な掘方の形状が捉えられなかつたため、本建物跡に伴う施設等ではないと判断した。

〔検出状況〕残存する壁面の高さは15~25cmであるが、表土より1層下の褐色土層（建物跡セクション図第2層）に削平されている。壁面はやや開きながら立ち上がる。床面は全体的に地山が固く締まっていたが、東壁際からは多量の溶岩礫を検出した。周辺の地山の中にも溶岩礫が多く含まれており、地山から一部が露出しているものも多いため、人為的に組まれたものではないと考えるが、多少は竪穴を掘る際に出た礫を寄せているのかもしれない。柱穴は確認されなかつた。

〔カマド〕竪穴北壁の中央やや東寄りに設けられる。灰白色粘土を多く含んだ覆土を検出したが、袖部は形状を留めていなかつた。火床面は床面より10cmほど低い位置にあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を30cmほど外側に掘り込んで斜めに立ち上がる。カマド前面からは赤化した20cm前後の溶岩礫を検出しているので、灰白色粘土と溶岩礫でカマドを構築していたと考えられ、人為的に破壊されたと推測される。

〔遺物出土状況〕遺物は非常に少なかつた。カマド内部からは甲斐型の土師器甕の底部(4)が出土した。また、北東コーナーに近い床面からは、ほぼ完形の土師器環(1)と土師器甕の口縁部破片(3)が出土した。いずれも甲斐型である。

〔その他〕本建物跡のカマドと北西コーナー付近にある突出部から検出した炭化材の樹種同定を実施し、カマドの炭化材がクヌギ節、突出部がムラサキシキブ属との結果が出ている。

〔時期〕平安時代（9世紀前半）。

#### 11号竪穴建物跡（遺構：第17・18図、遺物：第51・52図）

〔位置〕調査区西側、9号竪穴建物跡から東へ4mほど離れたC-9・10、D-9グリッドに位置する。南から北へ低くなる緩斜面に構築されている。

〔形状・規模〕東西4.33m×南北4.23mのやや南北に長い隅丸長方形。竪穴西壁の北西コーナーに寄った辺りで4号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは52cm。壁面はやや開きながら立ち上がり、東西の壁面では上部が崩落し、段状になっている。床面は全体的に地山が固く縮まっていた。西壁の途中段状になった角の部分に壁外柱穴と思われるピット状の窪みが2カ所ある。残存している部分で推測される直径は、上部が45cm前後、底部が25cm前後で、遺構確認面からピットの底部までの深さは、北側のピットで47cm、南側のピットで38cmである。この他に柱穴は確認されなかった。

〔カマド〕竪穴北壁のほぼ中央に設けられる。灰白色粘土を大量に検出し、内部には溶岩礫を組み合わせた両袖が残っていた。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を掘り込みますにやや傾斜して40cmほど立ち上がってから一旦ピット状に15cmほど窪み、そこから斜めに立ち上がる。灰白色粘土は竪穴中央部の床面上まで広がっていたが、埋没段階の自然流出の範囲に収まると思われ、人為的な破壊の痕跡は認められなかった。

〔遺物出土状況〕カマドを中心にして土師器甕の破片が多く出土した。甲斐型の土師器甕が大勢を占めるが、少數ながら駿東型の小型土師器甕（7）も見られる。床面上からは、甲斐型の土師器壺（1）や比較的大型の須恵器甕（23～25）の破片が出土した。

〔時期〕平安時代（9世紀前半）。

#### 12号竪穴建物跡（遺構：第18・19図、遺物：第52図）

〔位置〕調査区の北西側、11号竪穴建物跡から北へ3mほど離れたB・C-10・11グリッドに位置する。南から北へ低くなる緩斜面に構築されている。

〔形状・規模〕東西3.49m、南北3.17mの隅丸方形。北西コーナーを62号土坑に切られる。

〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは48cm。壁面はやや開きながら立ち上がる。床面は全体的に地山が固く縮まっていた。北壁を除く壁際は軟弱になり、覆土と床面の境界が不明瞭になる。土層断面から周溝の存在は確認されなかった。柱穴は確認されなかった。

〔カマド〕竪穴北壁の東寄りに設けられる。袖部を中心に灰白色粘土を多く検出したが、基部のあたりがかろうじて形状を留めている。右袖には心材の溶岩礫が奥壁から並んで検出されたが、左袖からは奥壁の近くで1点だけ検出された。人為的に破壊された可能性が高い。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を15cmほど外側へ掘り込んで斜めに立ち上がる。カマド前面から竪穴の中央にかけて、径10～50cmほどの溶岩礫を大量に検出した。ほとんどの礫が覆土中層から検出されており、カマド前面では床面上に達するものもあるが、9号竪穴建物跡と同様にカマドの規模に対して、巨大なものが多く、量も多すぎることから、住居廃絶後に外部から持ち込まれたものと考えられる。

〔遺物出土状況〕カマドから駿東型の土師器甕（1）と堀之内原タイプの土師器甕（2・3）が出土したが、建物跡全体としては遺物が少なかった。竪穴の北東コーナーに近い床面から、砂岩の扁平な礫を検出した。加工痕は見られなかったが、上面がほぼ平らになるように置かれた状態で検出されているので、台石として使用されたものかもしれない。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

#### 13号竪穴建物跡（遺構：第20図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区北側のJ-11・12グリッドに位置する。南から北へ低くなる傾斜面に構築されている。

〔形状・規模〕東西3.69m、南北2.79m。東西方向が長い隅丸長方形。

〔検出状況〕遺構確認面から床面までの深さは31cm。壁面はやや開きながら立ち上がる。床面は全体的に地山

が固く締まっていたが、壁際は軟弱になり、東壁と南壁付近では地山から溶岩礫の露出が見られる。南東コーナーと南西コーナー際の床面から柱穴と考えられるピットを検出した。いずれもスコリアを多く含む地山が崩れて形状が不明瞭であるが、ピットの直径は15cm前後で、床面からの深さは5~10cmほどである。北東コーナーと北西コーナーでピットは検出されなかったが、両コーナーともに周囲に比べて5cm程度低く窪んでいるので、柱穴が存在したことが推測される。

〔カマド〕竪穴北壁の中央やや東寄りに設けられる。袖部に灰白色粘土が集中して残っているが、心材と思われる溶岩礫はカマド前面やカマドの覆土上層に浮いた状態で検出されており、人為的に破壊されていると推測される。火床面は竪穴の床面より5cmほど低い位置にあり、地山が焼土化していた。奥壁は竪穴の壁を20cmほど外側へ掘り込み斜めに立ち上がる。

〔遺物出土状況〕やや東に寄った南壁際の床面から甲斐型の土師器環（1）が出土した。カマドから甲斐型の土師器甕（2）が出土した。駿東型土師器甕の胸部破片（3）も出土しているが、全体的に遺物の量は少なかった。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

## 2. 掘立柱建物跡

### 1号掘立柱建物跡（遺構：第21図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区東側、3号竪穴建物跡と7号竪穴建物跡に挟まれたN~P-10・11グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西約6m×南北約4mの東西に長い長方形。全体としては、南北方向2間、東西方向3間となる総柱型の掘立柱建物跡であるが、西側を除いて梁間の建物内部に配置される柱が2本（4間）になる。柱間距離は2mであるが、梁間は変則的に配置され、1~2mとなる。柱穴の遺構確認面からの深さは約25~50cm。

〔検出状況〕建物内部の柱が2本になる部分の柱間は均等ではなく、pit 7~10間は不規則であるものの、基本的には内部の柱同士がより近い距離になるよう配置され、側柱との柱間が1.5m、内部2本の柱間が1mの間隔で配置されている。本来中間に1本配置するものを2本に分けているような印象を受ける。柱穴の掘方は、地山が崩落して不整形の平面形となっているものがほとんどであるが、pit 4・7などは方形の形状を留めており、他の柱穴も方形の掘方であった可能性が高い。

〔遺物出土状況〕pit 1から甲斐型の土師器環の底部破片（1）が、pit 14から堀之内原タイプの土師器甕の口縁部破片（2）が出土した。

〔その他〕調査区反転して調査を行ったため、北側の柱穴列の一部は測量データを合成してある。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

### 2号掘立柱建物跡（遺構：第22図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区東側、6号竪穴建物跡南東側のP・Q-8・9グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西約4m×南北約4mの方形。北西隅の柱穴部分が6号竪穴建物跡と重複しているが、建物跡の覆土中に柱穴を確認することはできなかった。しかし覆土が酷似しているため新旧関係は不明である。東西方向2間、南北方向3間の側柱型になるであろう。柱間距離は東西方向が約2m、南北方向が約1.2~1.3m。柱穴の遺構確認面からの深さは約15~30cm。

〔検出状況〕柱穴の掘方はすべて不整円形であった。円形の掘方と推測される。

〔遺物出土状況〕pit 2から駿東型の土師器甕の口縁部破片（1）が、pit 3から堀之内原タイプの土師器甕の口縁部破片（2）が出土した。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

### 3号掘立柱建物跡（遺構：第22図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区北西隅の調査区西壁に接するA-10・11グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西不明、南北約4.5m。東西方向は調査区外へ伸びているため正確な規模は不明であるが、2間以上となる。南北方向は柱間を数えれば3間となるが、内側の2本の距離が短く配置されている。1号掘立柱建物跡に見られる状況に似ているが、こちらは側柱型という点が異なる。柱間距離は、東西方向が約2.1～2.2m、南北方向が南から約1.8m、約0.9m、約1.8m。柱穴の遺構確認面からの深さは約35～65cm。

〔検出状況〕柱穴の掘方はpit1とpit2が東西にやや長い隅丸の長方形となり、他の柱穴は不整円形であるが、本来は方形の掘方であった可能性が高い。

〔遺物出土状況〕pit5から甲斐型の胎土に似た土師器表の口縁部破片（1）が出土した。この他に複数の柱穴から駿東型土師器表の小破片が出土した。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

### 4号掘立柱建物跡（遺構：第23図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区北西隅の調査区北壁に接するB-C-11・12グリッドに位置する。

〔形状・規模〕東西約4.8～5.0m×南北約4m。やや東西方向に長い長方形。pit2～pit7間がやや長く西側に膨らむ。東西方向は北側が2間、南側が3間、南北方向2間の側柱型。東西方向南側の配置は1号掘立柱建物跡や3号掘立柱建物跡でも見られる内側2本の柱の距離を短く配置するタイプである。pit1とpit4が調査区北壁に接しているが、柱穴がpit1・4・7よりもさらに北側に配置されることはないであろう。柱間距離は東西方向の北側が西から約1.8m、約3.0m、南側が約1.9m、約1.2m、約1.7m。南北方向は概ね1.8m前後になる。柱穴の遺構確認面からの深さは、約35～60cm。

〔検出状況〕柱穴の掘方はpit5が隅丸の方形、pit1・4・8が隅丸の長方形となるが、pit1とpit8は長軸が東側へ傾く。他の柱穴の本来は方形もしくは長方形であった可能性が高い。pit3・5・6・8などでは、柱穴底部の柱が設置されていた地点が5～15cmほど沈んでおり、土層断面でも柱の部分と根固めの埋め土部分が確認された。これらの状況から柱の直径は15～20cmほどと推測される。

本遺構の確認面より20cm上層で10～40cmほどの溶岩礫がまとまって検出されたが、遺物を伴わず、本遺構に関係するものか不明である。

〔遺物出土状況〕pit1の覆土上層から溶岩礫を加工した筒状の破片（1）が出土した。この他に複数の柱穴から甲斐型や駿東型土師器表の小破片が出土した。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

### 3. 溝状遺構

溝状遺構は全体で34条発見した。この内、奈良・平安時代の包含層から掘り込まれたものは7条あり、ここで個別に報告する。

残りの27条は表土の耕作土直下の基本土層第II層から掘り込まれるものである（II層7・13号溝状遺構は欠番）。北側を除く調査区全体から検出されている。北側で検出されない理由は、現在の地表付近に比べて遺構確認面（奈良・平安時代の地表面）が北側に向かって低くなっていることから遺構の掘り込みが達していないためと推測される。このため、9号竪穴建物跡の調査区西壁と接する部分の土層断面では、遺構確認面よりも上層で溝状遺構の底部を確認している。平面の規模は幅が50～60cmほどで統一されるが、長さがおよそ200～600cmまで様々である。溝の方向は東西方向と南北方向の2種類に分かれ、いずれも軸線が20～30度ほど方位から反時計回りに振れています。遺構確認面からの深さは50cmほどであるが、9号竪穴建物跡の土層断面では、75cmほどの深さを確認している。側面と両端をほぼ垂直に掘り込む箱掘りで、その形状から水を流す溝ではなく

く、土坑に近い性質の遺構ではないか（もしくは溶岩などを確認するための試掘溝か）と考えられる。遺物はほとんど出土せず、流れ込みと思われる土師器の小破片程度である。時期は基本土層から判断して江戸時代中期以降と推測される。同様の遺構は都留市の山梨原遺跡や鷹の巣遺跡でも発見されている。II層の溝状遺構については一覧表（第表）にして掲載する。

なお、II層から掘り込まれる遺構は、溝状遺構と土坑が確認されており、いずれも全体図等の遺構番号の前に「II」を付して表記した。

### 1号溝状遺構（遺構：第24図、遺物：第53図）

【位置】調査区南側のJ-2・4~6、K-3・4グリッドに位置する。

【形状・規模】調査区南端を西から東へ流れていた旧河川に接続し、K-3グリッドの辺りで北北東から北北西へ曲がり調査区の中央付近J-6グリッドまで伸びる。幅は30~90cmほどで、遺構確認面からの深さは10~32cm。断面形状はU字型の毛抜掘りと思われる。K-3・J-5グリッドでII層から掘り込まれる溝状遺構に切られる。長さは約23.5m。

【検出状況】覆土に流水の痕跡を示す砂などの堆積は見られなかったが、調査区南側を流れていた河川から取水するための溝と推測され、さらに北側へ伸びていたと考えられる。また、旧河川が検出された調査区の南側境界には現在も西から東へ流れる水路が存在している。この水路を上流へたどると、家中川と寺川が分岐する地点のやや下流で寺川から取水されている。十日市場大堰が開削された江戸時代初期以前の奈良・平安時代から現在の水路の通るあたりに河川が存在した可能性が高い。

【遺物出土状況】堀之内原タイプの土師器裏の口縁部破片（1）や灰釉陶器の碗（2）が出土した。また、旧河川の覆土中からは奈良時代（8世紀後半）（3）の甲斐型土師器壺が出土した。

【時期】奈良・平安時代（8世紀後半～）。出土遺物に時期差があることから、長期間機能していたと推測される。

### 2号溝状遺構（遺構：第24図）

【位置】調査西側の9号竪穴建物跡と11号竪穴建物跡に挟まれたB-9グリッドに位置する。

【形状・規模】長さは220cm。長軸は東西方向を向き、東から北へ27度ほど振れる。幅は46~80cmと一定しない。底面も歪で中間地点の北側にピット状の窪みがある。遺構確認面からの深さは50~56cmで、ピット状の窪み部分は68cm。

【検出状況】溝の両端が若干深くなり、土層断面でも両端が分かれることから、複数の土坑間の地山が崩落している可能性も考えられる。時期を特定できるような遺物は出土しなかった。

【時期】時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

### 3号溝状遺構（遺構：第25図）

【位置】調査区西側、9号竪穴建物跡の北東コーナーに近いB-10グリッドに位置する。

【形状・規模】長さは184cm。長軸はほぼ東西方向を向き、東から北へ16度ほど振れる。幅は両端が広がり最大で71cm。底部は両端が土坑状に窪み、中間部分は浅くなっている。遺構確認面からの深さは東側が63cm、西側は54cm。

【検出状況】土層断面からも両端が分かれるので、2基の土坑の間の地山が崩落している可能性も考えられる。

【遺物出土状況】甲斐型土師器裏の小破片が少量出土した。

【時期】時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

#### 4号溝状遺構（遺構：第24図）

〔位置〕 調査区西側、11号竪穴建物跡の北西コーナーに近い西壁周辺、C-9 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕 長軸は東西方向を向くと思われるが、東側で11号竪穴建物跡と重複しているため長さは不明である。覆土が酷似しているため、11号竪穴建物跡との新旧関係も確認できなかった。幅は80cmで、遺構確認面からの深さは49cm。断面形状は垂直に掘り込まれているが、底部は凹凸があり、北西隅が低くなる。

〔検出状況〕 土坑の可能性も考えられるが、土層断面では、11号竪穴建物跡に接する部分で一旦立ち上がり、さらに東側へ伸びる状況が窺えるため、溝状遺構と判断した。

〔遺物出土状況〕 甲斐型の土師器壺と土師器甕の小破片が少量出土した。

〔時期〕 時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

#### 5号溝状遺構（遺構：第25図）

〔位置〕 調査区中央西寄りのG-7 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕 長さは298cm。長軸は南西北東方向を向く。幅は南西側で38cmと最も広く、北東側では狭くなる。遺構確認面からの深さは南西側が最も深く32cm、北東端部は次第に浅くなっている。断面はやや開きながら立ち上がる、南西側の端部付近で116号土坑と重複し、切られている。

〔検出状況〕 溝底部付近には砂礫が多く含む土壙が堆積しており、流水の痕跡と見られる。

〔遺物出土状況〕 溝底部付近の砂礫層中から甲斐型の土師器壺や土師器甕、須恵器壺の小破片が少量出土した。

〔時期〕 時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

#### 6号溝状遺構（遺構：第25図）

〔位置〕 調査区の北東壁に近いO-11・12 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕 長軸は南北方向を向き、北から西へ26度ほど振れる。掘り込みが確認できた範囲での長さは577cmであるが、さらに南北に伸びていたと思われる。幅は最大で122cm、北側へ進むほどが細くなる。遺構確認面からの深さは12cmであるが、やはり北側へ進むほど浅くなる。断面は底部が広く平坦で、緩やかに立ち上がる。

〔検出状況〕 底部の立ち上がり付近に砂礫を多く含んでおり、流水の痕跡と見られる。南側の延長線上にある1号掘立柱建物跡や7号竪穴建物跡周辺の地山上部にも砂礫が見られたが、明確なプランを捉えることができなかった。洪水時などの自然流路の可能性も考えられる。

〔遺物出土状況〕 須恵器の甕や駿東型と見られる土師器甕の小破片が少量出土した。

〔時期〕 時期は不明であるが、覆土の色調などから奈良・平安時代と推測される。

#### 7号溝状遺構（遺構：第25図、遺物：第54図）

〔位置〕 調査区中央やや北寄りのJ-9・10、K-10 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕 長軸は南北方向を向き、北から東へ16度ほど振れる。掘り込みが確認できた範囲での長さは775cmであるが、南側は調査区反転時の遺構確認面の高低差で失われたと思われ、北側は地山に溶岩礫が大量に含まれてプランが捉えられなくなる。おそらく南北に伸びていたと推測される。幅は30～95cmほどで定まらないが、全体的には南から北へ進むほど広がっている。断面はU字状の毛抜掘りと思われる。遺構確認面からの深さは、15cm～20cmほどである。

〔検出状況〕 覆土下層にやや砂礫が含まれており、流水のあった可能性が高い。南側の延長線上には1号溝状遺構があり、つながっていた可能性も考えられる。

〔遺物出土状況〕 駿東型の土師器甕の口縁部（1）、甲斐型の土師器甕の口縁部（2）、須恵器の壺の底部（3）

などが出土した。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。1号溝状遺構につながっていたとすれば、平安時代まで機能していた可能性もある。

#### 4. 土坑・ピット

土坑は全体で134基発見した（37～39・42～47・74・83・118号土坑は欠番）。この内、覆土が褐色土で構成され明確に基本土層第II層から掘り込まれたと判断される土坑を6基確認した。残る129基は覆土が奈良・平安時代の遺物包含層である基本土層第III層と同様の黒褐色土で構成されており、概ね該期に含まれる遺構と考えられるが、30・40・41号土坑など遺構確認面からの深さが10cm未溝の土坑や青磁片が出土した土坑もあり、奈良・平安時代以降になるものもいくらかは含まれていると推測される。

土坑は、直径100～200cmほどの円形の平面形状となるものが大半を占め、中でも直径130cm前後の土坑が多く見られる。調査区の中央部を南北に縱断するようにまとまって分布する傾向が窺える。

ピットは7基を発見したが、覆土から全て奈良・平安時代のものと推測されるものの、遺物は出土せず、規則的な配列も見られなかった。

ここでは、時期の特定できる遺物が出土した土坑や、土壤理化学分析を実施した土坑について個別に報告し、それ以外の土坑やピットについては一覧表（第表）にして掲載する。

#### 5号土坑（遺構：第27図）

〔位置〕調査区南西側のJ-5グリッドに位置する。

〔形状・規模・検出状況〕平面はほぼ円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺構確認面から13cmほどで中央部に溶岩礫が現れ、36～52cmの深さで底面のほぼ全てが溶岩礫で埋めつくされる。底面のごく一部で地山の土を検出したが、溶岩礫は地山のさらに下層にまで入り込んでいたので、地山に含まれるものと考えられる。長軸125cm、短軸117cm、遺構確認面からの深さ52cm。

〔遺物出土状況〕遺物は出土しなかった。

〔その他〕覆土中から検出した炭化材2点の炭素14年代測定と樹種同定を実施し、年代測定で7世紀末～8世紀後半および8世紀前半～9世紀中頃、樹種同定で2点ともヤマガワ近似種との結果が出ている。

〔時期〕奈良・平安時代。周辺の遺構の年代から7世紀末までは遡らないと思われる。

#### 11号土坑（遺構：第27図、遺物：第54図）

〔位置〕調査区南西側のJ-4グリッドに位置する。

〔形状・規模〕平面はほぼ円形で、断面形状は箱型である。長軸105cm、短軸89cm、遺構確認面からの深さ59cm。

〔遺物出土状況〕遺構確認面から覆土上層の北側を中心に堀之内原タイプの土師器甕（1・2）が出土した。内外面をナデ調整する胴張型の甕である。細かい破片となって出土し、形状を留めていなかったが、接合作業により上半部が復元された。また、接合はしなかったが、同一個体と思われる底部も出土した。

〔その他〕土坑墓ではないかと考えられたため、土壤理化学分析を実施したが、遺体埋納を支持する結果は得られなかった。

〔時期〕奈良時代（8世紀後半）。

#### 15号土坑（遺構：第27図）

〔位置〕調査区南西側のH-I-4・5グリッドに位置する。

〔形状・規模・検出状況〕 平面はほぼ円形で、断面形状は底面が平坦なU字型である。南西側の底面を半裁の段階でやや掘りすぎたが、底面より下層の地山に溶岩礫が多く含まれる状況を確認した。長軸137cm、短軸118cm、遺構確認面からの深さ49cm。

〔遺物出土状況〕 遺物は出土しなかった。

〔その他〕 土坑の形状から土坑墓の可能性が考えられたため、土壤理化学分析を実施した。地山に比べて腐植含量とリン酸含量がやや高い傾向を示したが、遺体埋納を支持する結果には至らなかった。

〔時期〕 不明。

#### 16号土坑（遺構：第27図）

〔位置〕 調査区南西側のH-4・5グリッドに位置する。20cmほど離れた東側に15号土坑がある。

〔形状・規模・検出状況〕 平面はほぼ円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺構確認面から40cmほど深い底面全体に径10～20cmほどの溶岩礫が現れる。溶岩礫を検出した当初は集石遺構の類ではないかと考えたが、溶岩礫が土坑の壁面よりも外側に広がって堆積している状況が看取できたため、地山に含まれる溶岩礫と判断した。長軸150cm、短軸140cm、遺構確認面からの深さ53cm。

〔遺物出土状況〕 遺物は出土しなかった。

〔その他〕 土坑の形状から土坑墓の可能性が考えられたため、土壤理化学分析を実施した。15号土坑と同様に地山に比べて腐植含量とリン酸含量がやや高い傾向を示したが、遺体埋納を支持する結果には至らなかった。

〔時期〕 不明。

#### 23号土坑（遺構：第27図、遺物：第54図）

〔位置〕 調査区南西側のG-5グリッド位置する。

〔形状・規模〕 平面はやや不整な円形。底面は凹凸があり、北側がやや低くなる。壁面は開きながら立ち上がる。西側を除いて壁面上部を試掘トレーナーで失っている。西側で26号土坑を切っている。長軸97cm、短軸86cm、遺構確認面からの深さ50cm。

〔遺物出土状況〕 土坑底面より10cmほど上層から駿東系の土師器甕の底部（1）が出土した。器壁が非常に薄く、不鮮明であるが内外面をナデ調整していると思われ、両面に輪積みの痕跡が残る小型甕である。典型的な駿東型の甕とは異なるものであるが、緻密で橙色の明るい色調の胎土から駿東系の土師器と考えられる。

〔時期〕 奈良時代（8世紀後半）

#### 24号土坑（遺構：第27図、遺物：第54図）

〔位置〕 調査区中央西寄りのG-6・7グリッドに位置する。

〔形状・規模〕 平面は南北に細長いやや不整な楕円形。長軸は南北方向を向き、北から西へ19度振れる。断面形状は底面がほぼ平らで、壁面はやや開きながら立ち上がる。長軸165cm、短軸74cm、遺構確認面からの深さ24cm。

〔遺物出土状況〕 土坑全体の覆土上層から中層にかけて甲変型の土師器环（1）や堀之内原タイプの土師器甕の底部（2）が破片となって出土した。

〔その他〕 土坑の形状や遺物の出土状況から土坑墓の可能性が高いが、本調査においてこのように平面が楕円の土坑は他に発見されなかった。

〔時期〕 奈良時代（8世紀後半）

### 79号土坑（遺構；第29図、遺物：第54図）

〔位置〕 調査区中央北側のG-11 グリッドに位置する。

〔形状・規模〕 平面はやや卵形の円形。断面形状は底面の平坦な袋状となる。長軸 128cm、短軸 115cm。遺構確認面からの深さ 62cm。

〔検出状況〕 壁面上部は溶岩礫を多く含むためにくびれないと推測され、初めから袋状の断面形状を意識して土坑が構築されたものではないと思われる。

〔遺物出土状況〕 覆土上層から陽刻鎬連弁文の青磁碗（1）の破片が出土した。この破片は 115 号土坑出土の破片と接合した。

〔時期〕 中世（13～14世紀）

### 115号土坑（遺構；第31図、遺物：第54図）

〔位置〕 調査区中央東寄りのF-9 グリッドに位置する。79号土坑から約 10 m 南西方向に離れた地点である。

〔形状・規模〕 平面はほぼ円形。底面からは溶岩礫が露出している。壁面はやや開きながら立ち上がる。長軸 121cm、短軸 113cm、遺子確認面からの深さ 48cm。

〔遺物出土状況〕 覆土中層から青磁碗（1）の破片が出土し、79号土坑出土の破片と接合した。

〔時期〕 中世（13～14世紀）

## 5. 遺構外出土遺物（第55図）

遺構外からも奈良・平安時代の遺物が出土している。調査区南側や東側では、現地表の耕作土によって遺物包含層が削平されているため、遺構外の遺物の量は少ないが、遺構確認面が北側へ向かって低く傾斜していく調査区の北側では、包含層が厚く堆積しており、遺物も多く出土した。小破片のものがほとんどであったが、墨書き見られるものや器形がある程度把握できるものについて図示した。

墨書き土器は非常に少なく、竪穴建物跡などの遺構からは全く出土していない。遺物包含層から出土した墨書き土器も 3 点のみである。墨書きは甲斐型の土師器壺（1）と土師器皿（2・3）に見られた。壺は外面体部に「人」が、皿は外面の体部から底部にかけて「長」と書かれたものと、底部に判読不能の文字が書かれたものがある。いずれも平安時代の 10 世紀前半の土器である。「長」の文字が書かれた土器は昭和 56 年の都留市教育委員会の発掘調査でも多く出土している。

墨書き土器の他には、甲斐型の土師器壺（4・5）・皿（6・7）・羽釜（9）、堀之内原タイプの土師器甕（8）、須恵器の甕（10）などが見られ、時期としては奈良・平安時代（8世紀後半～10世紀前半）の範囲に収まる。

図示した遺物は、全て調査区の南西側から出土したもので、南側や南西側の調査区外から流れ込んだものが多く含まれていると推測される。

第1表 溝状造構一覧表

溝No	図	位置	断面形状	長さ (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	備 考
1	24	J-2・4～6、K-3・4	毛抜掘り	23.5	0.9	0.32	II層1・2溝に切られる。
2	24	B-9	不定形	2.2	0.8	0.68	底面にピット状の窪み。
3	25	B-9	不定形	1.84	0.71	0.63	溝の両端が窪む。
4	24	C-9	不定形		0.8	0.49	11号建物跡と重複。
5	25	G-7	毛抜掘りか	2.98	0.38	0.32	116号土坑に切られる。
6	25	O-11・12	底面が広く平坦	5.77	1.22	0.12	
7	25	J-9・10、K-10	毛抜掘り	7.75	0.95	0.2	
II 1	25	J・K-3	箱掘り	2.7	0.573	0.278	1号溝を切る。
II 2	25・27	J-5	箱掘り	2.199	0.651	0.394	1号溝、18号土坑を切る。
II 3	25	I-4	箱掘り	3.402	0.549	0.217	II層1号土坑を切る。
II 4	25	M-8	箱掘り	3.43	0.629	0.349	31号土坑を切る。II層6号溝と重複する。
II 5	25	M-8・9	箱掘り	3.154	0.715	0.434	
II 6	26	M-8・9	箱掘り	2.29	0.493	0.406	II層4号溝と重複する。
II 7	—	(M-10)					擾乱と判明したため欠番
II 8	26	N-9	箱掘り	1.426	0.675	0.157	35号土坑を切る。II層9号溝と重複する。
II 9	26	N-9	箱掘り	3.621	0.822	0.538	4号建物跡・35号土坑を切る。
II 10	26	N-8	箱掘り	2.033	0.551	0.128	4号建物跡を切る。
II 11	26	R-9・10	箱掘り	5.702	0.53	0.505	
II 12	—	N-10	箱掘り	4.17	0.528	0.454	3号建物跡を切る。
II 13	—	(N-10)	箱掘り				碍子等が出土したため欠番
II 14	28	L-10・11	箱掘り	3.796	0.838	0.674	深さは土層断面で確認
II 15	26	M・N-10、N-9	箱掘り	2.318	0.569	0.144	3号建物跡を切る。II層16号溝と重複する。
II 16	—	N-9	箱掘り	0.51	0.532	0.049	II層15号溝と重複する。試掘トレンチで一部失われている。
II 17	26	N・O-9	箱掘り	3.144	0.712	0.447	試掘トレンチで一部失われている。
II 18	26	M-9・10	箱掘り	2.88	0.506	0.46	49号土坑を切る。擾乱(II層7号溝)に切られる。
II 19	26	N-8	箱掘り	2.829	0.69	0.414	
II 20	—	D・E-8・9	箱掘り	2.589	0.546	0.383	溶岩礫の多い地山を掘り込んでいる。
II 21	—	G・H-7・8	箱掘り	3.543	0.711	0.592	
II 22	—	G・H-8	箱掘り	2.501	0.607	0.253	
II 23	—	G・H-9	箱掘り	3.531	0.566	0.184	
II 24	26	G-10	箱掘り	3.402	0.537	0.217	
II 25	—	H・I-9	箱掘り	2.15			92号土坑を切る。試掘トレンチで一部失われている。
II 26	26	E・F-7	箱掘り	2.206	0.665	0.449	
II 27	26	L-10・11	箱掘り	2.28	0.655	0.217	
II 28	26	N-11	箱掘り	2.218	0.847	0.237	135号土坑を切る。
II 29	26	N-11・12、O-11	箱掘り	2.52	0.497	0.202	

第2表 土坑一覧表

(単位:m)

土坑 No.	図	位置	平面形状	長 組	短 組	深 さ	備 考
1	27	I - 3	円形	0.64	0.625	0.269	
2	27	I - 3	円形	1.576	1.444	0.45	
3	27	K - 4	円形	1.054	0.94	0.37	試掘トレンチと重複
4	27	K - 5	円形	0.826	0.811	0.257	
5	27	J - 5	椭円形	1.252	1.171		試掘トレンチと重複
6	27	I - 3	不整形	1.549	0.78	0.293	
7	27	I - 4	円形	0.746	0.635	0.4	
8	27	I - 4	円形	0.72	0.699	0.589	
9	27	I - 4	椭円形	0.731	0.685	0.325	
10	27	J - 4	円形	0.695	0.607	0.35	
11	27	J - 4	円形	1.045	0.888	0.608	
12	27	I + J - 4, I + J - 5	円形	1.176	1.172	0.417	I3 土と重複
13	27	I - 4 + 5	円形	1.323	1.086	0.342	I2 土と重複
14	27	I - 4 + 5	円形	1.342	1.293	0.37	
15	27	H - 4 + 5, I - 4	円形	1.366	1.177	0.49	
16	27	H - 4 + 5, I - 4	円形	1.504	1.395		
17	27	I - 5	円形	0.972	0.862	0.432	
18	27	I - 5	椭円形	1.384	0.931	0.543	II層 2溝と重複
19	27	I - 5	円形	1.277	1.174	0.235	
20	27	J - 5	椭円形			0.4	
21	27	G - 6 + 7, H - 6 + 7	円形	1.16	1.061	0.75	
22	27	G - 6	円形	1.44	1.323	0.369	
23	27	G - 5	円形	0.973	0.86	0.5	26 土と重複
24	27	G - 6 + 7	椭円形	1.653	0.737	0.244	
25	28	I - 5	椭円形	0.708	0.48	0.3	
26	27	G - 5	円形	0.792	0.758	0.262	23 土と重複
27	28	M - 5	円形	1.325	1.279	0.254	
28	28	L + M - 6	円形	1.848	1.77		試掘トレンチと重複
29	28	K + L - 7	円形	0.707	0.603	0.106	
30	28	L - 7	円形	0.911	0.875	0.038	
31	28	M - 8	円形	1.607	1.568	0.42	II層 4溝、4 ピットと重複
32	25	M - 8 + 9	円形	1.256	1.161	0.259	
33	28	L + M - 10	椭円形	1.365	1.246	0.15	
34	28	M - 9 + 10	円形	1.331	1.296		
35	26	N - 9	椭円形	1.841	1.54	0.343	II層 8溝と重複、II層 9溝と重複
36	—	L - 5	円形	1.241	1.102	0.242	
37	—						欠番
38	—						欠番
39	28	N - 9	円形	1.617	1.526	0.303	試掘トレンチと重複
40	—	O + P - 8	円形	1.324	1.288	0.127	
41	28	O - 7	円形	0.934	0.896	0.073	
42	—						欠番
43	—						欠番
44	—						欠番
45	—						欠番
46	—						欠番
47	—						欠番
48	28	Q - 10	円形	1.078	1.03	0.432	
49	28	M - 9	椭円形			0.3	II層 18溝、試掘トレンチと重複
50	28	Q + R - 9	椭円形	1.422	1.141	0.278	
51	28	Q + R - 8	椭円形	0.794	0.713	0.156	
52	28	R - 8 + 9	椭円形	1.283	1.05	0.397	

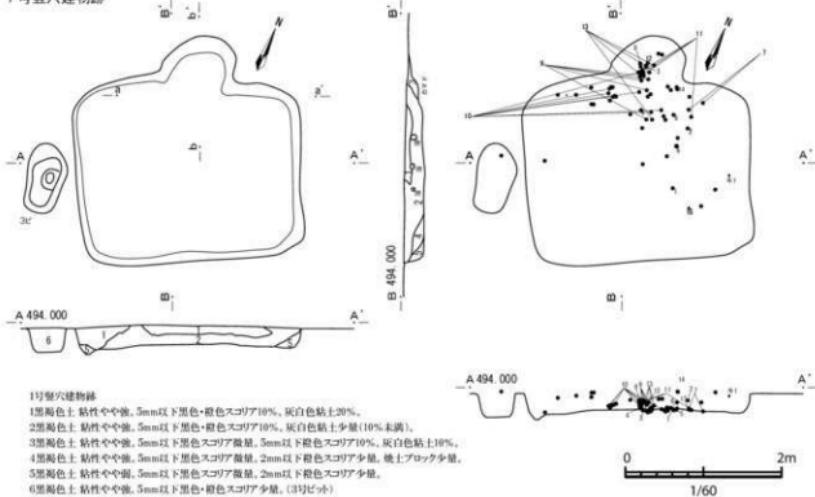
(単位:m)

土坑 No.	図	位置	平面形状	長 組	短 組	深 さ	備 考
53	28	P - 11	椭円形	1.649	1.079	0.838	
54	28	I - 7 + 8	椭円形	1.369	1.166		
55	28	I - 8	円形	0.826	0.79	0.214	
56	28	C - 7	椭円形	0.887	0.776	0.396	
57	28	B + C - 7	円形	0.604	0.576	0.247	
58	28	C - 7	椭円形	0.897	0.633	0.443	
59	28	B + C - 8	椭円形	1.004	0.798	0.437	
60	28	B - 8	円形	0.863	0.83		
61	29	B - 9	円形	0.745	0.681	0.416	
62	29	B - 11	円形	1.436	1.3	0.548	12号建物と重複、試掘トレンチと重複
63	29	B - 11	椭円形	1.255	1.13	0.274	試掘トレンチと重複
64	29	C - 11	椭円形	0.962	0.833	0.286	
65	29	C + D - 10 + 11	椭円形	1.442	1.23	0.278	
66	15	D - 6 + 7	椭円形	0.634	0.532	0.246	10号建物と重複
67	29	D - 10	円形	0.847	0.777	0.194	
68	29	E - 10 + 11	椭円形	0.741	0.694	0.492	
69	29	F - 10	円形	1.534	1.471	0.473	
70	29	E + F - 11	円形	1.502	1.493	0.47	72土と重複
71	29	F - 11	円形	1.387	1.293	0.51	
72	29	E - 11	円形	1.102	1.098	0.246	70土と重複
73	29	E + F - 11	円形	1.313	1.261	0.887	
74	—						欠番
75	29	F + G - 10 + 11	椭円形	1.349	1.094		76土と重複
76	29	F + G - 10, G - 11	円形	1.056	0.789	0.119	75土と重複
77	29	F + G - 11	円形	0.884	0.781	0.173	
78	29	G - 11	円形	1.086	1.024	0.1	
79	29	G - 11	円形	1.28	1.153	0.615	
80	29	F - 11	円形	1.244	1.101	0.356	
81	29	G + H - 10	円形	0.983	0.918	0.107	
82	29	G + H - 10	円形	1.668	1.577	0.798	
83	—						欠番
84	29	F - 12	円形	0.837	0.746	0.24	
85	30	F + G - 12	円形	0.839	0.804	0.142	
86	30	G - 12 + 13	椭円形	1.025	0.765	0.125	試掘トレンチと重複
87	30	G - 12	円形	1.886	1.823		
88	30	G - 12	円形	1.274	1.141	0.978	試掘トレンチと重複
89	30	G + H - 11 + 12	円形	1.396	1.292	0.591	90土、試掘トレンチと重複
90	30	G + H - 11	円形				89土、90土と重複
91	30	H - 11	円形	0.955	0.801	0.379	90土と重複
92	30	H - 9 + 10	円形	1.548	1.464	0.55	試掘トレンチと重複
93	—	I - 10 + 11	円形	1.255	1.024	0.427	第2地点調査区壁にかかる
94	30	I - 10	椭円形	1.581	1.312	0.752	第2地点調査区壁にかかる
95	30	F - 8	椭円形	0.923	0.849	0.261	試掘トレンチと重複
96	30	F - 8	円形	0.68	0.604	0.236	
97	30	F - 8	円形	0.648	0.584	0.324	
98	30	F - 8 + 9	椭円形	0.736	0.628	0.286	
99	30	F + G - 8	円形	0.592	0.5	0.178	
100	30	F + G - 8	円形	0.639	0.621	0.396	
101	30	G - 8	円形	0.68	0.498	0.364	
102	30	G - 8	円形	0.755	0.709	0.356	試掘トレンチと重複
103	30	E + F - 8	円形	1.122	1.028	0.305	
104	30	E - 8	円形	0.767	0.74	0.359	

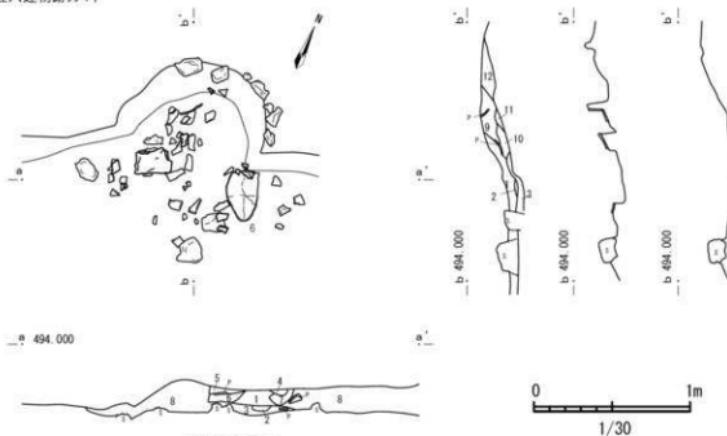
(単位:m)

土坑 No.	図	位置	平面形状	長 組	短 組	深 さ	備 考
105	30	F - 7	円形	1.546	1.356	0.51	106 土と重複
106	30	F - 7	円形	1.054	0.847	0.5	105 土と重複
107	30	G - 7	円形	0.76	0.659	0.399	112 土と重複
108	31	G - 7	円形	1.07	0.947	0.46	110 土と重複
109	31	G - 7 + 8	円形	1.18	1.107	0.39	110 土と重複
110	31	G - 7	円形			0.4	109 土と重複
111	31	G - 7	円形	0.806	0.701	0.136	
112	31	G - 7	不整形	1.047	0.613	0.316	107 土と重複
113	31	F + G - 7	不整形	1.429	0.924	0.322	
114	31	F - 7	椭円形	0.92	0.698	0.422	
115	31	F - 9	円形	1.207	1.13	0.48	
116	25	G - 7	椭円形	0.702	0.554	0.183	5溝と重複
117	31	J - 9	円形	0.921	0.858	0.175	
118	—						欠番
119	31	J - 10	円形	1.34	1.268	0.365	
120	31	I + J - 11	円形	1.339	1.254	0.422	
121	31	I - 12	円形	0.942	0.878	0.094	122 土と重複
122	31	I - 12	円形	1.278	1.209	0.494	121 土と重複
123	31	I - 12	円形	1.227	1.11	0.358	
124	31	H - 13	円形	1.117	1.092	0.216	
125	31	I + J - 13	円形	1.607	1.507	0.92	126 土と重複
126	31	J - 13	円形				125 土、127 土と重複
127	31	J - 13	円形	1.556	1.449	0.691	126 土と重複
128	31	J - 13 + 14	円形	1.428	1.312	0.757	
129	31	J - 13	円形	1.229	1.14	0.217	
130	32	J + K - 13	椭円形	1.816	1.419	0.552	
131	32	K - 11 + 12	椭円形	1.553	1.218	0.382	9 ビットと重複
132	32	K - 11	椭円形	0.791	0.602	0.337	
133	32	K - 13	円形	1.197	1.134	0.164	134 土と重複
134	32	K - 13	円形	1.376	1.307	0.274	133 土と重複
135	26	N - 11	円形	1.38	1.258	0.129	II層 28 溝と重複
136	32	N - 12	円形	0.608	0.545	0.232	試掘トレンチと重複
137	32	K - 10	円形	1.272	1.134	0.18	第3地点調査区壁にかかる
138	32	I + J - 10 + 11	円形	1.542	1.5	0.584	
139	32	L + M - 12 + 13	円形	1.412	1.29	0.259	140 土と重複
140	32	L + M - 12 + 13	円形	1.547	1.464	0.376	139 土と重複
II 1	25	I - 4	不整形	0.959	0.787	0.438	II層 3溝と重複
II 2	32	G + H - 5	円形	1.128	0.975	0.469	
II 3	32	D - 10	円形	1.429	1.485	0.444	
II 4	32	F - 10	円形	1.448	1.413	0.298	
II 5	32	G - 10	円形	1.524	1.348	0.282	
II 6	32	H - 11		1.165		0.19	
1 p	25	I - 4	円形	0.375	0.362	0.155	II層 3溝と重複
2 p	—	I - 7	円形	0.57	0.53	0.492	
3 p	—	K - 8	椭円形	0.898	0.513	0.5	深さは断面図で確認
4 p	28	M - 8	円形	0.42	0.404	0.182	31 土と重複
5 p	25	M - 9	円形	0.416	0.4	0.179	II層 5溝と重複
6 p	25	M - 9	円形	0.464	0.389	0.232	
7 p	—						欠番
8 p	—	G - 12	椭円形	0.519	0.4	0.066	試掘トレンチと重複
9 p	32	K - 11	椭円形	0.548	0.506	0.184	131 土と重複

1号竪穴建物跡



1号竪穴建物跡カマド

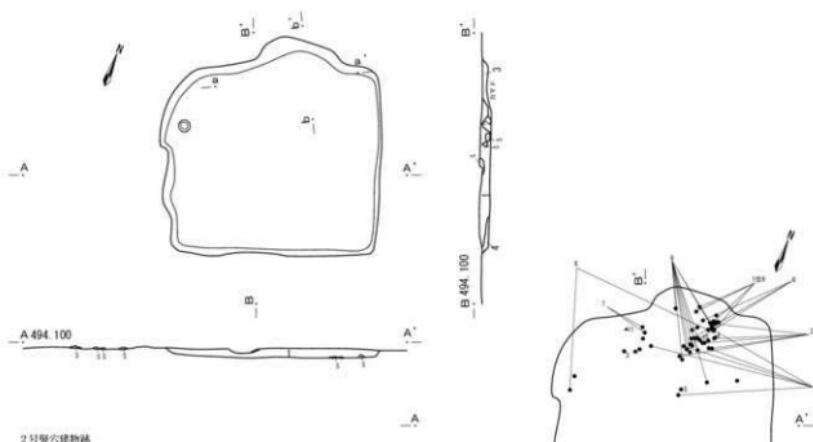


1号竪穴建物跡カマド

- 1 黒褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・焼土ブロック30%、5mm以下褐色スコリア少量。
- 2 黒褐色土 粘性やや強。焼土ブロック30%。
- 3 黑褐色土 粘性やや強。5mm以下トモ・褐色スコリア20%。
- 4 黑褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア少量。灰白色粘土粒子微量。
- 5 黑褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・焼土ブロック30%。
- 6 黑褐色土 粘性やや強。焼土粒子20%。
- 7 黑褐色土 粘性やや強。焼土粒子30%。
- 8 黑褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色・褐色スコリア30%、灰白色粘土ブロック微量。
- 9 黑褐色土 粘性やや強。10mm以上黒色スコリア2mm以下褐色スコリア少量。灰白色粘土・焼土ブロック10%。
- 10 黑褐色土 粘性やや強。10mm以上黒色スコリア2mm以下褐色スコリア少量。焼土ブロック30%。
- 11 黑褐色土 粘性やや強。10mm以下褐色スコリア2mm以下褐色スコリア少量。灰白色粘土微量。
- 12 黑褐色土 粘性やや強。10mm以下黒色スコリア5mm以下褐色スコリア10%、灰白色粘土ブロック少量。

第4図 1号竪穴建物跡

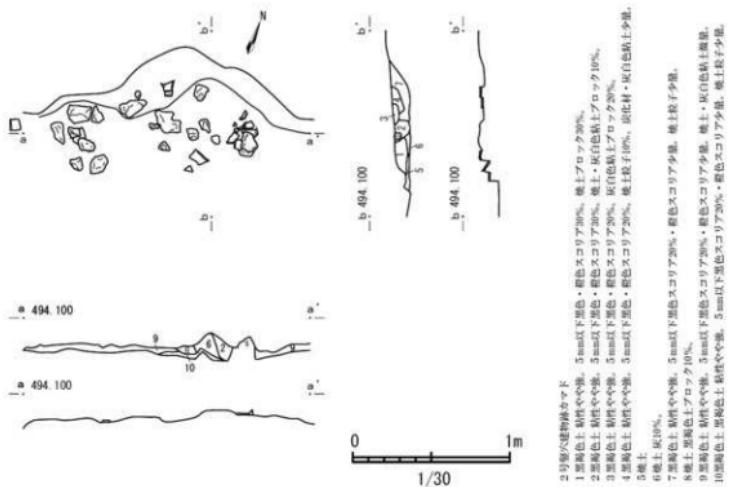
2号堅穴建物跡



2号堅穴建物跡

- 1 黒褐色土・粘性や少強。10mm以下黒色スコリア少量。5mm以下緑色スコリア10%。
- 2 黒褐色土・粘性や少強。5mm以下黒色・緑色スコリア少量。灰白色粘土10%。
- 3 黒褐色土・粘性や少強。3mm以下黒色・緑色スコリア微量。灰白色粘土少量。
- 4 黒褐色土・粘性や少強。5mm以下黒色・緑色スコリア10%。

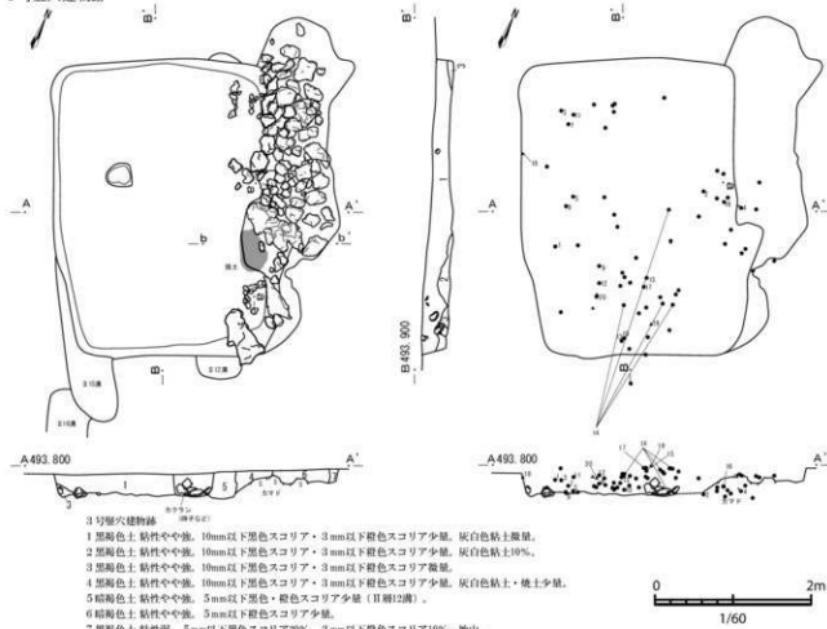
2号堅穴建物跡カマド



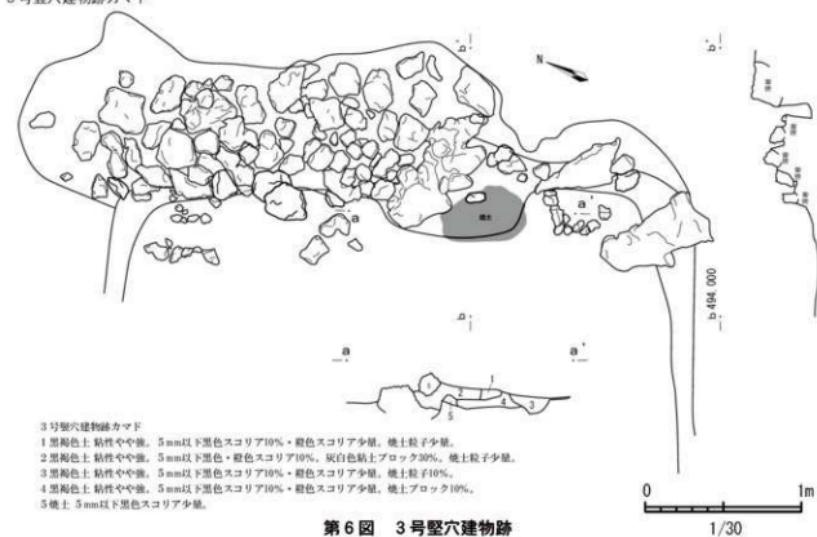
- 1 黒褐色土・粘性や少強。5mm以下黒色・緑色スコリア30%、地・上・プロック10%。
- 2 黒褐色土・粘性や少強。5mm以下黒色・緑色スコリア30%、地・上・灰白色ロック10%。
- 3 黒褐色土・粘性や少強。5mm以下黒色・緑色スコリア30%、地・上・灰白色粘土10%。
- 4 黒褐色土・粘性や少強。5mm以下黒色・緑色スコリア30%、地・上・灰白色粘土10%。
- 5 黒褐色土・粘性や少強。5mm以下黒色・緑色スコリア30%、地・上・灰白色粘土10%。
- 6 地上・灰白色。
- 7 黒褐色土・粘性や少強。5mm以下黒色・緑色スコリア20%・緑色スコリア少量、地・上・灰白色粘土10%。
- 8 地上・灰白色。5mm以下黒色・緑色スコリア20%・緑色スコリア少量、地・上・灰白色粘土10%。
- 9 黒褐色土・粘性や少強。5mm以下黒色・緑色スコリア20%・緑色スコリア少量、地・上・灰白色粘土10%。

第5図 2号堅穴建物跡

3号堅穴建物跡

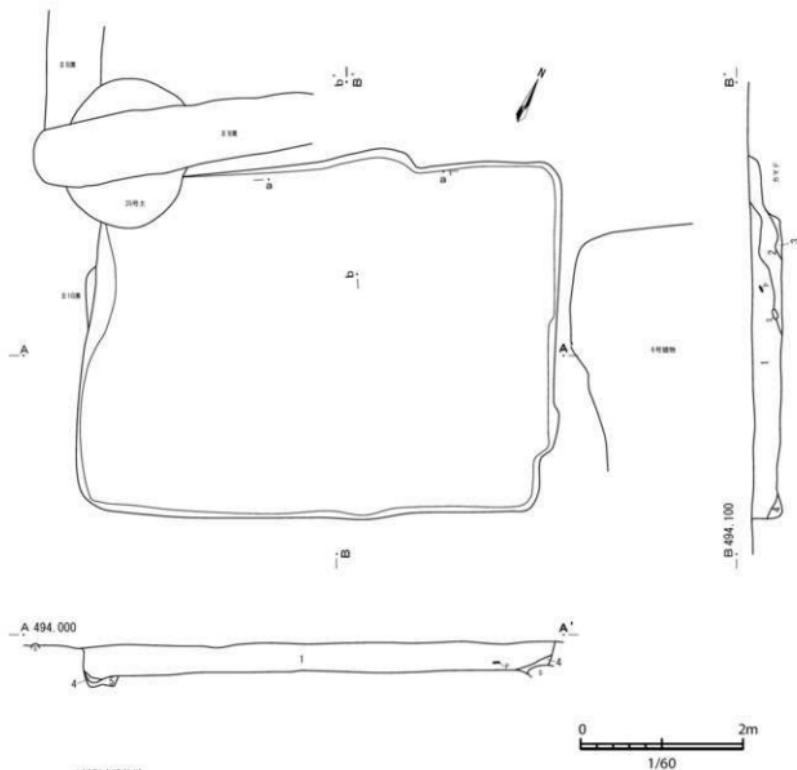


3号堅穴建物跡カマド



第6図 3号堅穴建物跡

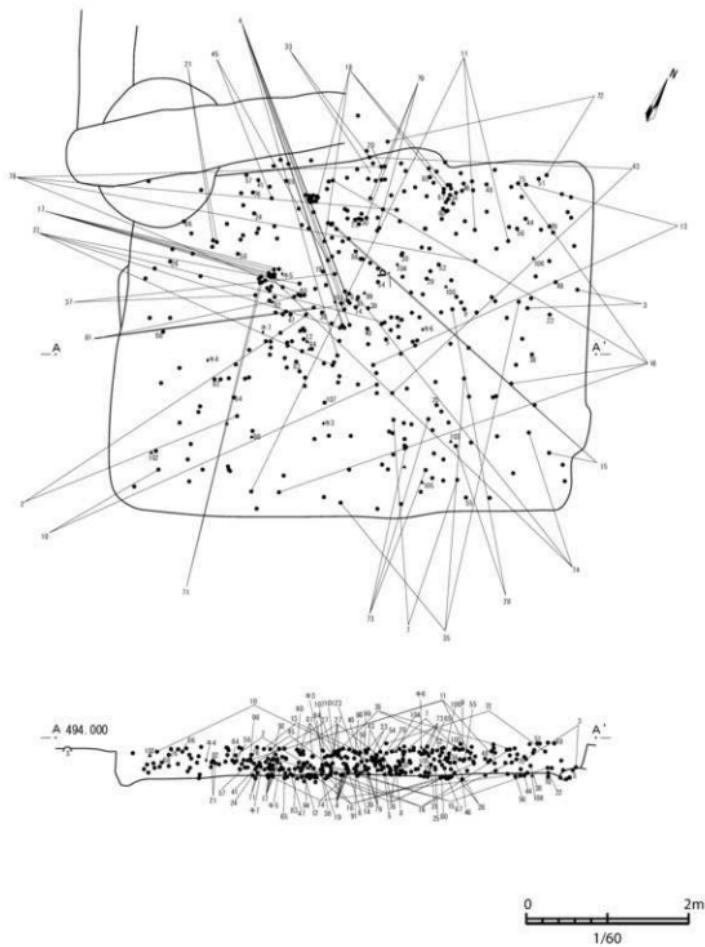
4号堅穴建物跡



4号堅穴建物跡

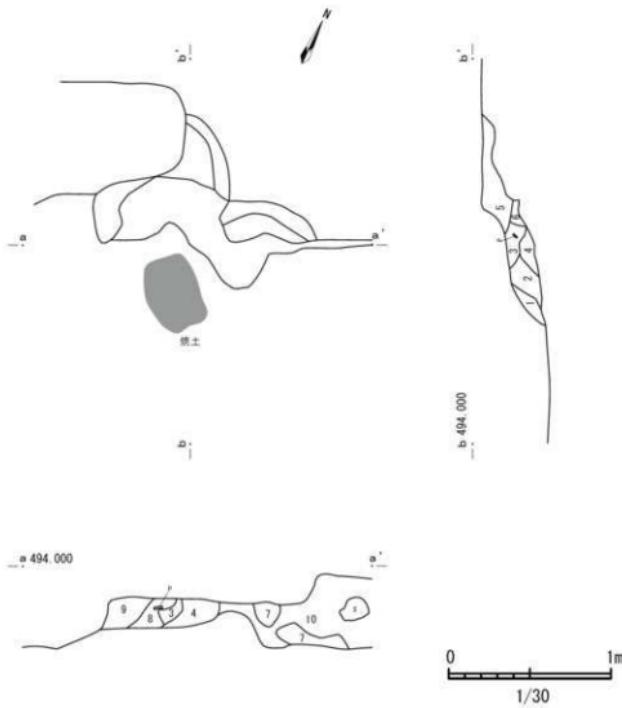
- 1 黒褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下褐色スコリア少量。灰白色粘土微量。
- 2 褐褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下褐色スコリア少量。灰白色粘土 20%、桃土少量。
- 3 褐褐色土 粘性やや強。10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下褐色スコリア。灰白色粘土少量。桃土 10%。
- 4 黒褐色土 粘性やや弱。10mm 以下黒色スコリア 10%，5mm 以下褐色スコリア微量。
- 5 褐褐色土 粘性やや弱。10mm 以下黒色スコリア 10%，5mm 以下褐色スコリア少量。

第7図 4号堅穴建物跡 (1)



第8図 4号堅穴建物跡（2）

4号堅穴建物跡カマド

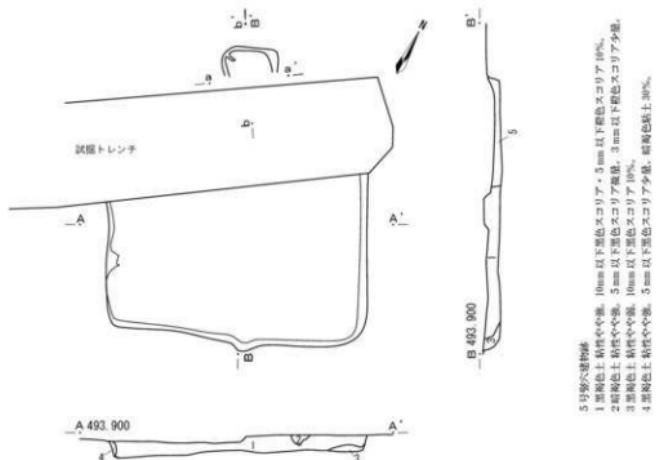


4号堅穴建物跡カマド

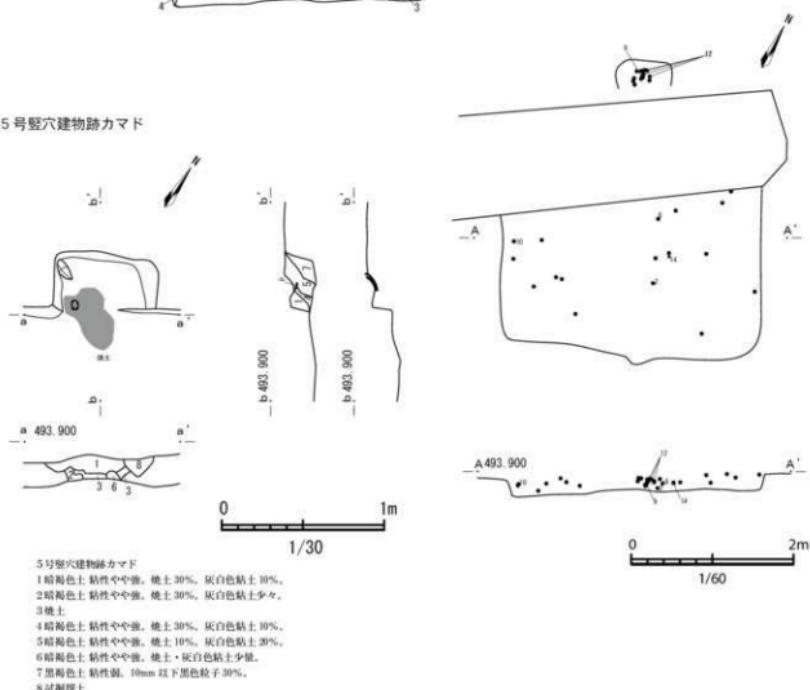
- 1 前褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 10%、燒土微量。
- 2 前褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 30%、燒土少量。
- 3 前褐色土 粘性強。灰白色粘土 30%、燒土 10%。
- 4 前褐色土 粘性やや強。燒土 30%、灰白色粘土少量。
- 5 前褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・燒土 20%、10mm 以下黑色スコリア少量。
- 6 横上 前褐色土 30%。
- 7 前褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・燒土 10%。
- 8 前褐色土 粘性やや強。灰白色粘土 20%、燒土 10%。
- 9 前褐色土 粘性やや強。灰白色粘土・燒土 20%。
- 10 黒褐色土 粘性弱。5mm 以下黑色スコリア 30%、2mm 以下白色スコリア微量。地山。

第9図 4号堅穴建物跡（3）

5号堅穴建物跡

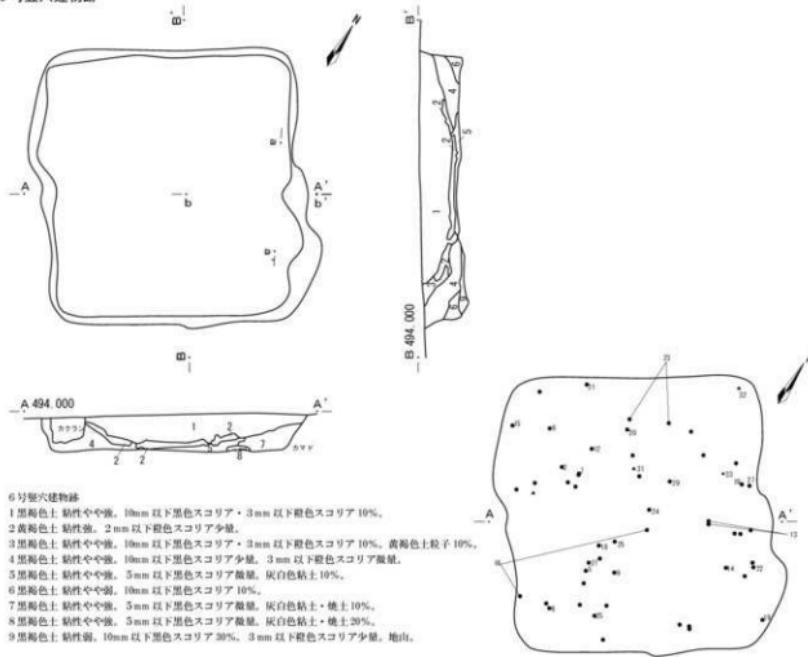


5号堅穴建物跡カマド

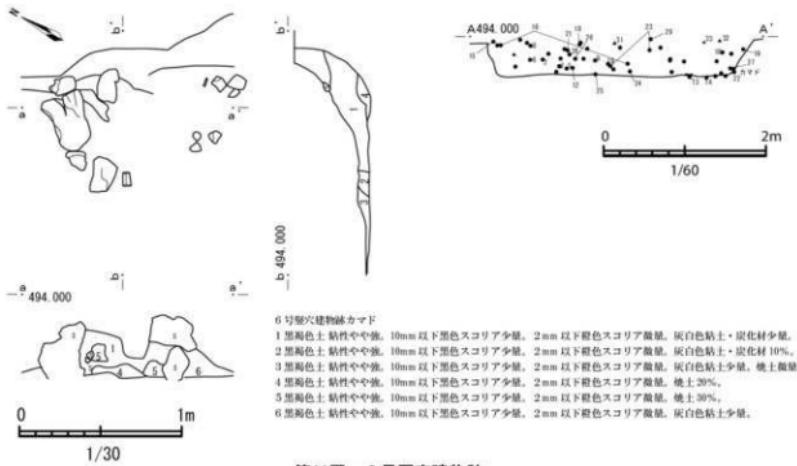


第10図 5号堅穴建物跡

### 6号竪穴建物跡

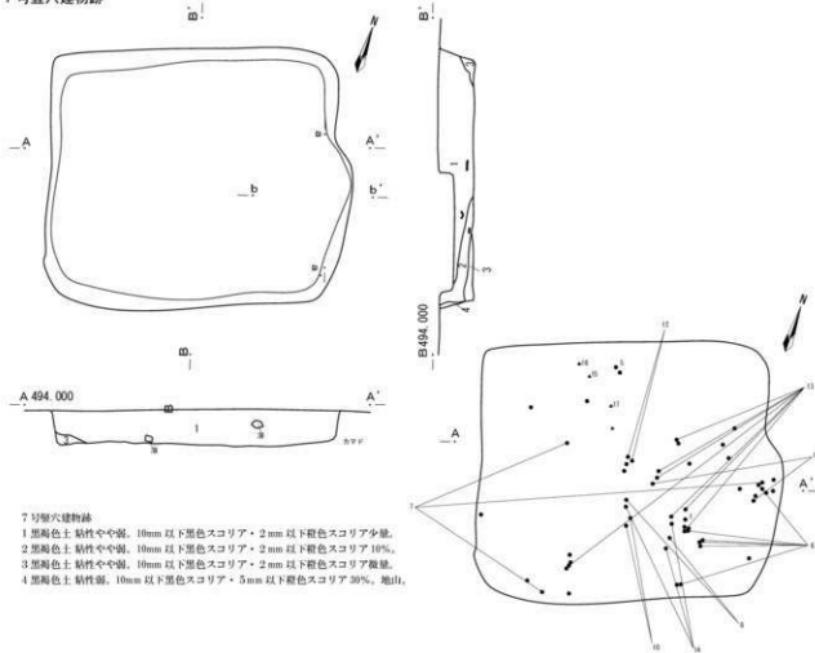


### 6号竪穴建物跡カマド



第11図 6号竪穴建物跡

7号竪穴建物跡

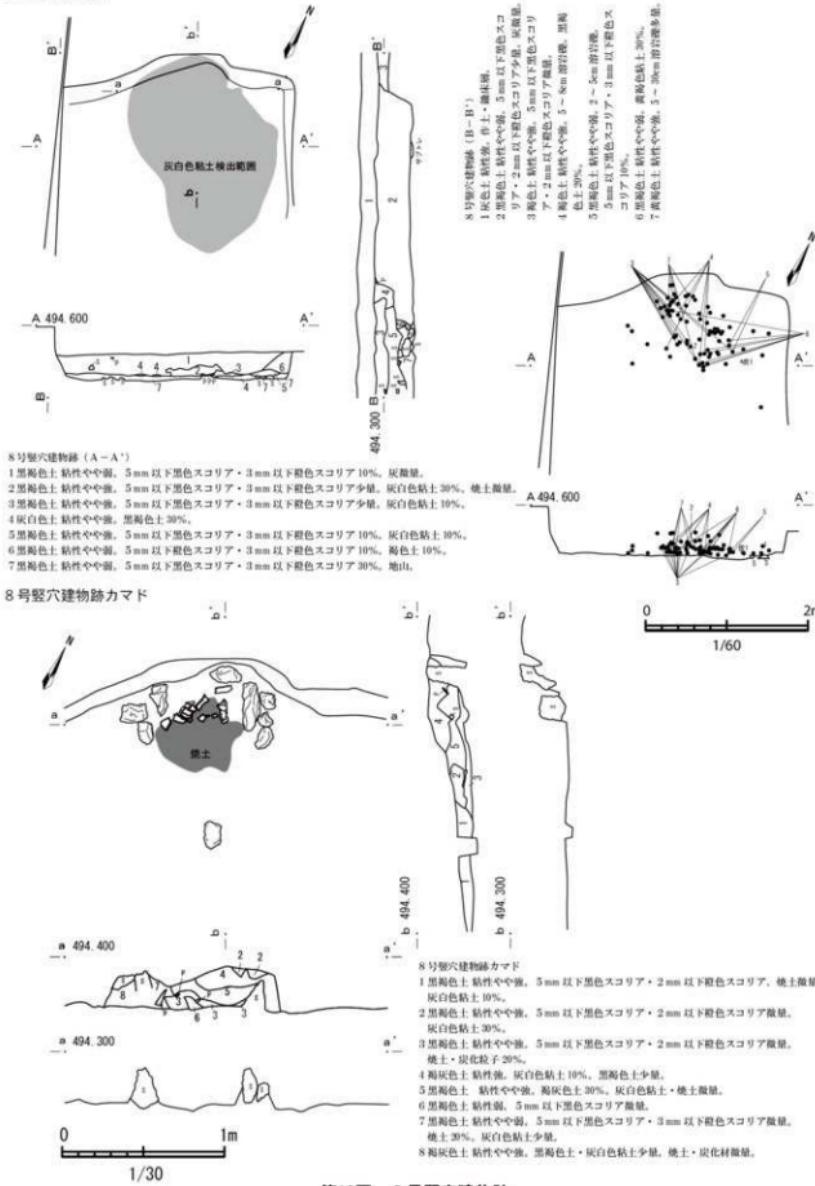


7号竪穴建物跡カマド



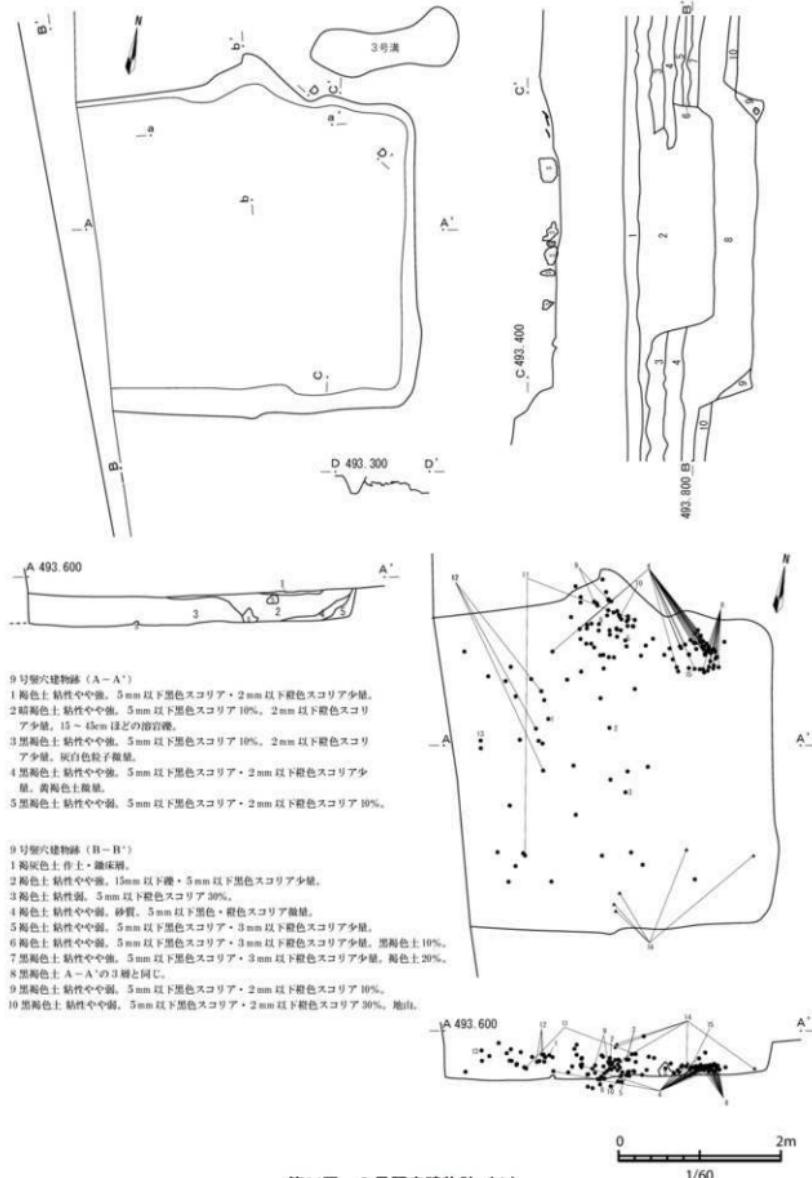
第12図 7号竪穴建物跡

8号竖穴建物跡



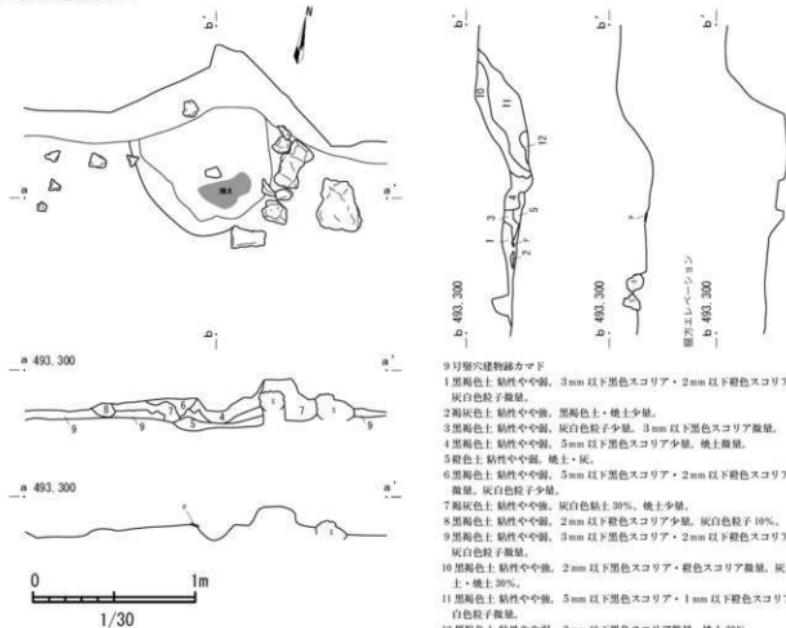
第13図 8号竖穴建物跡

9号堅穴建物跡

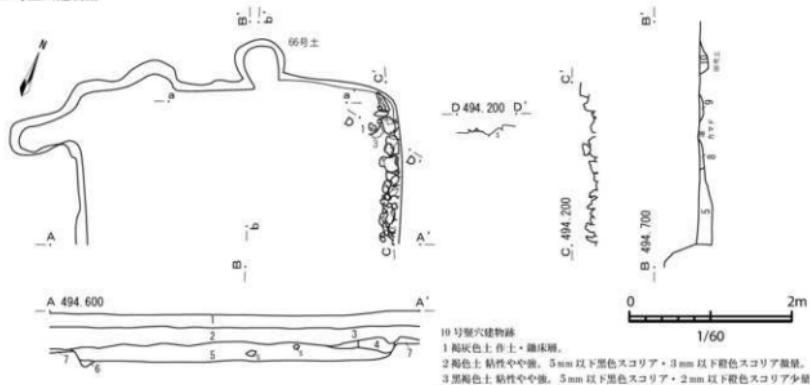


第14図 9号堅穴建物跡 (1)

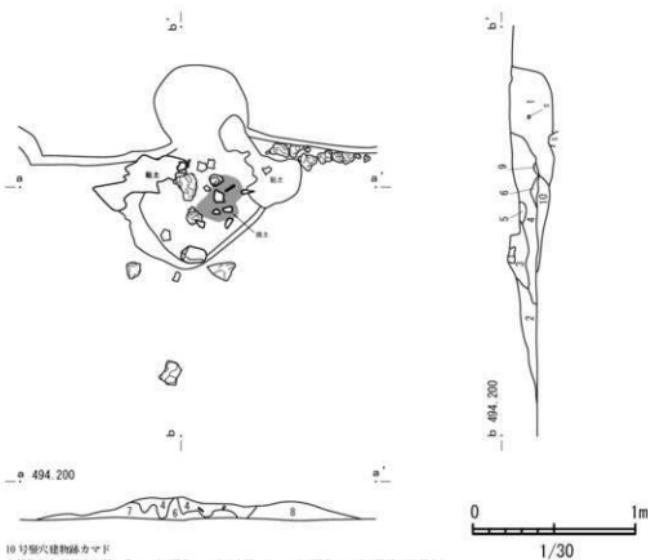
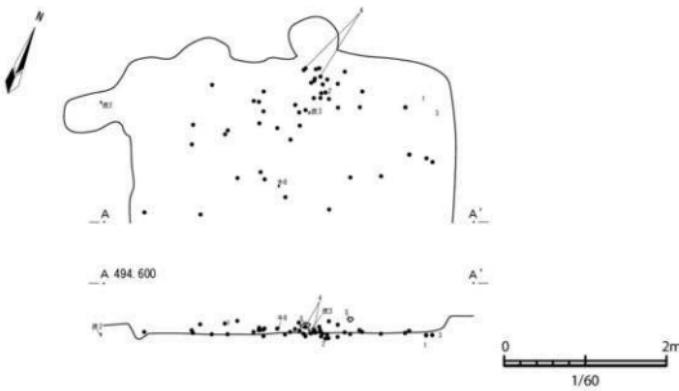
9号竪穴建物跡カマド



10号竪穴建物跡



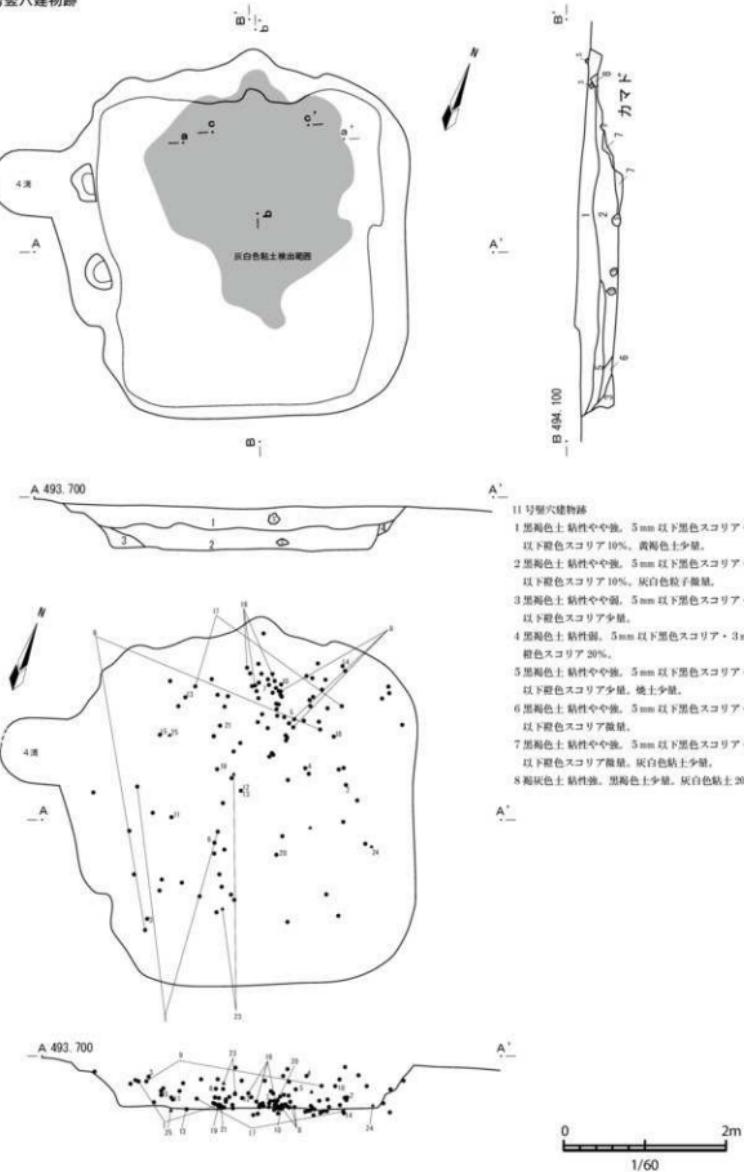
第15図 9号竪穴建物跡(2)・10号竪穴建物跡(1)



- 1 黒褐色土 粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア少量。2mm以下褐色スコリア微量。(66号土)。
- 2 黒褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア・2mm以下褐色スコリア微量。灰白色粘土少量。
- 3 黑褐色土 粘性やや強。5mm以下黒色スコリア・2mm以下褐色スコリア微量。灰白色粘土少量。
- 4 黑褐色土 粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。灰白色粘土微量。
- 5 暗褐色土 粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア・2mm以下褐色スコリア微量。壤土・灰白色粘土少量。
- 6 暗褐色土 粘性やや強。壤土30%、灰少泥。
- 7 暗褐色土 粘性強。5mm以下黑色スコリア・2mm以下褐色スコリア微量。灰白色粘土30%。壤土少泥。
- 8 暗褐色土 粘性強。5mm以下黑色スコリア・2mm以下褐色スコリア微量。灰白色粘土20%。壤土少泥。
- 9 暗褐色土 粘性強。灰白色粘土30%。壤土少泥。

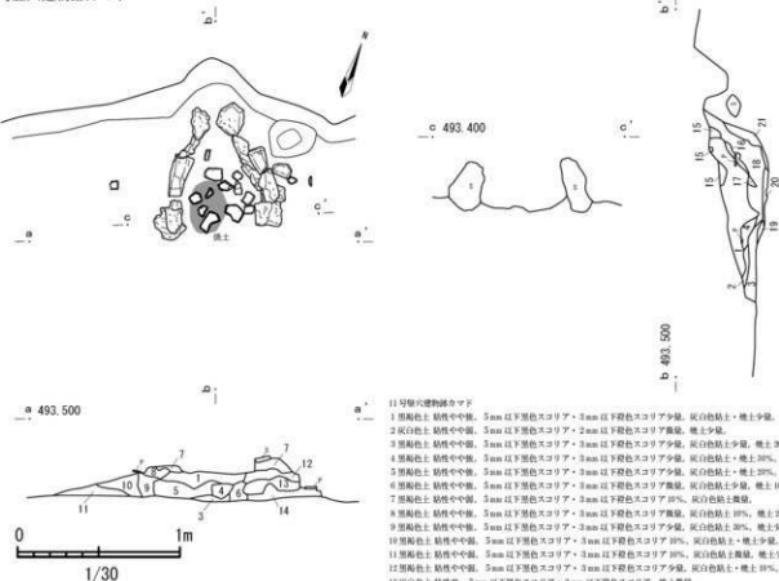
第16図 10号竪穴建物跡（2）

11号竖穴建物跡

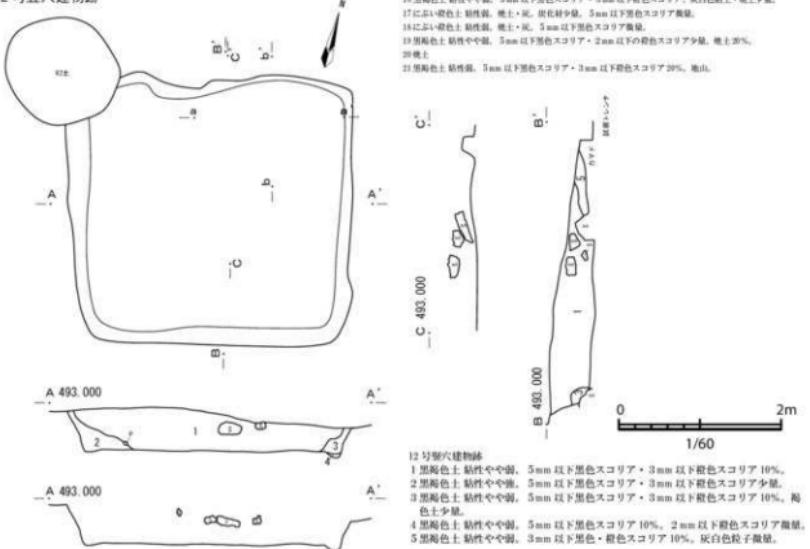


第17図 11号竖穴建物跡（1）

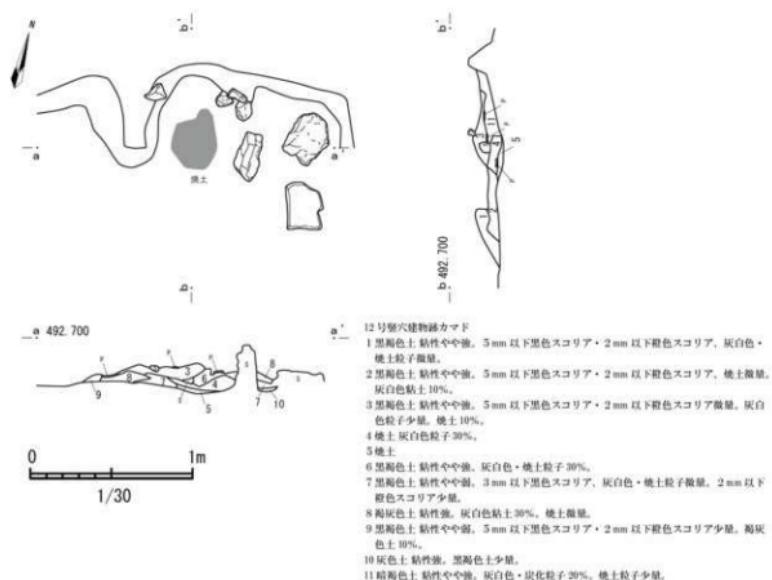
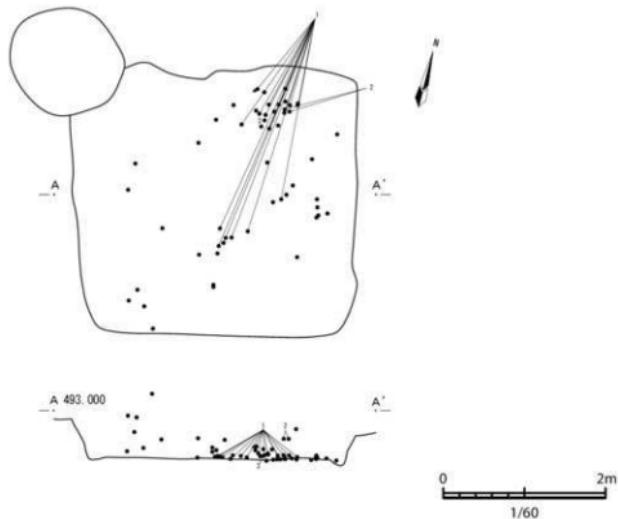
11号竪穴建物跡カマド



12号竪穴建物跡

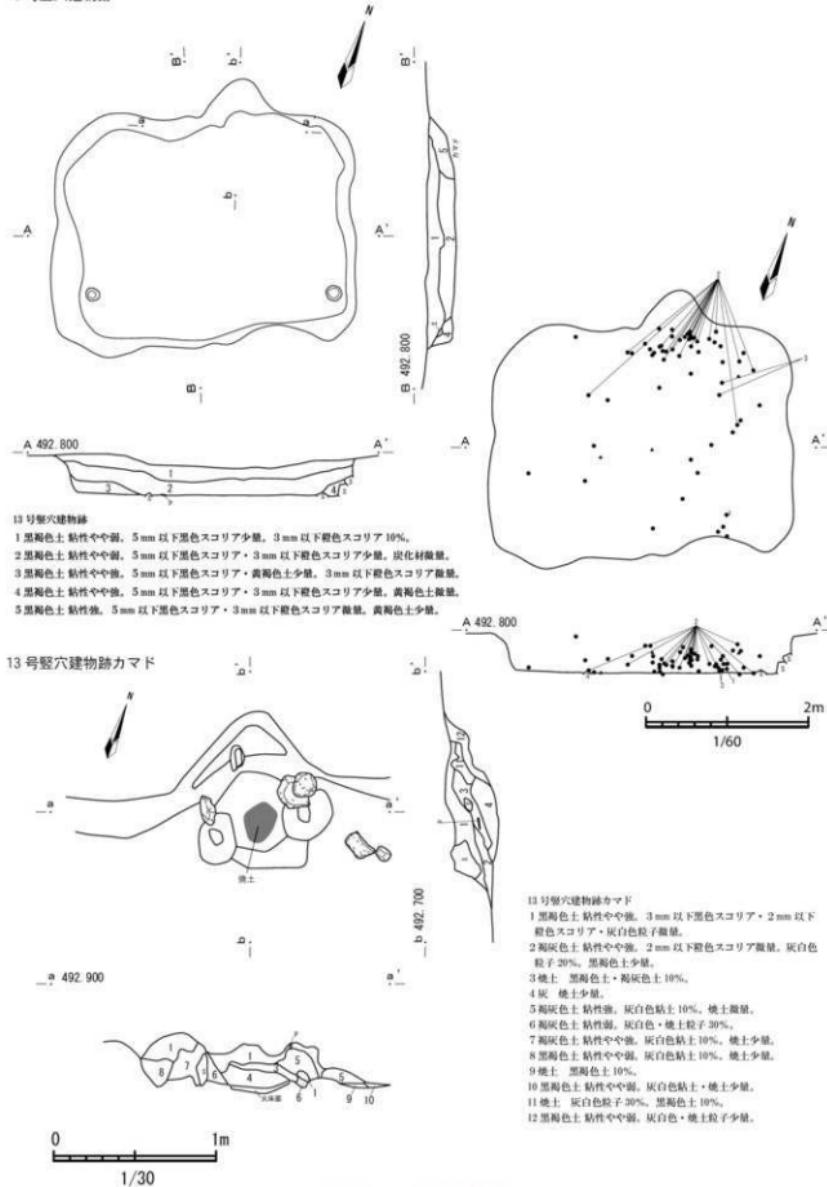


第18図 11号竪穴建物跡 (2)・12号竪穴建物跡 (1)

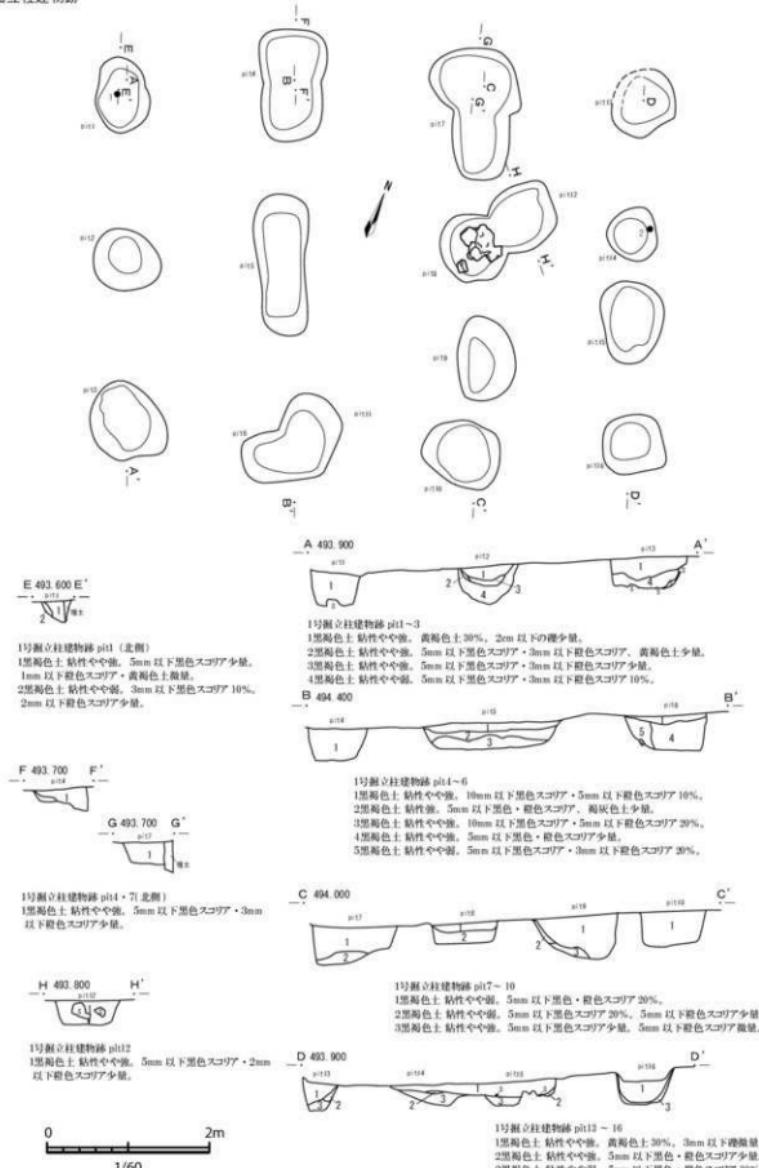


第19図 12号竖穴建物跡 (2)

13号竪穴建物跡

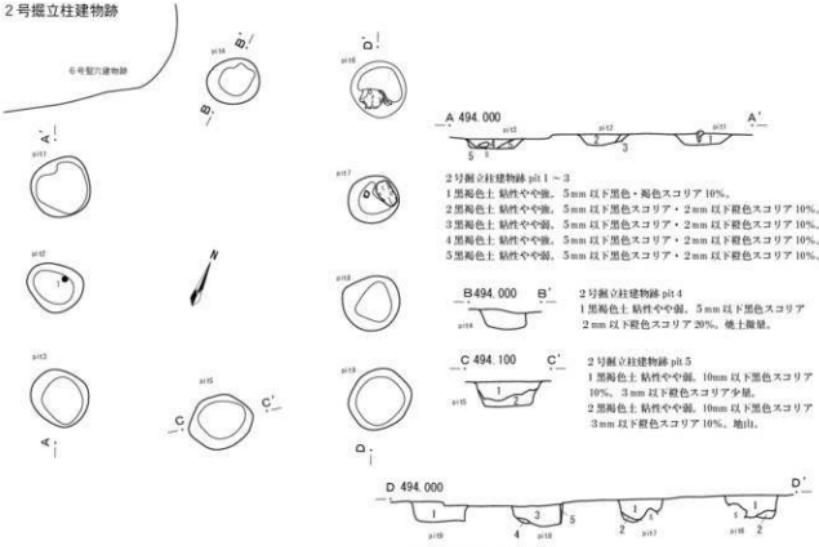


1号掘立柱建物跡

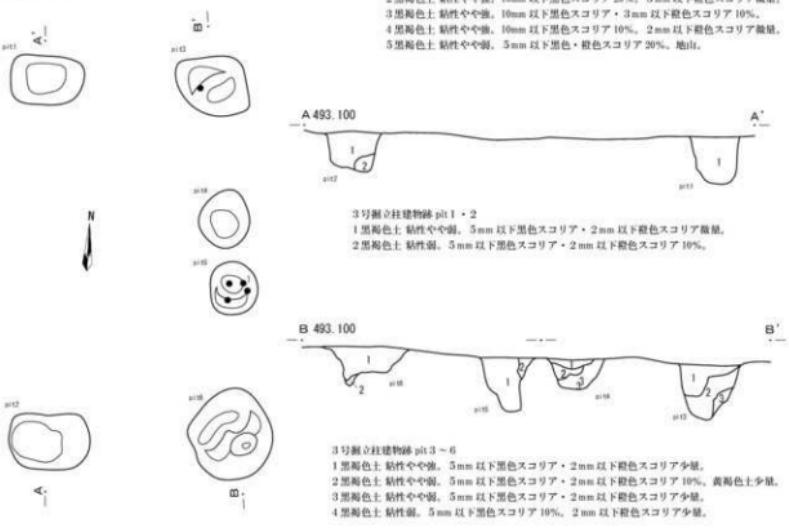


第21図 1号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡



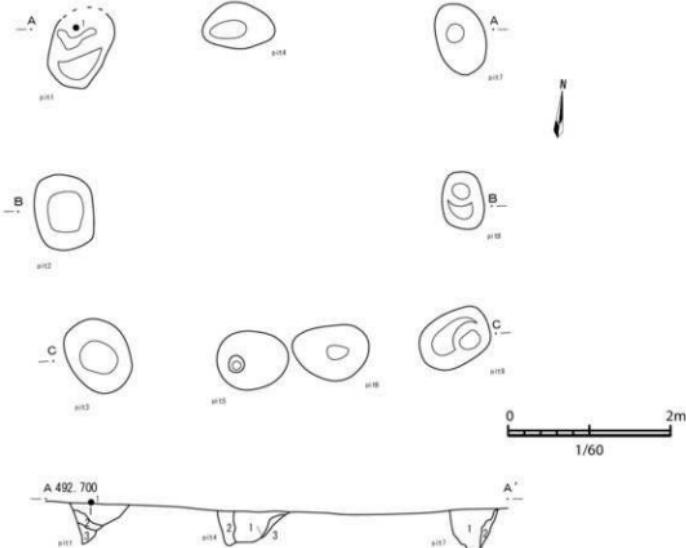
3号掘立柱建物跡



0 2m  
1/60

第22図 2号掘立柱建物跡・3号掘立柱建物跡

#### 4号掘立柱建物跡



4号掘立柱建物跡 pH 1・4・7

- 1 黒褐色土・粘性やや強。5mm以下黒色スコリア少量。2mm以下褐色スコリア微量。
- 2 黒褐色土・粘性やや強。3mm以下黒色スコリア・2mm以下褐色スコリア。桃土微量。
- 3 黒褐色土・粘性やや強。3mm以下黒色スコリア微量。2mm以下褐色スコリア少量。

4 黑褐色土・粘性やや弱。5mm以下褐色スコリア少量。2mm以下褐色スコリア微量。

5 黑褐色土・粘性弱。5mm以下黒色スコリア30%。2mm以下褐色スコリア10%。

6 黑褐色土・粘性やや弱。3mm以下黒色スコリア少量。2mm以下褐色スコリア10%。

4号掘立柱建物跡 pH 2・8

- 1 黒褐色土・粘性やや強。5mm以下黒色スコリア・2mm以下褐色スコリア微量。
- 2 黒褐色土・粘性弱。5mm以下黒色スコリア30%。2mm以下褐色スコリア少量。
- 3 黑褐色土・粘性やや強。5mm以下黒色スコリア少量。2mm以下褐色スコリア10%。

4 黑褐色土・粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア少量。2mm以下褐色スコリア少量。

5 黑褐色土・粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア少量。2mm以下褐色スコリア微量。

6 黑褐色土・粘性やや弱。5mm以下黒色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。

C 492.700



4号掘立柱建物跡 pH 3

- 1 黑褐色土・粘性やや強。締まりやや弱。3mm以下褐色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。
- 2 黑褐色土・粘性やや強。締まり強。5mm以下褐色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。
- 3 黑褐色土・粘性弱。5mm以下黒色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。
- 4 黑褐色土・粘性やや弱。締まり強。3mm以下褐色スコリア10%。

4号掘立柱建物跡 pH 5

- 1 黑褐色土・粘性やや弱。締まり強。3mm以下褐色スコリア少量。
- 2 黑褐色土・粘性やや弱。締まり強。3mm以下褐色スコリア少量。
- 3 黑褐色土・粘性やや弱。締まりやや弱。3mm以下褐色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。
- 4 黑褐色土・粘性やや弱。締まり強。3mm以下褐色スコリア10%。2mm以下褐色スコリア少量。

4号掘立柱建物跡 pH 6

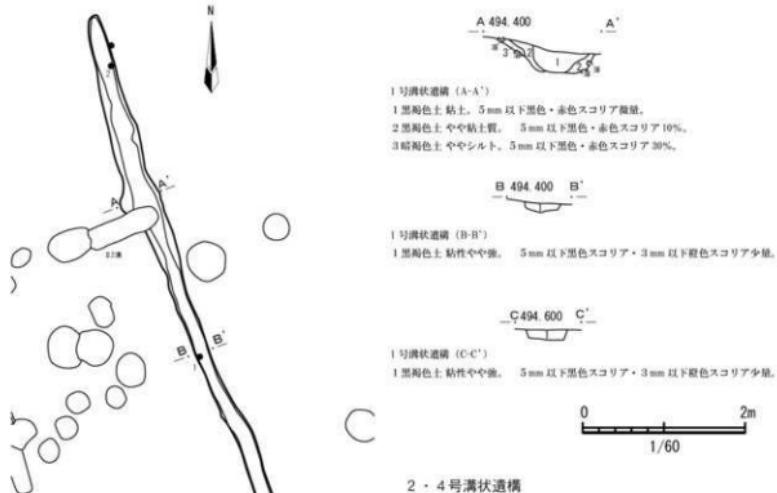
- 1 黑褐色土・粘性やや弱。締まり強。3mm以下褐色スコリア少量。
- 2 黑褐色土・粘性やや弱。締まり強。3mm以下褐色スコリア少量。
- 3 黑褐色土・粘性やや弱。締まりやや弱。3mm以下褐色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。
- 4 黑褐色土・粘性やや弱。締まり弱。3mm以下褐色スコリア10%。2mm以下褐色スコリア少量。

4号掘立柱建物跡 pH 7

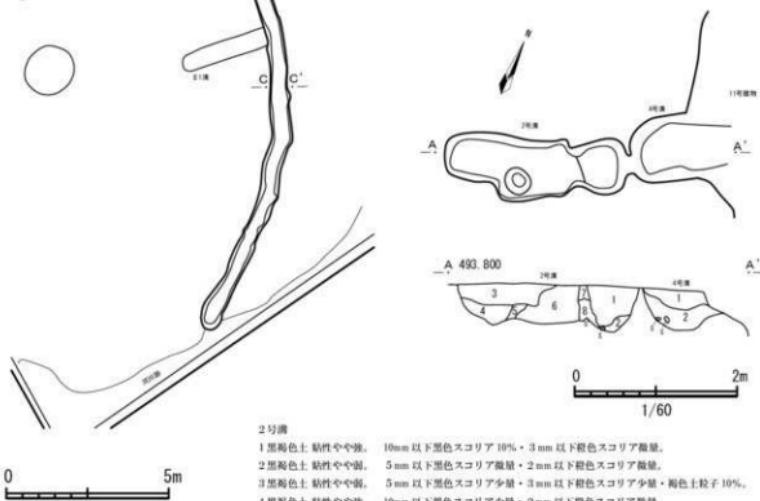
- 1 黑褐色土・粘性やや強。締まりやや弱。3mm以下褐色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。
- 2 黑褐色土・粘性やや弱。締まりやや強。3mm以下褐色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。
- 3 黑褐色土・粘性やや弱。締まりやや弱。3mm以下褐色スコリア・2mm以下褐色スコリア少量。
- 4 黑褐色土・粘性やや弱。締まり弱。3mm以下褐色スコリア10%。2mm以下褐色スコリア少量。

第23図 4号掘立柱建物跡

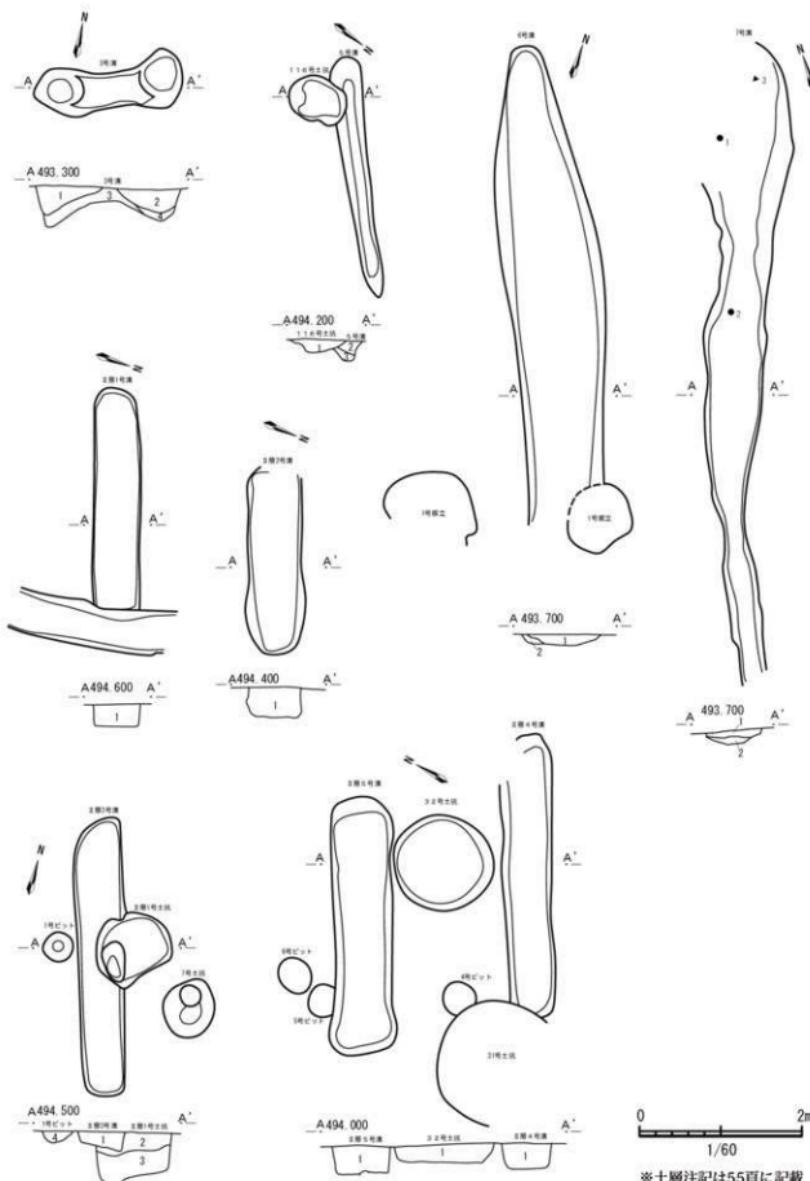
1号溝状造構



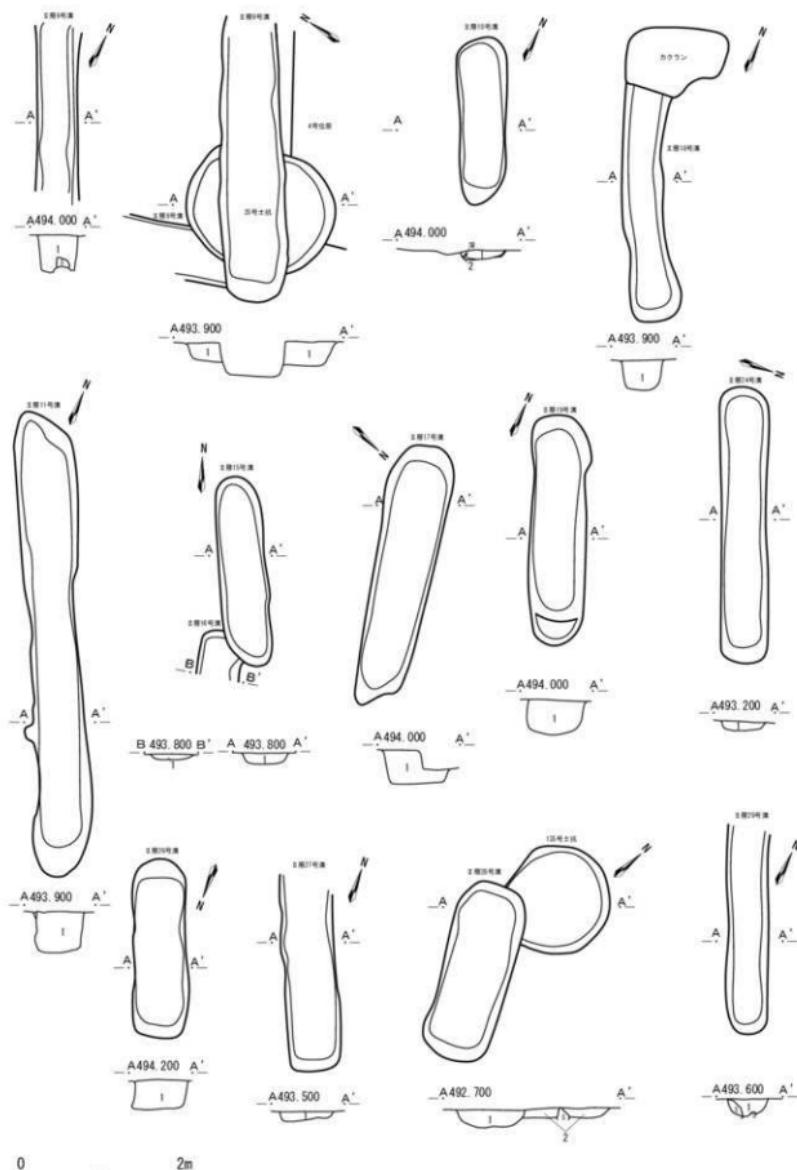
2・4号溝状造構



第24図 1号溝状造構・2号溝状造構・4号溝状造構

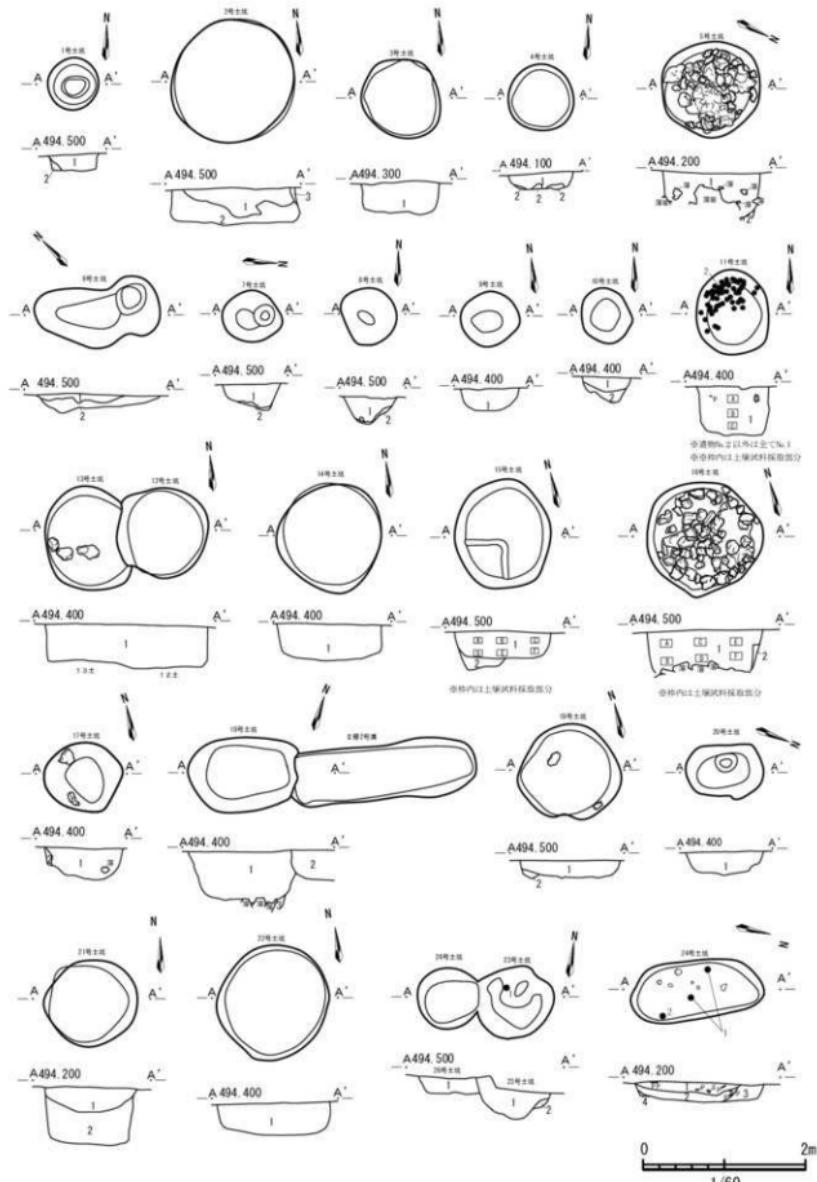


第25図 3・5~7・II層1~5号溝状遺構・32・116・II層1号土坑・1号ビット



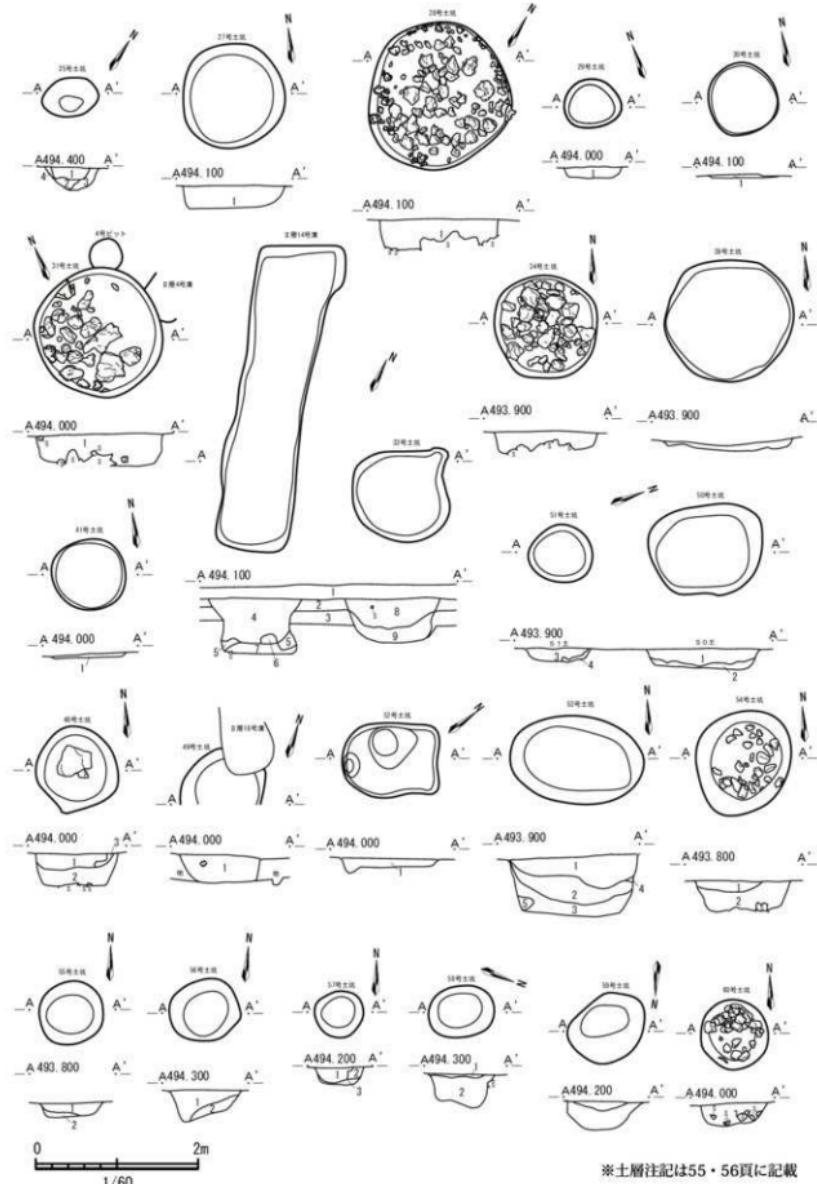
第26図 II層6・8~11・15・17~19・24・26~29号溝状遺構、35・135号土坑

※土層注記は55頁に記載



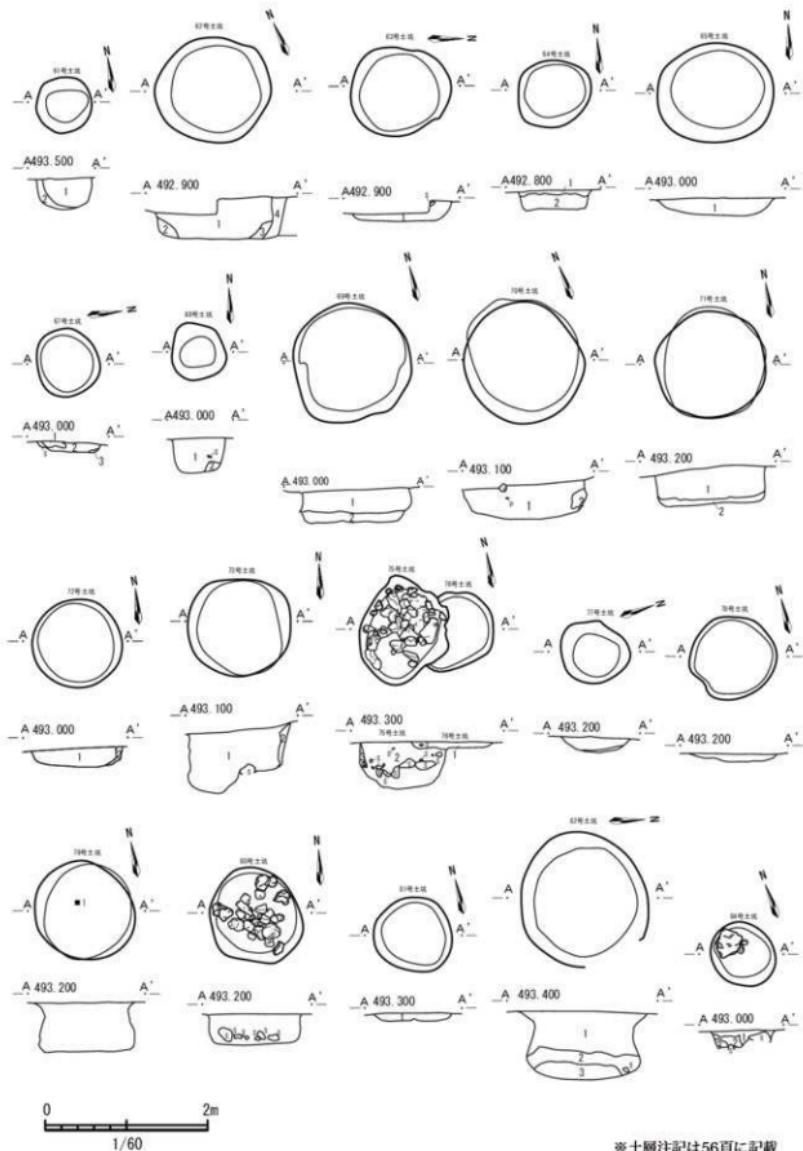
第27図 1~24·26号土坑、II層 2号溝状遺構

※土層注記は55頁に記載



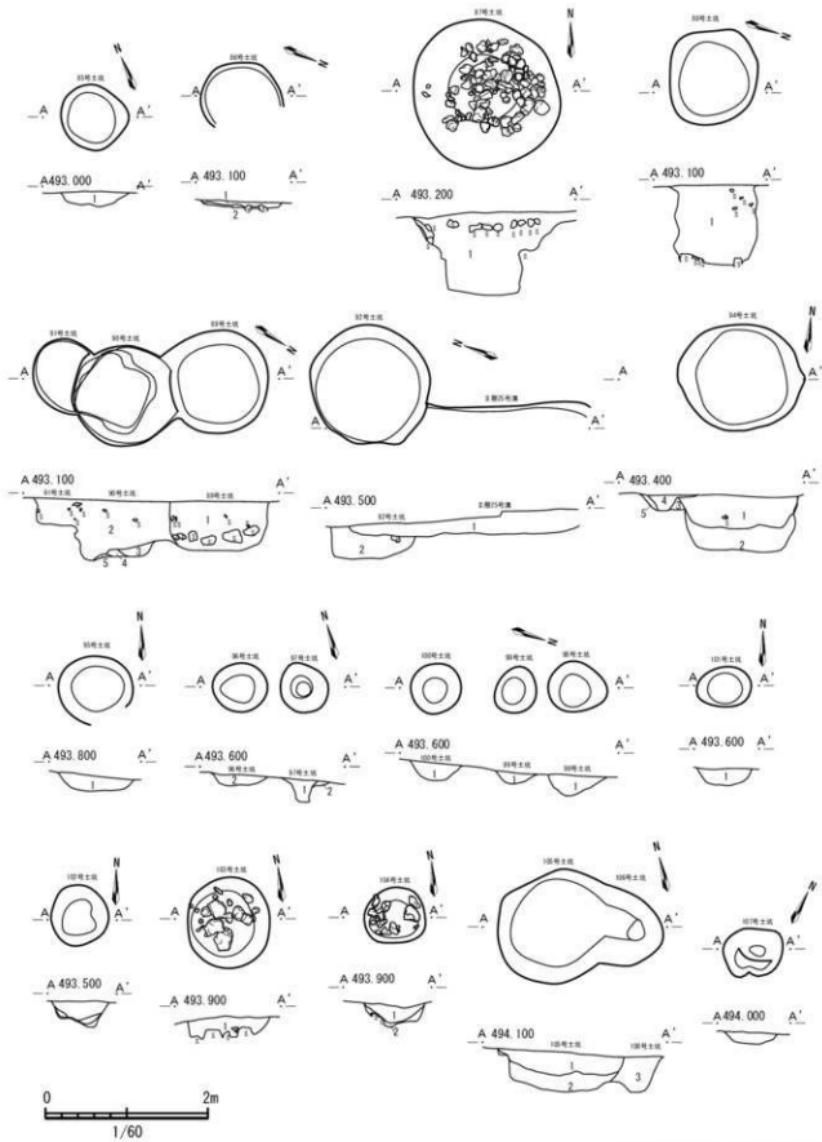
\*土層注記は55・56頁に記載

第28図 25・27~31・33・34・39・41・48~60号土坑、II層14号溝状造構



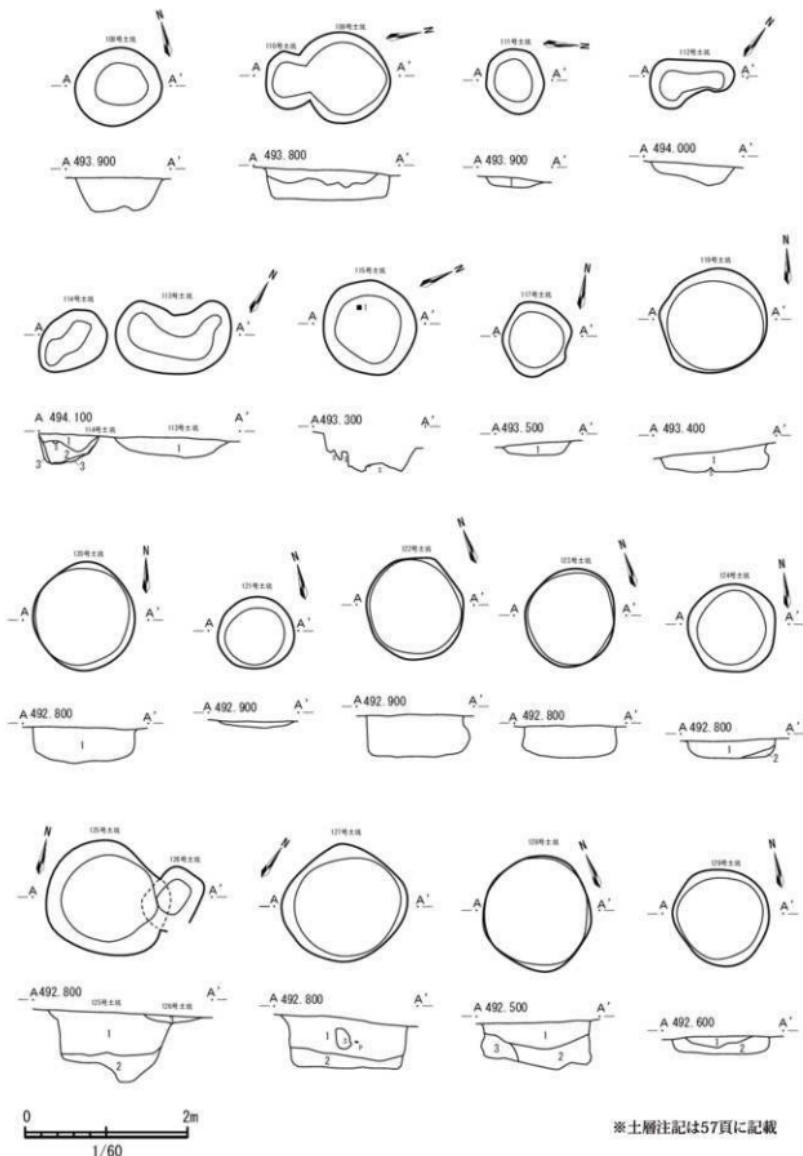
※土層注記は56頁に記載

第29図 61～65・67～73・75～82・84号土坑



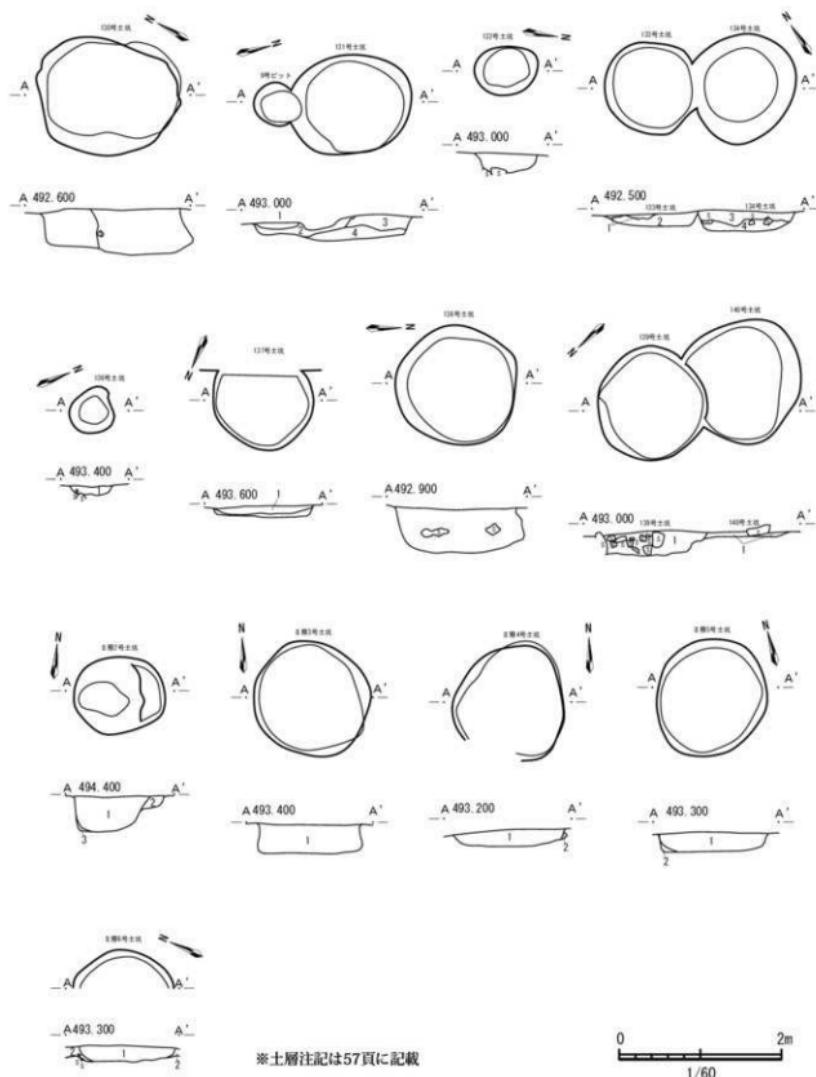
※土層注記は56・57頁に記載

第30図 85～92・94～107号土坑



第31図 108 ~ 115・117・119 ~ 129号土坑

※土層注記は57頁に記載



第32図 130～134・136～140、II層2～6号土坑

## 第 25 図 溝状構造・上坑・ピット

3号溝  
1黑褐色土 粘性や強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下褐色スコリア微量。  
1黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下褐色スコリア少量。  
2黑褐色土 粘性や強。 5mm 以下黒色スコリア少量・2mm 以下褐色スコリア少量。  
燒褐色土 粘性や弱。 5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下褐色スコリア少量。  
3黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下褐色スコリア少量。  
4黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色・褐色スコリア 10%・2mm 以下褐色スコリア少量。  
灰白色土 粘性少量。

### 11号土坑・5号溝

1黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色スコリア・2.19以下褐色スコリア微量。  
2黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色スコリア・2.19以下褐色スコリア少量。  
3褐褐色土 粘性弱。 10mm 以下砂質 30%。

### 6号溝

1黑褐色土 粘性や強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下褐色スコリア少量。  
2黑褐色土 粘性弱。 5mm 以下黒色スコリア 30% (地山)。

### 7号溝

1黑褐色土 粘性や強。 2mm 以下褐色スコリア少量・炭化材微量。  
2黑褐色土 粘性や中強。 2mm 以下褐色スコリア少量・2mm 以下砂質 10%・炭化材微量。

### Ⅱ号溝・2号溝

1褐褐色土 やや粘土質。 8mm 以下黒色・赤色スコリア微量。

### Ⅲ号溝・Ⅳ号溝・Ⅴ号溝・1号土坑・1号セメント

1黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。  
2黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色スコリア・5mm 以下褐色スコリア微量。  
3褐褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色スコリア 5mm 以下褐色スコリア微量・黒褐色土ブロック少量。

### Ⅵ号溝・Ⅶ号溝・32号土坑

1黑褐色土 粘性や強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア微量。  
2黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア微量。

## 第 26 図 Ⅱ層溝状構造、35・135 号土坑

### Ⅱ号溝 0号溝

1褐褐色土 粘性や強。 1cm 以下砂質少量。

### 35号土坑

1黑褐色土 粘性や強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア微量。

### 3号土坑

### 10号土坑

1黑褐色土 粘性や強。 1cm 以下黒色スコリア微量。

2褐褐色土 粘性弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下褐色スコリア少量。(4往)

### 11号土坑

1褐褐色土 粘性や強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 15号土坑

1褐褐色土 粘性や強。 3mm 以下黒色・褐色スコリア微量。

### 16号土坑

1褐褐色土 粘性や強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 18号土坑

1褐褐色土 粘性や強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 19号土坑

1褐褐色土 粘性や強。 10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下褐色スコリア少量。

### 27号土坑

1褐褐色土 粘性や中強。 3mm 以下褐色スコリア少量。

### 29号土坑

1褐褐色土 粘性や弱。 5mm 以下黒色スコリア微量・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 27号・24・26号土坑・Ⅱ層 2号溝状構造

### 1号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色・赤色スコリア微量。

### 2号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色・褐色スコリア 10%。

### 3号土坑

1黑褐色土 やや砂質。 5mm 以下黒色・褐色スコリア 30%。

### 4号土坑

1黑褐色土 やや粘土質。 5mm 以下黒色・赤色スコリア微量。

### 2号土坑

1黑褐色土 やや粘土質。 黄褐色土ブロック 30%。

### 5号土坑

1黑褐色土 やや粘土質。 5mm 以下黒色・赤色スコリア微量。

### 2号土坑

1黑褐色土 やや粘土質。 5mm 以下黒色・褐色スコリア微量。

### 6号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色・褐色スコリア 10%。

### 7号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 黑褐色土ブロック 30%。

### 7号土坑

1黑褐色土 粘性や強。 5mm 以下黒色・褐色スコリア少量。  
2褐褐色土 粘性弱。 5mm 以下褐色スコリア 30%。

### 8号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色・褐色スコリア少量。

### 9号土坑

1黑褐色土 粘性や強。 5mm 以下黒色・褐色スコリア少量。

### 10号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下褐色スコリア少量。  
2褐褐色土 粘性や強。 5mm 以下黒色スコリア 10%・2mm 以下褐色スコリア微量。

### 11号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 12号土坑・13号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 14号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 15号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下褐色スコリア 10%・  
2褐褐色土 粘性弱。 5mm 以下褐色スコリア 40%。

### 16号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下褐色スコリア少量。

### 2号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下褐色スコリア少量。

### 3号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 8mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下褐色スコリア微量。

### 4号土坑

1黑褐色土 粘性や中弱。 3mm 以下黒色スコリア・褐色スコリア 10%。

### 20号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 21号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 22号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 23号土坑・26号土坑

1黑褐色土 粘性や中弱。 10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下褐色スコリア少量・1~2cm 白褐色土微量。

### 24号土坑

1暗褐色土 粘性や中弱。 10mm 以下黒色スコリア・2mm 以下褐色スコリア・炭化材微量。

### 25号土坑

1暗褐色土 粘性や中弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下褐色スコリア少量。

### 26号土坑

1暗褐色土 粘性や中弱。 5mm 以下黒色スコリア・2mm 以下褐色スコリア少量・1~2cm 白褐色土微量。

### 27号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・5mm 以下褐色スコリア少量。

### 28号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 29号土坑

1黑褐色土 粘性や中弱。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 30号土坑

1黑褐色土 粘性や中強。 5mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 31号土坑セクション

1黑褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア少量。

### 33号土坑・Ⅱ層 14号溝

1暗褐色土 粘性弱。 5.5±

### 2暗褐色土

1暗褐色土 粘性弱。 5mm 以下黒色スコリア少量・3mm 以下褐色スコリア 30%。

### 3暗褐色土

1暗褐色土 粘性弱。 5mm 以下黒色スコリア 30%・3mm 以下褐色スコリア 30%。

### 4暗褐色土

1暗褐色土 粘性や中強。 10mm 以下黒色スコリア・3mm 以下褐色スコリア微量。

### 5暗褐色土

1暗褐色土 粘性や中弱。 10mm 以下黒色スコリア 10%・3mm 以下褐色スコリア少量・黒褐色土ブロック 30%。



96・97 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。 2 黑褐色土 粘性やや弱。	5mm 以下黑色スコリア微量・2mm 以下棕色スコリア少量。 5mm 以下黑色スコリア少量・2mm 以下棕色スコリア少量。
98・99・100 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや弱。	5mm 以下黑色スコリア・3mm 以下棕色スコリア少量。
101 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色スコリア少量。
102 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。 2 黑褐色土 粘性やや弱。	5mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色スコリア少量。 5mm 以下黑色スコリア・10%・2mm 以下棕色スコリア少量。
103 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	3mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色スコリア少量。
104 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	3mm 以下黑色スコリア微量・2mm 以下棕色スコリア少量。
105 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや弱。 2 黑褐色土 粘性やや弱。 10%	3mm 以下黑色スコリア少量・2mm 以下棕色スコリア微量。 3mm 以下黑色スコリア少量・2mm 以下棕色スコリア微量。 3mm 以下黑色スコリア微量・2mm 以下棕色スコリア10%培山。
106・107 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや弱。 2 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色スコリア少量。・暗褐色・粒子少量。 5mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色斯コリア微量。 3 黑褐色土 粘性やや強。 4 黑褐色土 粘性やや弱。
111 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色斯科里亞少量。
112 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色斯科里亞少量。
113 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。 炭化木材微量。	5mm 以下黑色スコリア微量・2mm 以下棕色斯科里亞少量・ 炭化木材微量。
114 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。 暗褐色土 ブロッタ少量。	5mm 以下黑色スコリア微量・2mm 以下棕色斯科里亞少量。 5mm 以下黑色斯科里亞少量・2mm 以下棕色斯科里亞少量。 3 黑褐色土 粘性やや弱。
117 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや弱。	5mm 以下黑色スコリア少量・2mm 以下棕色斯科里亞微量。
118 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	3mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色斯科里亞微量。
120 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや弱。	5mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色斯科里亞少量。
121 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	3mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色斯科里亞微量。
122 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	明黄褐色ブロッタ10%・3mm 以下棕色斯科里亞微量・2cm 根微量。
123 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。 明黄褐色土 微量。	明黄褐色ブロッタ10%・3mm 以下棕色斯科里亞微量・2cm 根微量。
124 号土坡	1 黑褐色土 粘性強。 2 明黄褐色土 粘性やや強。	明黄褐色土ブロッタ微量・3mm 以下棕色斯科里亞微量。 明黄褐色土ブロッタ微量・黑褐色土ブロッタ50%。
125 号土坡・126 号土坡	1 黑褐色土 粘性強。 2 明黄褐色土 粘性やや強。 3 黑褐色土 粘性やや強。	暗黃褐色土ブロッタ30%・3mm 以下棕色斯科里亞微量。 暗黃褐色土ブロッタ微量・3mm 以下棕色斯科里亞微量。 3 黑褐色土 粘性やや強。 明黄褐色土ブロッタ微量・3mm 以下棕色斯科里亞微量。
127 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。 2 黑褐色土 粘性強。	明黄褐色土ブロッタ30%・3mm 以下棕色斯科里亞微量。 明黄褐色土ブロッタ微量・3mm 以下棕色斯科里亞微量。
128 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。 2 黑褐色土 粘性やや弱。 3 黑褐色土 粘性強。	明黄褐色土ブロッタ30%・3mm 以下棕色斯科里亞微量。 明黄褐色土ブロッタ10%・3mm 以下棕色斯科里亞微量。 明黄褐色土ブロッタ微量・3mm 以下棕色斯科里亞微量。
129 号土坡	1 黑褐色土 粘性強。 2 黑褐色土 粘性強。	明黄褐色土ブロッタ30%・3mm 以下棕色斯科里亞微量。 明黄褐色土ブロッタ・3mm 以下棕色斯科里亞微量。

第32回 130～134・136～140、II群2～6号土坡

131 号土坡・9号ヒート	1 黑褐色土 粘性やや強。 2 黑褐色土 粘性強。	3mm 以下黑色スコリア・1mm 以下棕色スコリア微量。 3mm 以下黑色スコリア・1mm 以下棕色斯科里亞微量。
132 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや弱。	5mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色スコリア少量。
133 号土坡	1 黑褐色土 粘性強。 2 黑褐色土 粘性強。	暗黄褐色土ブロッタ30%。 3mm 以下棕色斯科里亞微量。
134 号土坡	1 黑褐色土 粘性強。	暗黄褐色土ブロッタ10%・黑褐色土ブロッタ10%。
135 号土坡	4 黑褐色土 粘性強。	暗黄褐色土ブロッタ少量・3mm 以下棕色スコリア微量。

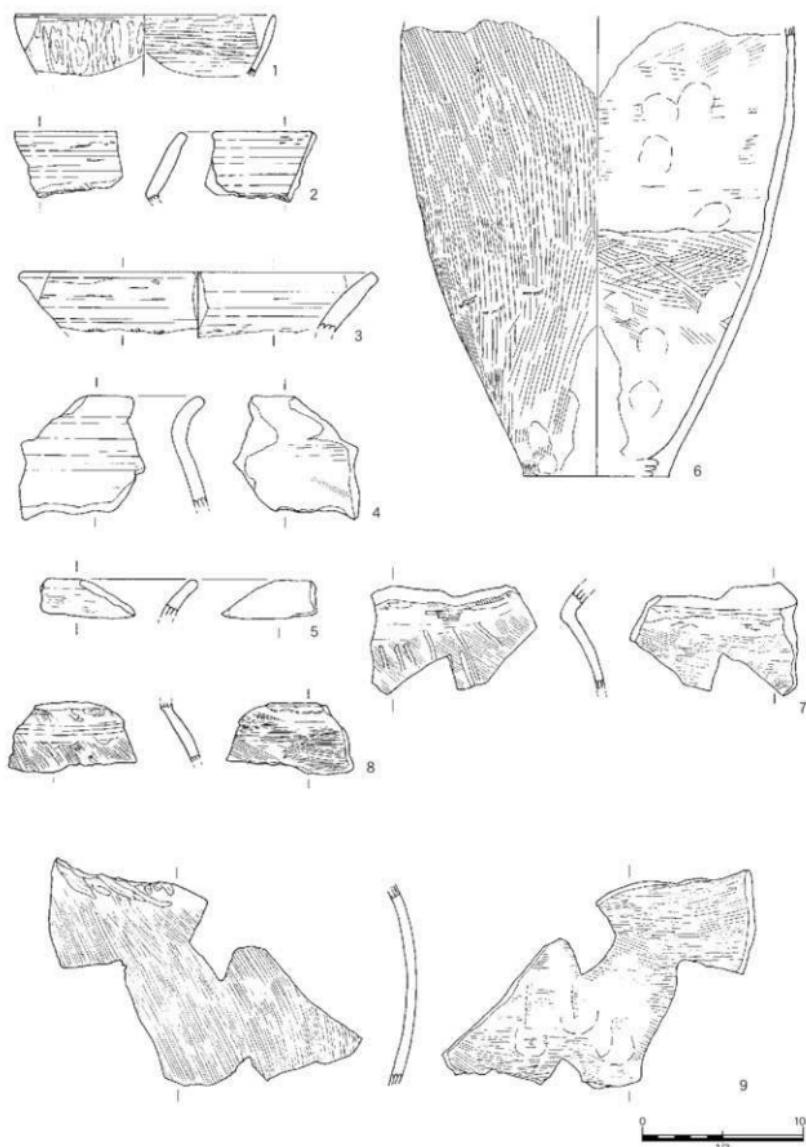
136 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア微量・2mm 以下棕色スコリア少量。
137 号土坡	1 黑褐色土 粘性強。	3mm 以下棕色スコリア・1mm 以下棕色スコリア微量。
2 黑褐色土 粘性強。	3mm 以下黑色スコリア30%・2mm 以下棕色スコリア少量。	
138 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア少量・2mm 以下棕色スコリア微量・ 明黄褐色土ブロッタ微量。
139 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色斯科里亞微量。

140 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア・5mm 以下棕色スコリア少量。
141 号土坡	1 黑褐色土 粘性強。	5mm 以下黑色スコリア微量・2mm 以下棕色斯科里亞微量。
142 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや弱。 2 黑褐色土 粘性強。	10mm 以下黑色スコリア・2mm 以下棕色スコリア微量。 2 黑褐色土 粘性強。 3 黑褐色土 粘性弱。
143 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	10mm 以下黑色スコリア・3mm 以下棕色スコリア30% (山地)。
144 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア・3mm 以下棕色スコリア微量。

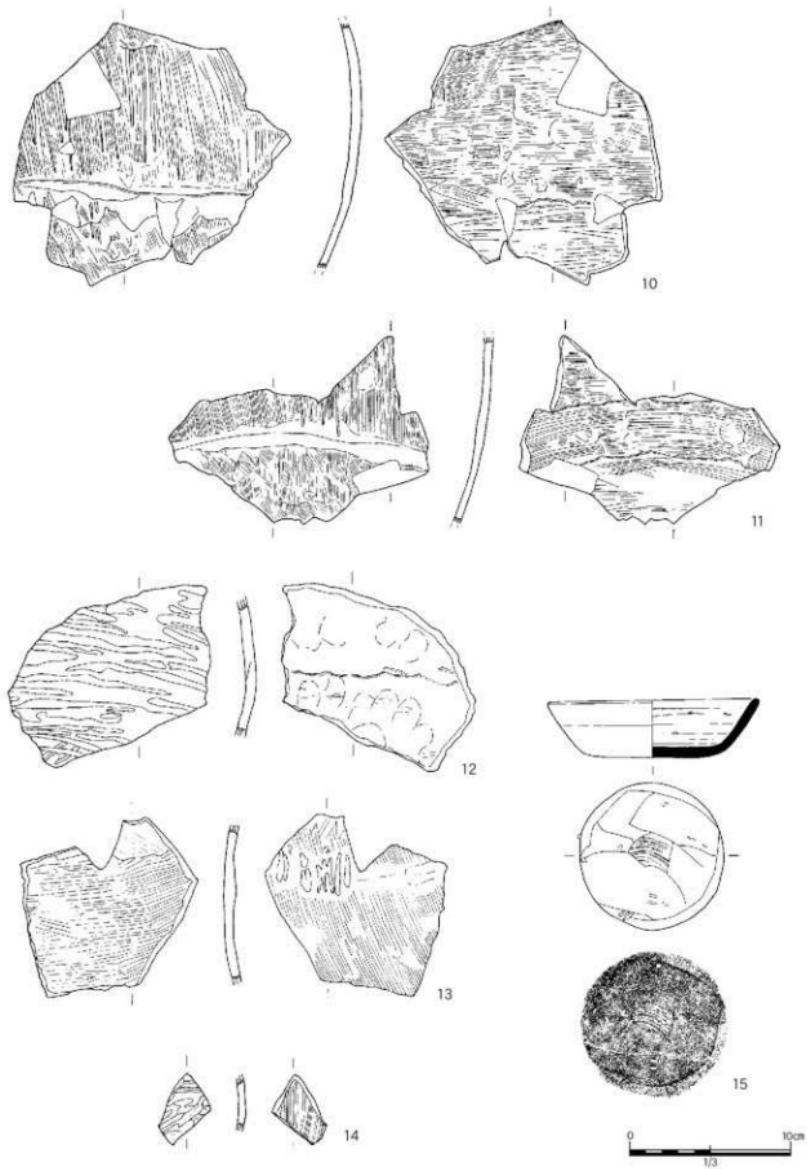
145 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下黑色スコリア・3mm 以下棕色スコリア少量。
146 号土坡	1 黑褐色土 粘性強。	5mm 以下の黑色スコリア微量・5mm 以下の棕色スコリア少量・黑褐色粘土粒子微量。
2 黑褐色土 粘性強。	5mm 以下の黑色スコリア微量・5mm 以下の棕色スコリア少量・黑褐色粘土粒子10%。	
147 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下の黑色スコリア微量・5mm 以下の棕色スコリア微量・ 炭化粒子微量。
2 黑褐色土 粘性やや強。	2 黑褐色土 粘性やや強。	黑褐色土ブロッタ少量。

148 号土坡	1 黑褐色土 粘性やや強。	5mm 以下の黑色スコリア微量・3mm 以下の棕色スコリア少量。
149 号土坡	1 黑褐色土 粘性強。	2~5cm 粒少。

1号竪穴建設跡

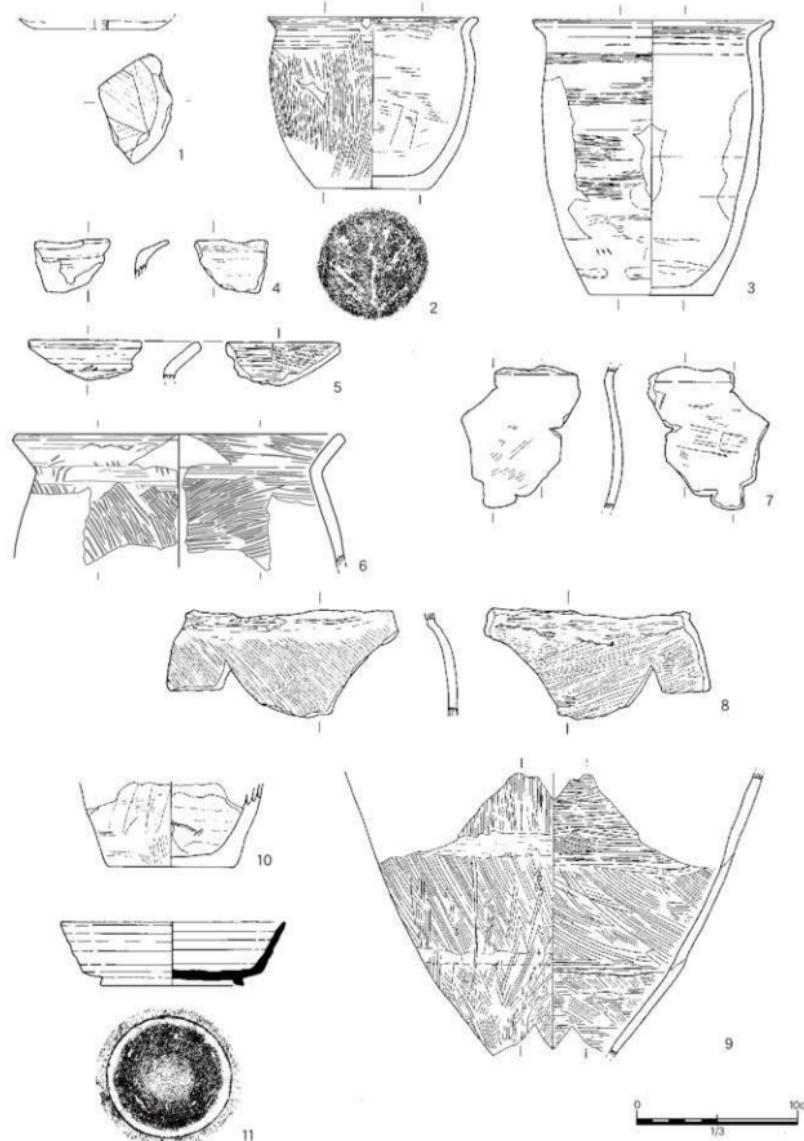


第33図 1号竪穴建物跡出土遺物(1)



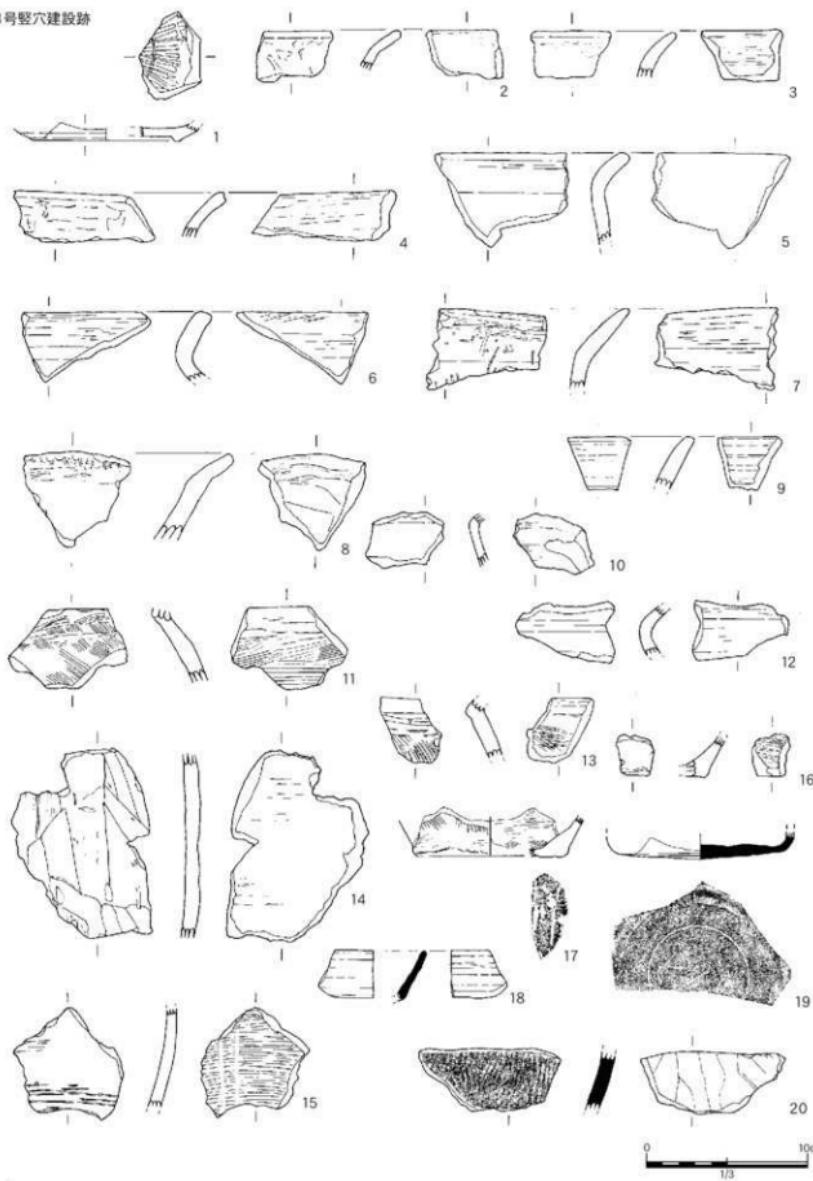
第34図 1号竪穴建物跡出土遺物(2)

2号竪穴建設跡

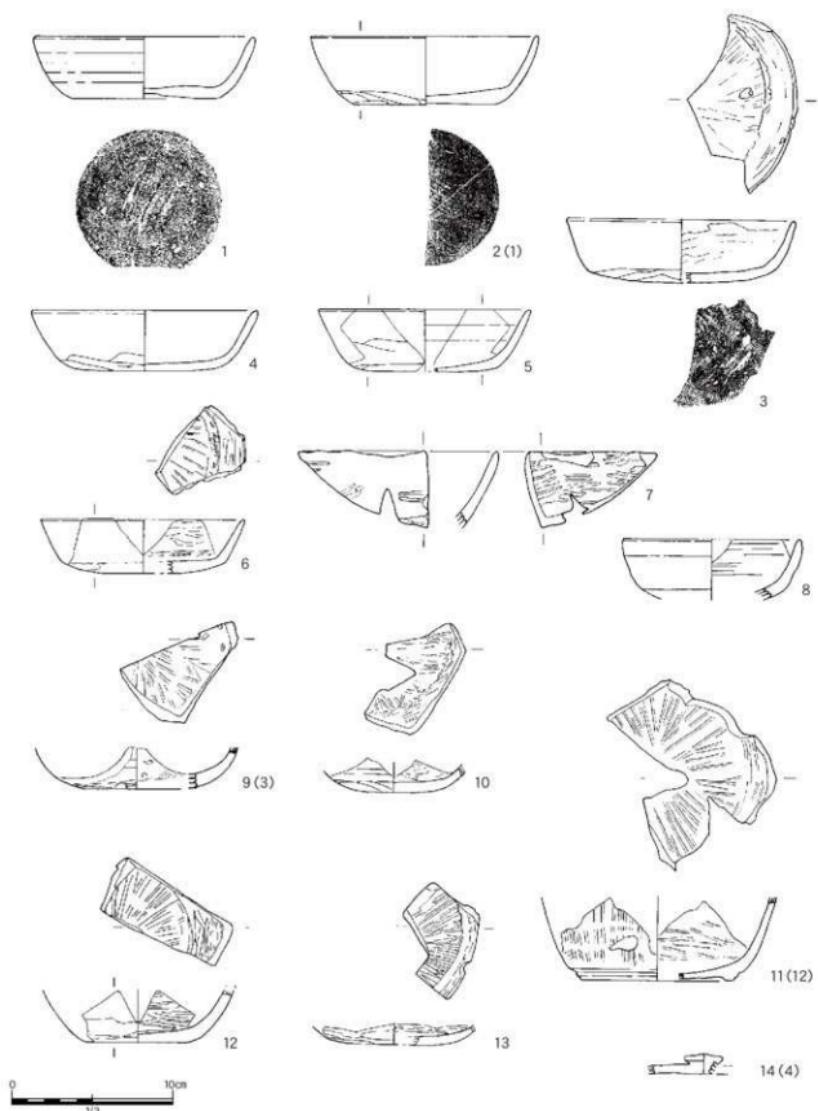


第35図 2号竪穴建物跡出土遺物

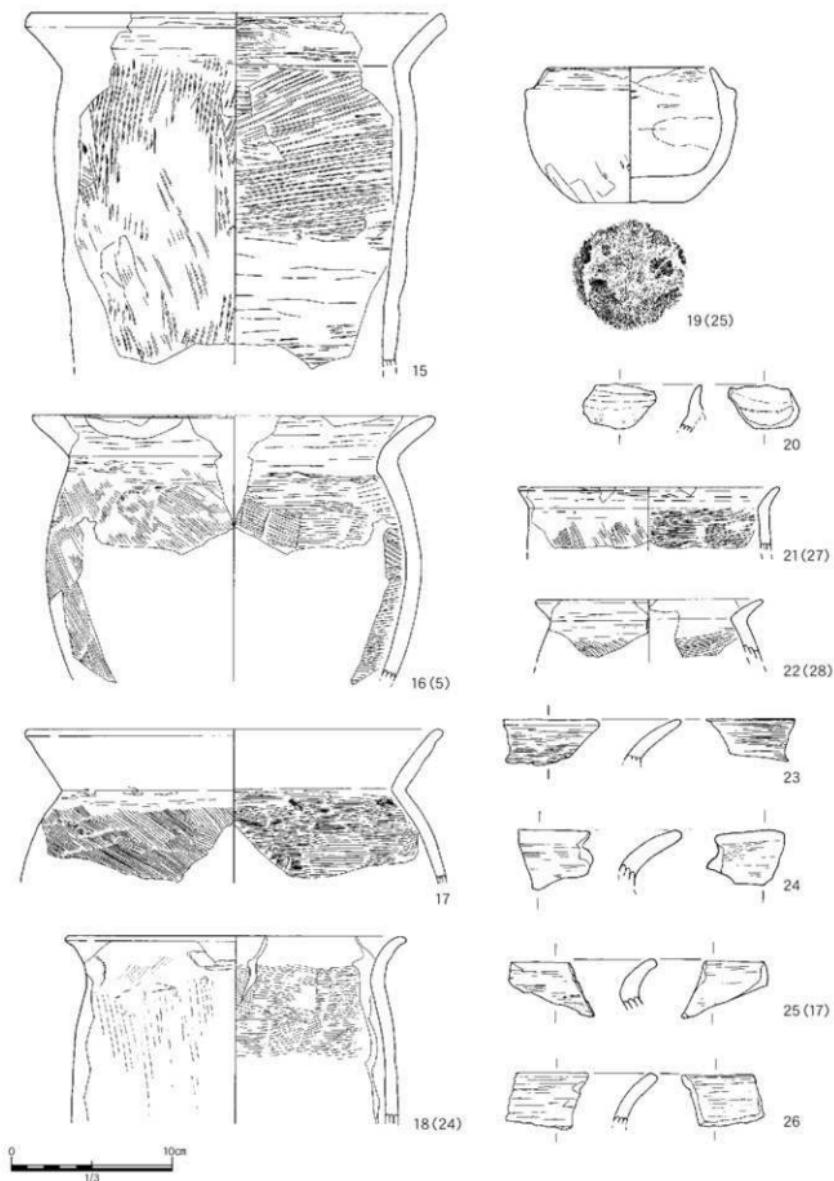
3号竪穴建設跡



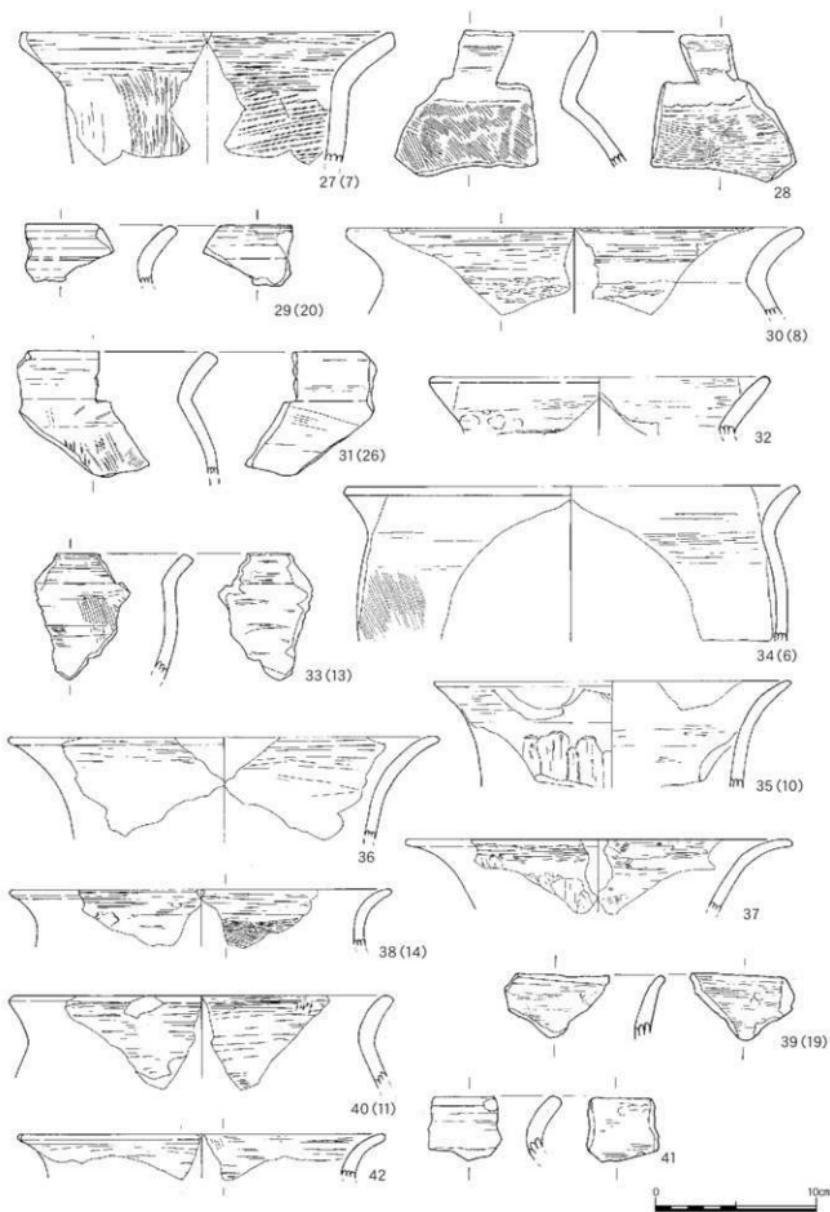
第36図 3号竪穴建物跡出土遺物



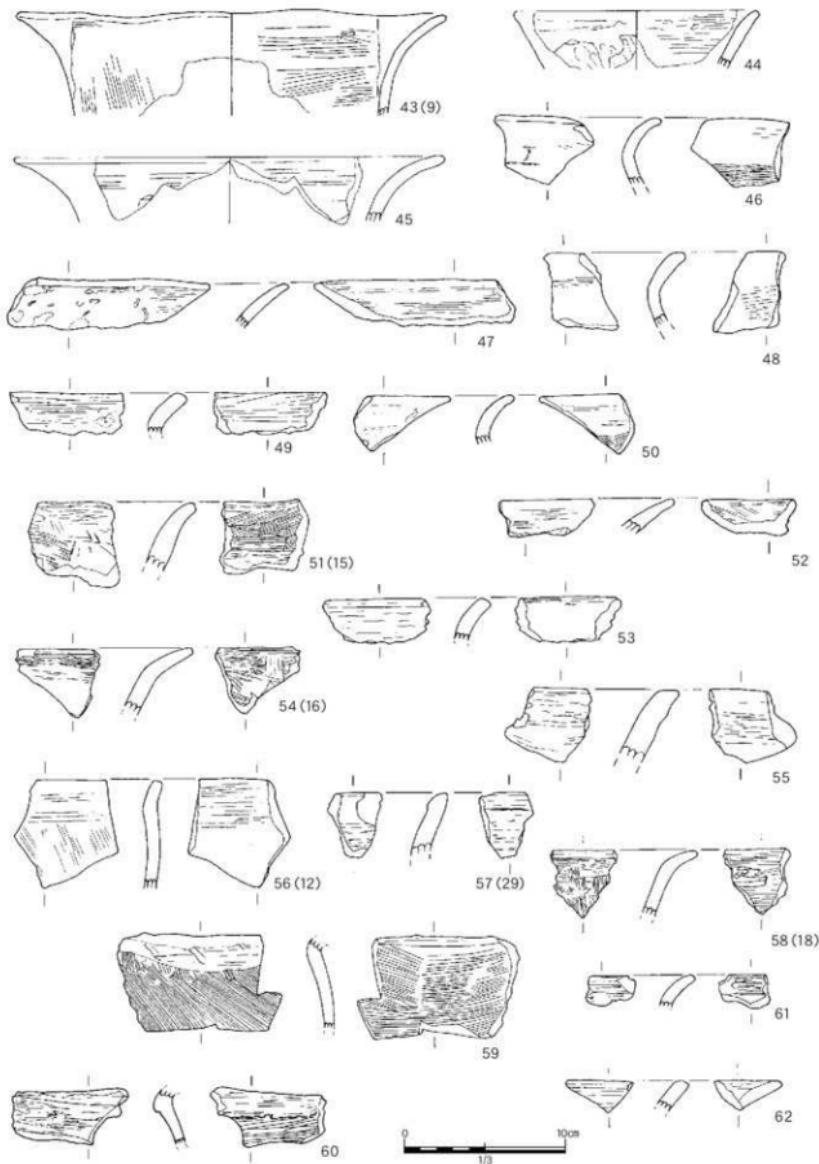
第37図 4号竪穴建物跡出土遺物(1)※( )内は胎土分析試料No.



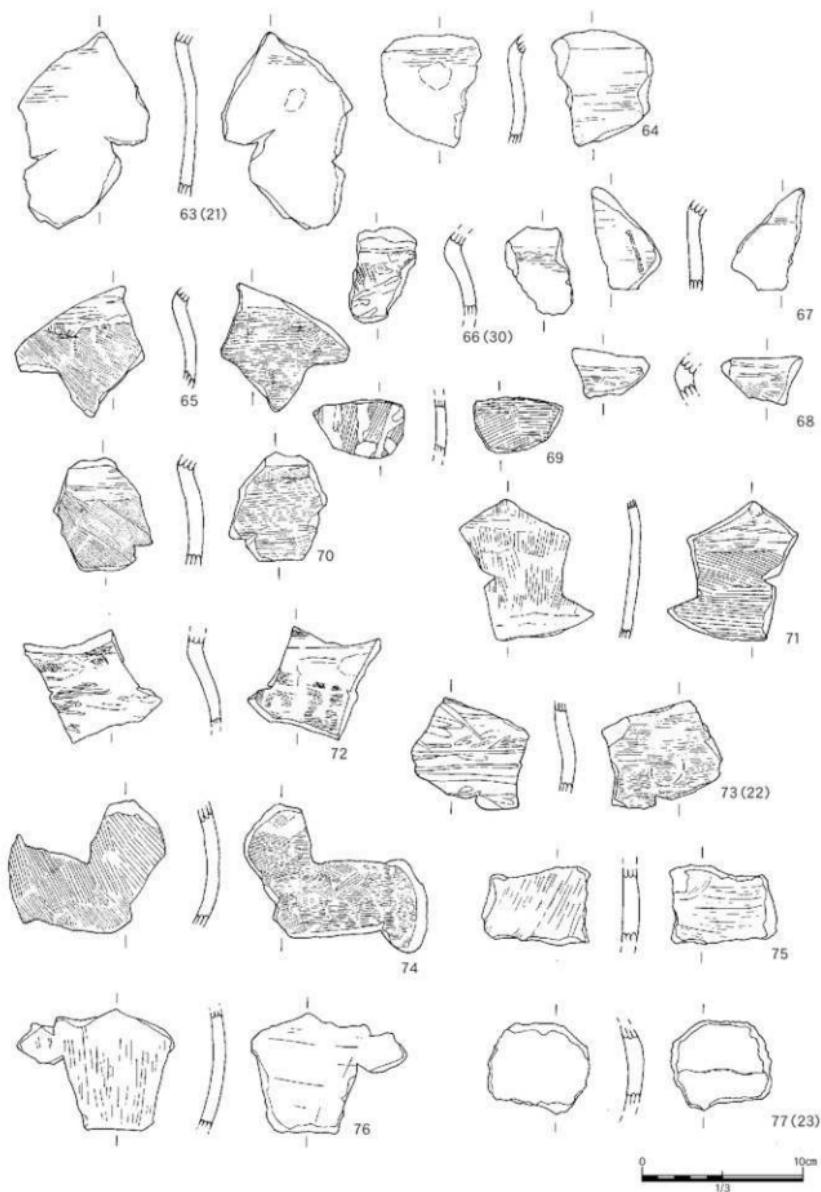
第38図 4号竪穴建物跡出土遺物(2) ※( )内は胎土分析試料No.



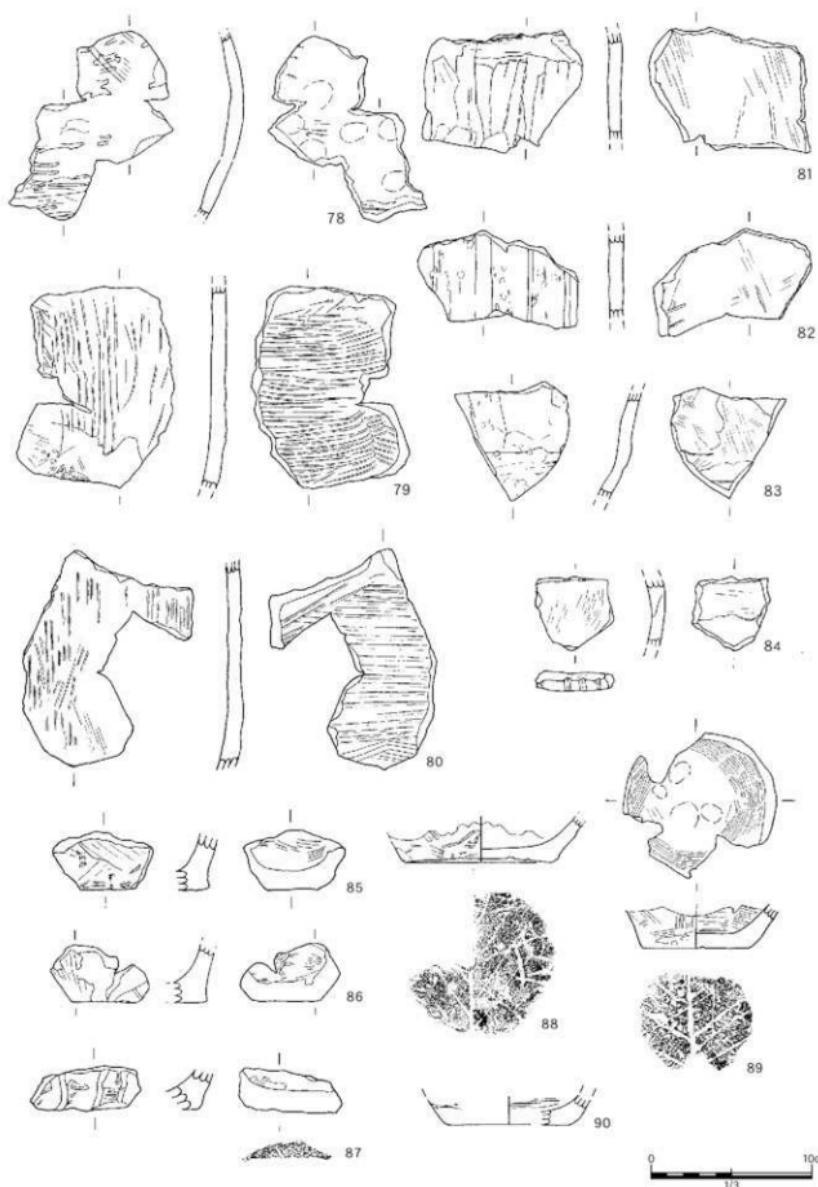
第39図 4号竪穴建物跡(3)※( )内は胎土分析試料No.



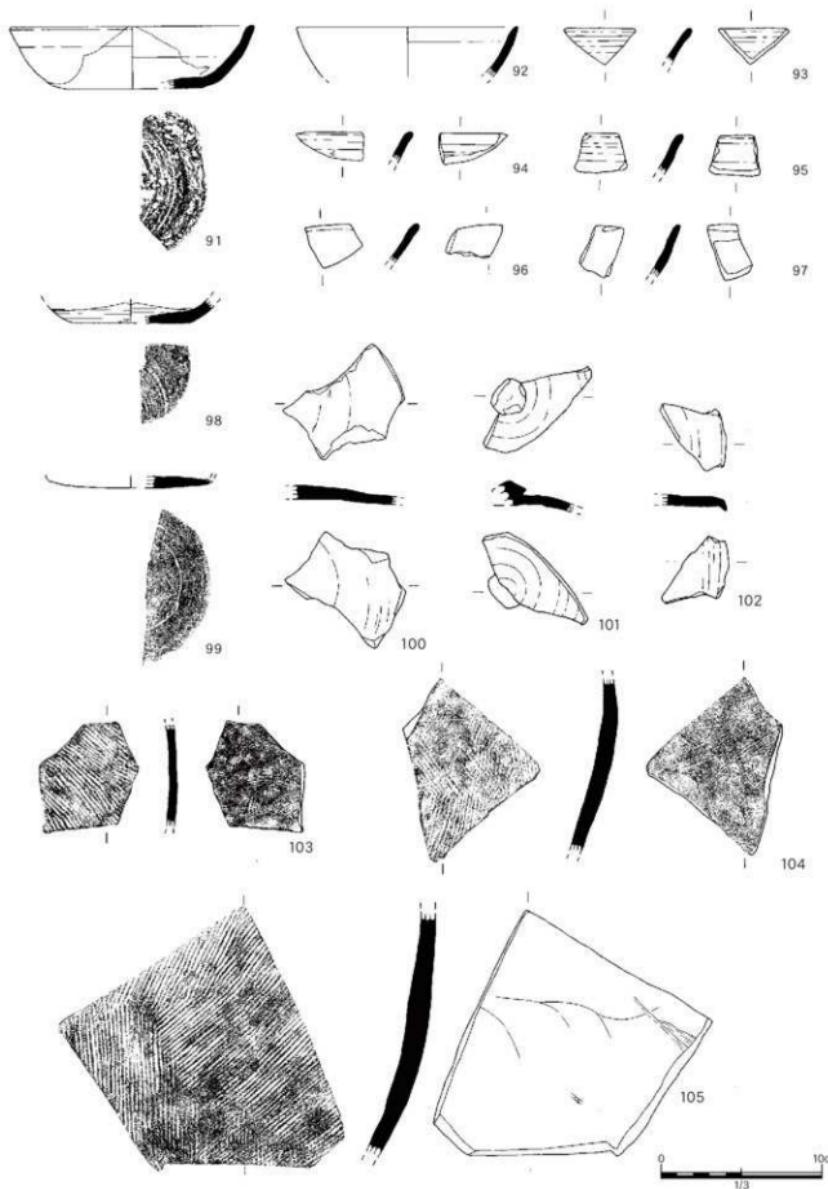
第40図 4号竪穴建物跡出土遺物(4)※( )内は胎土分析試料No.



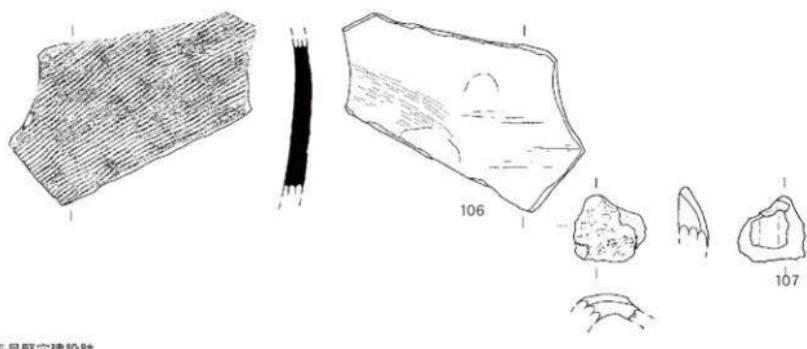
第41図 4号竖穴建物跡出土遺物(5) ( )内は胎土分析試料No.



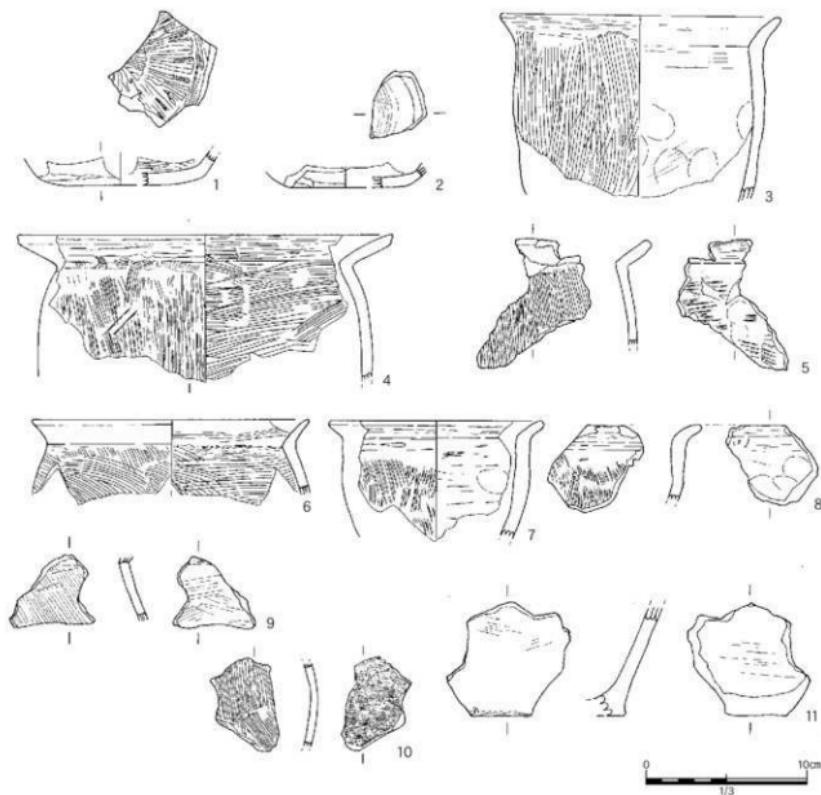
第42図 4号竪穴建物跡出土遺物(6)



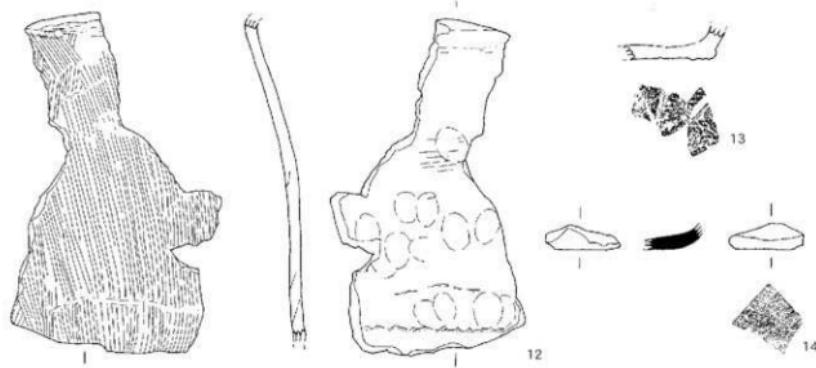
第43図 4号竖穴建物跡出土遺物(7)



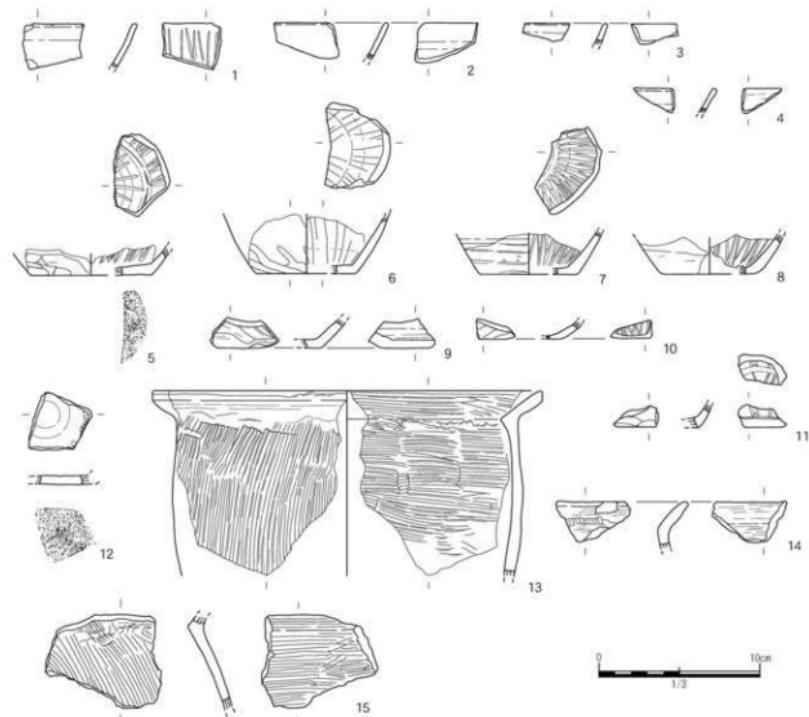
5号竪穴建設跡



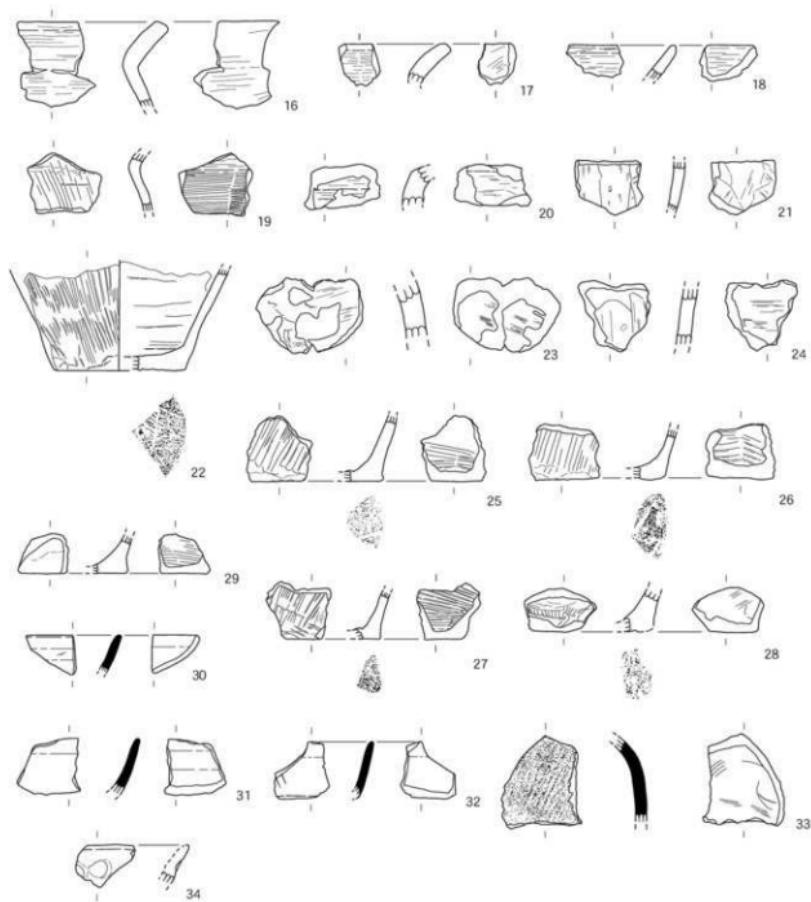
第44図 4号竪穴建物跡(8)・5号竪穴建物跡(1)出土遺物



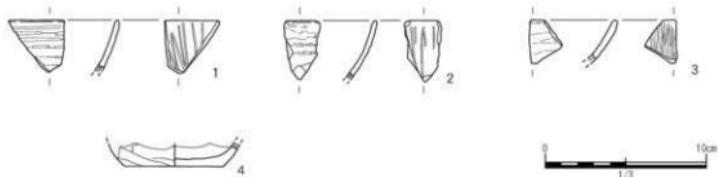
6号竖穴建物跡



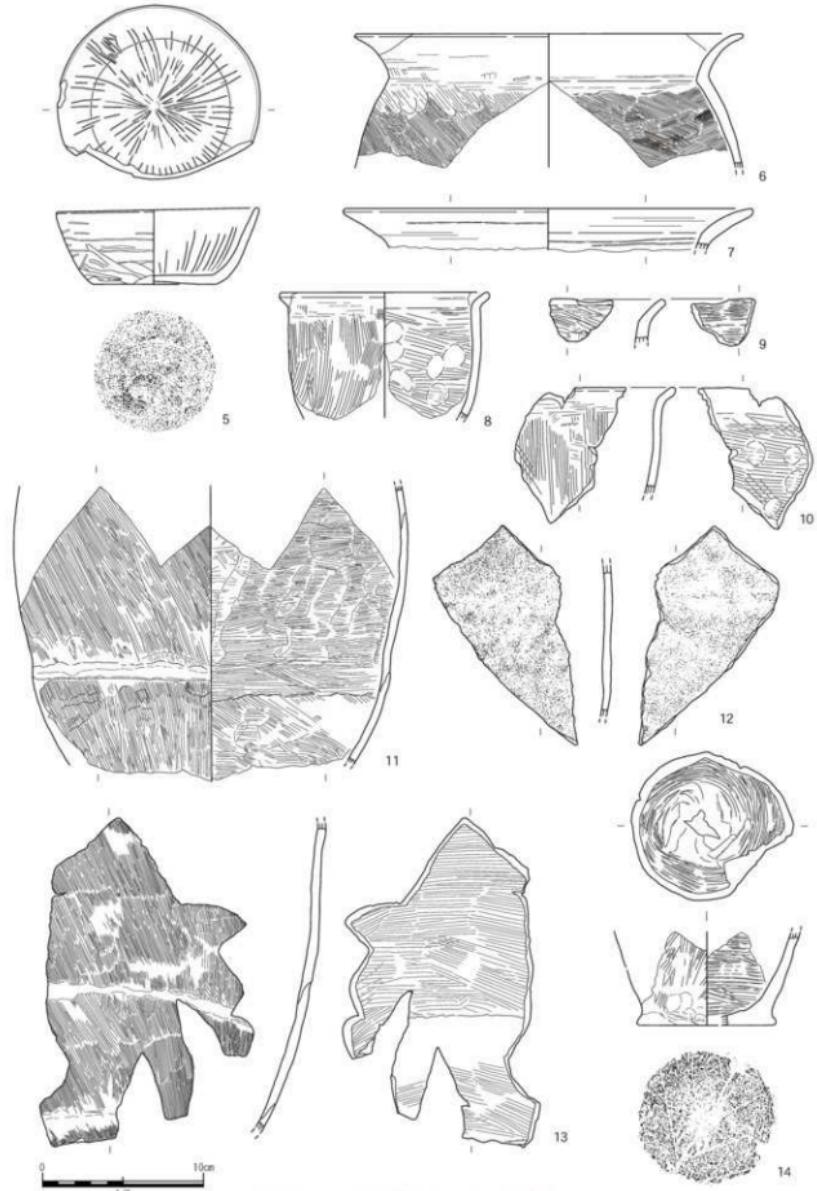
第45図 5号竖穴建物跡 (2)・6号竖穴建物跡 (1) 出土遺物



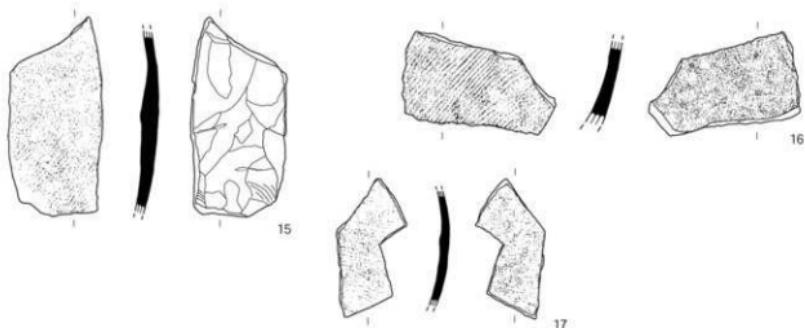
7号竪穴建物跡



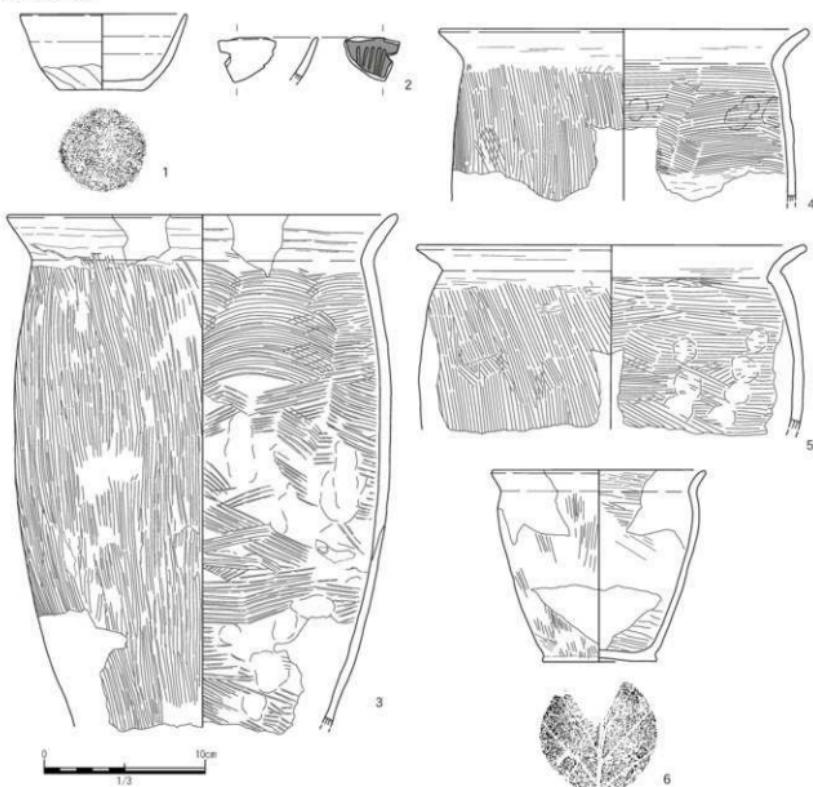
第46図 6号竪穴建物跡(2)・7号竪穴建物跡(1)出土遺物



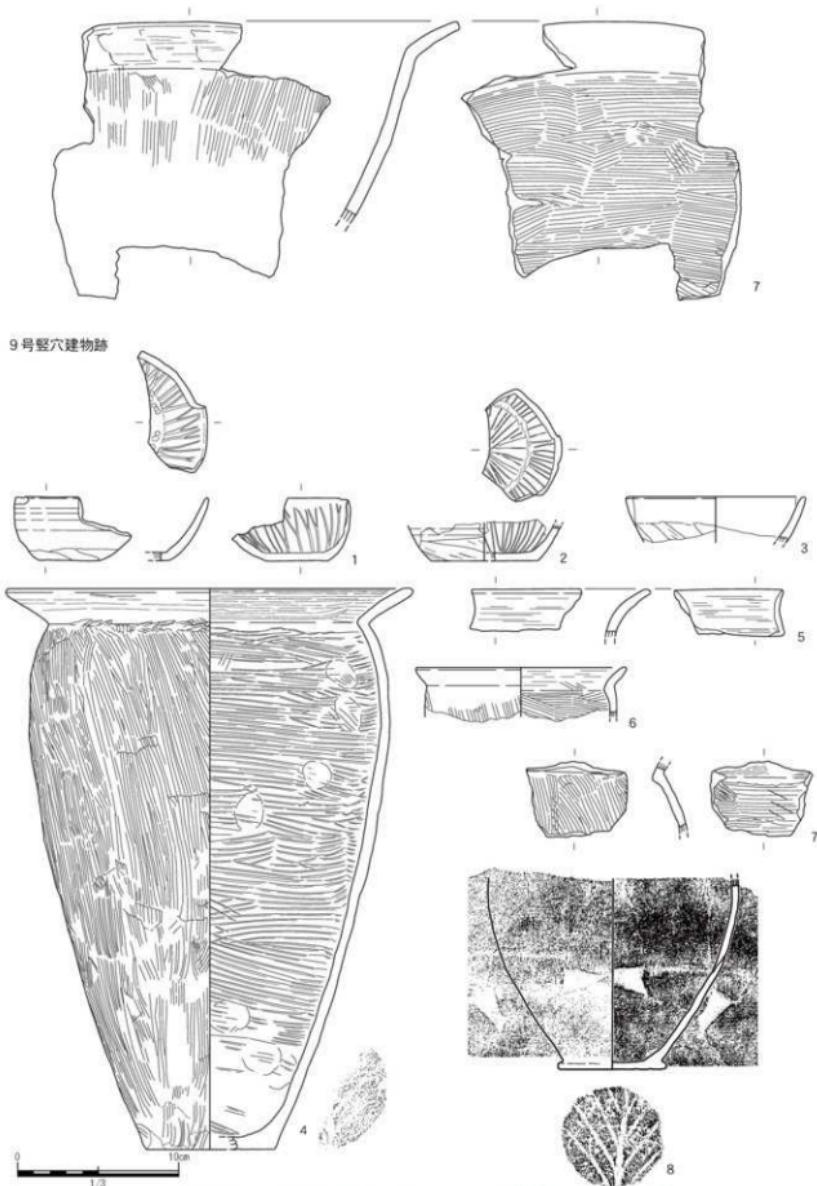
第47図 7号竪穴建物跡(2)出土遺物



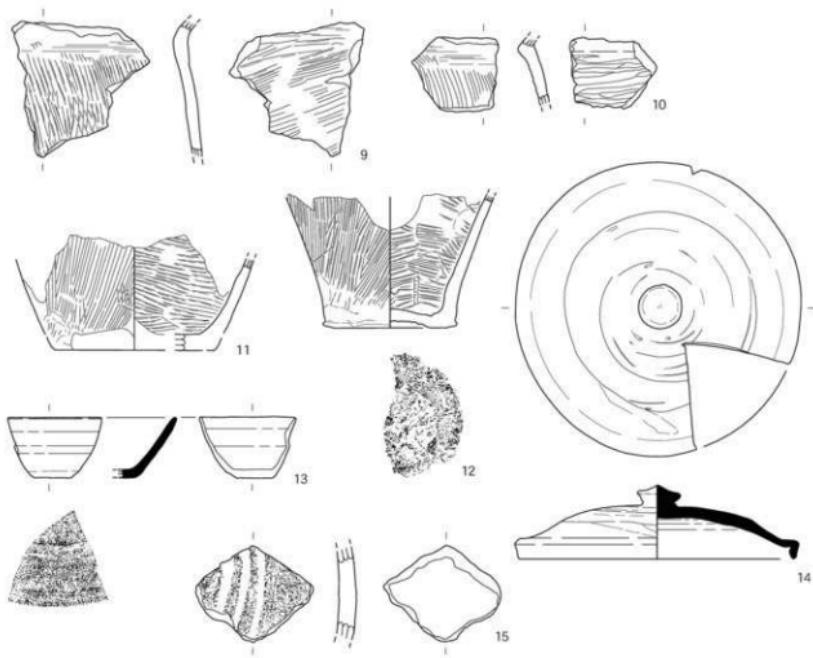
8号竪穴建物跡



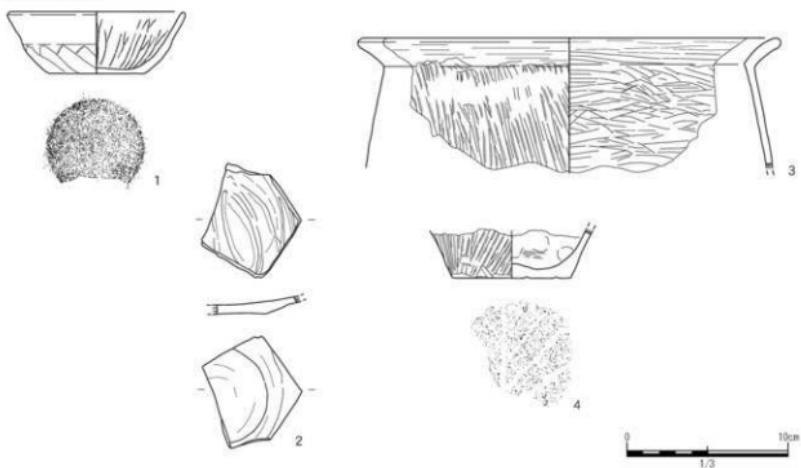
第48図 7号竪穴建物跡（3）・8号竪穴建物跡（1）出土遺物



第49図 8号竪穴建物跡(2)・9号竪穴建物跡(1)出土遺物

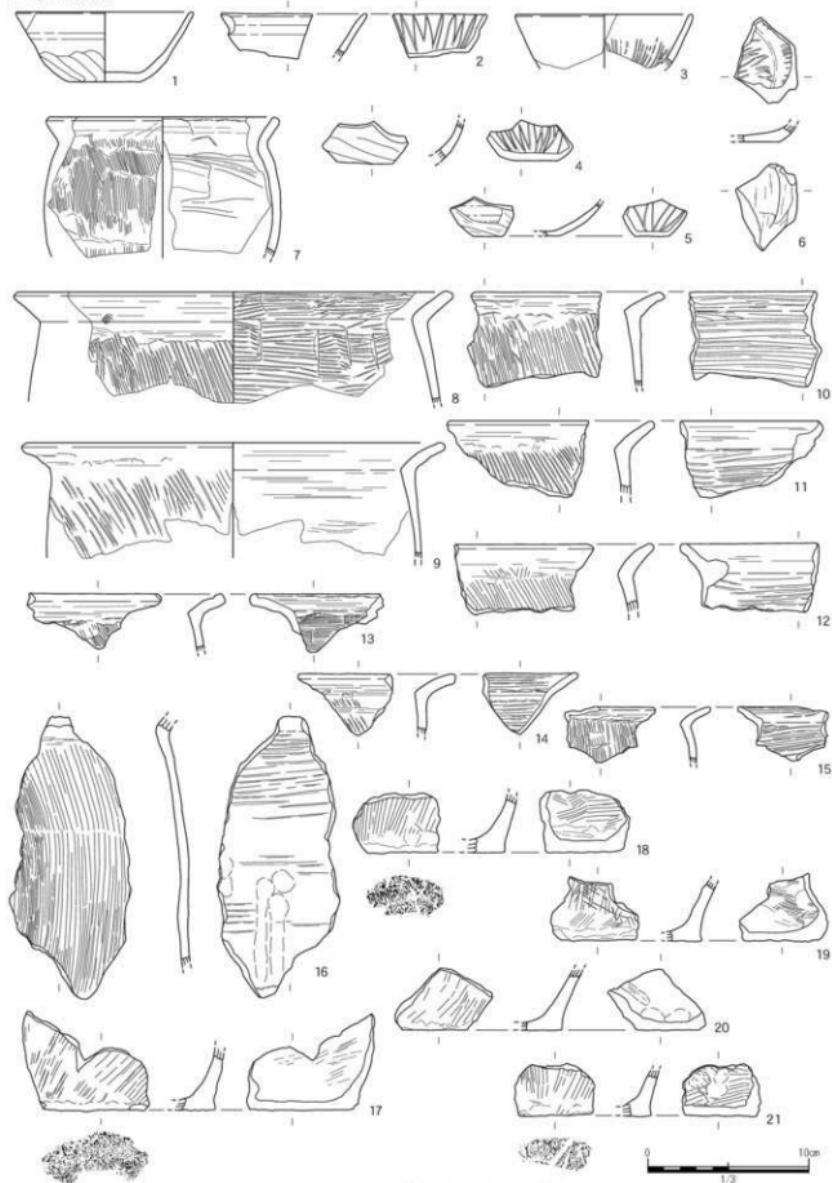


10号竖穴建物跡

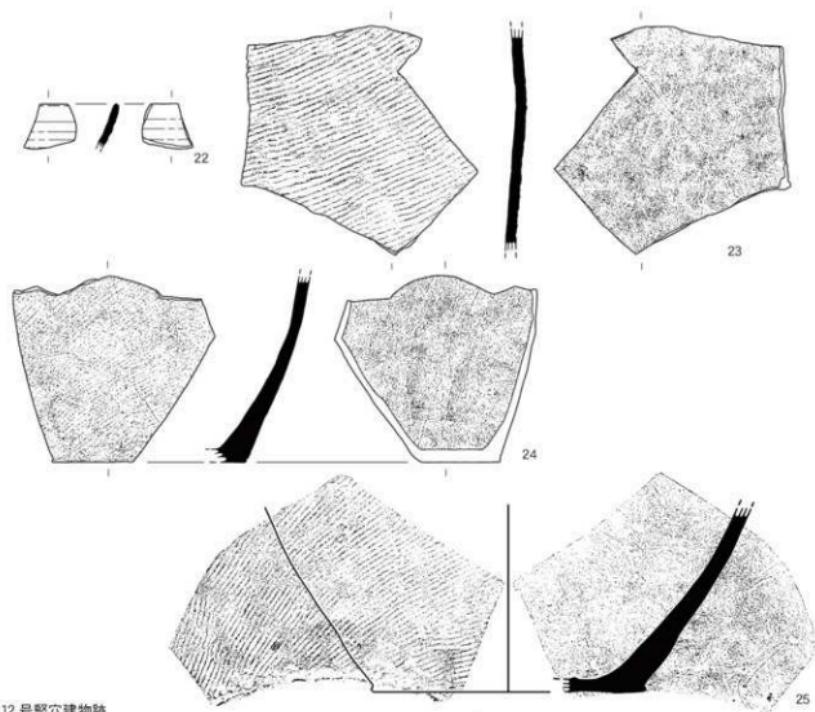


第50図 9号竪穴建物跡（2）・10号竪穴建物跡出土遺物

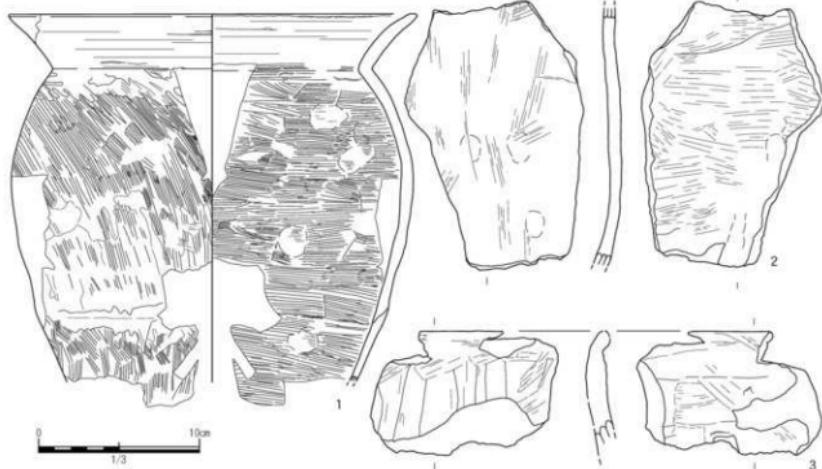
11号竪穴建物跡



第51図 11号竪穴建物跡（1）出土遺物

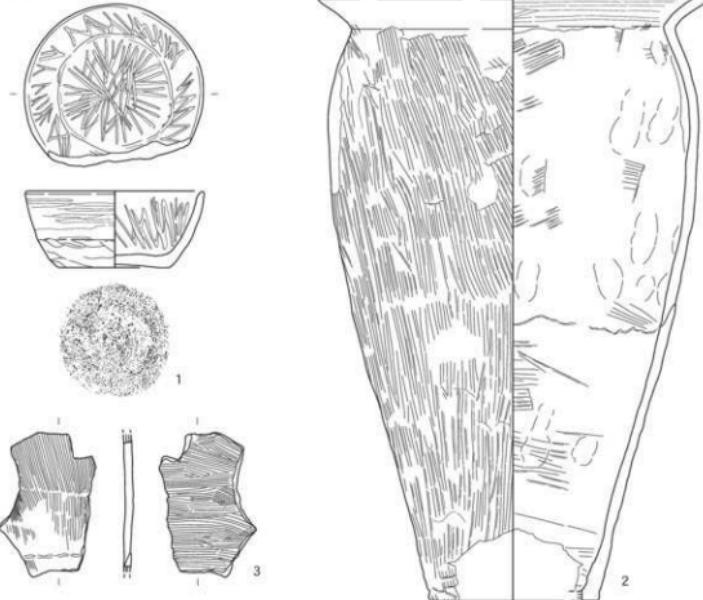


12号竪穴建物跡



第52図 11号竪穴建物跡(2)・12号竪穴建物跡出土遺物

13号竖穴建物跡



1号掘立柱建物跡



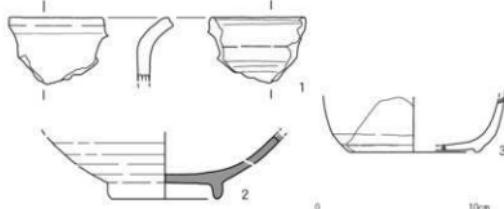
2号掘立柱建物跡



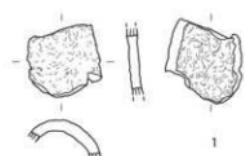
3号掘立柱建物跡



1号溝状遺構

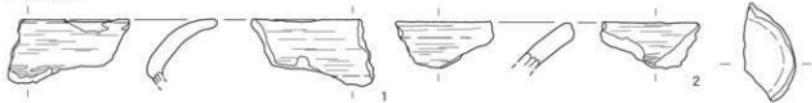


4号掘立柱建物跡（石製品）

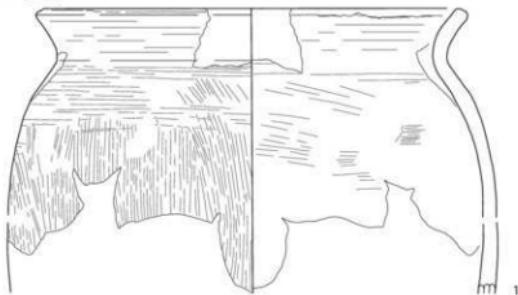


第53図 13号竖穴建物跡、1～4号掘立柱建物跡、1号溝状遺構出土遺物

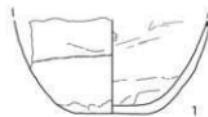
7号溝状遺構



11号土坑



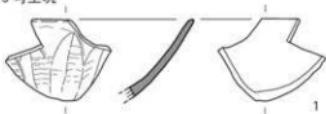
23号土坑



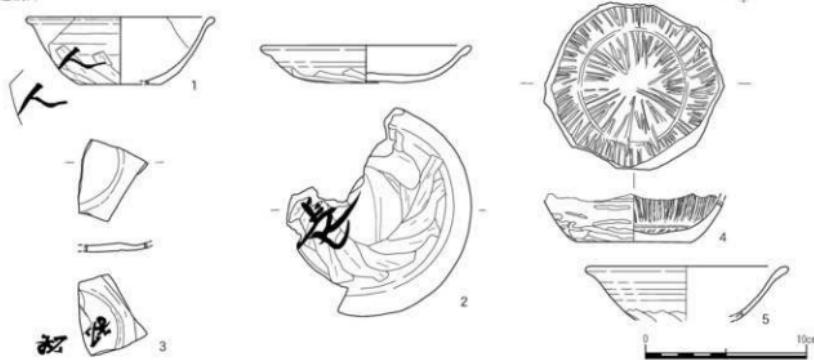
24号土坑



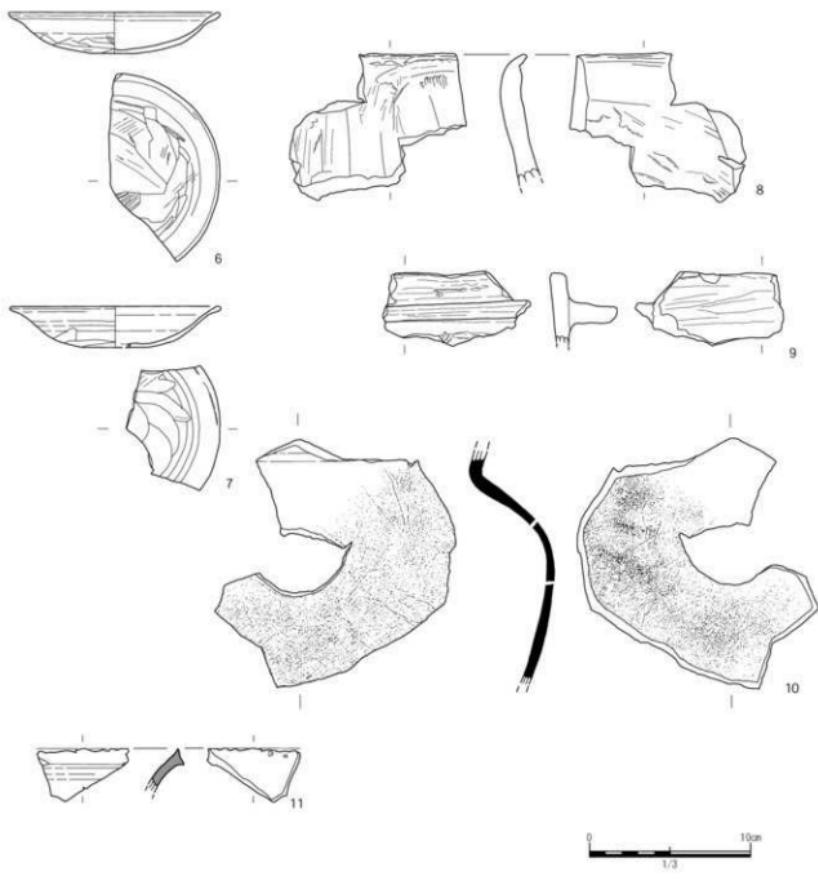
79・115号土坑



遺構外

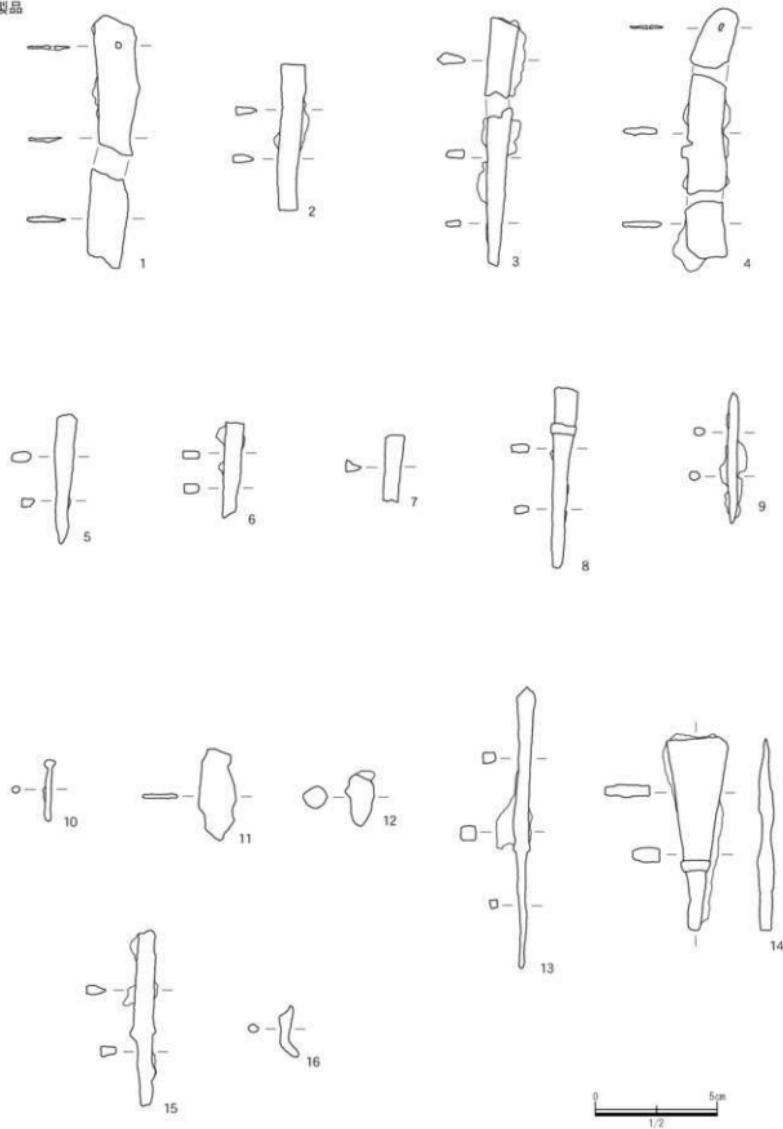


第54図 7号溝状遺構、11・23・24・79・115号土坑、遺構外（1）出土遺物



第55図 遺構外（2）出土遺物

鉄製品



第56図 鉄製品

第3表 出土遺物觀察表

固 番 号	出土地点	注記番号	種別	形狀	長径 幅 厚	直徑 幅 厚	形狀・調査法(外側)	形狀・調査法(内側)	色 調	胎 土	燒 成	時 期	備 考	
33 1	1号窯の焼物	八.63	土鍋類	平	1口横断	16.0	三手牛	三手牛	明褐色	白	8世紀後半			
33 2	1号窯の焼物	八.8	土鍋類	圓	1口横断	16.0	底面：ハナ	底面：ハナ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
33 3	1号窯の焼物	八.40	土鍋類	圓	1口横断	16.0	底面：ハナ	底面：ハナ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
33 4	1号窯の焼物	八.24	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
33 5	1号窯の焼物	八.15	土鍋類	圓	1口横断	16.0	ヨコハナ	ヨコハナ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
33 6	1号窯の焼物	八.18, 19	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
33 7	1号窯の焼物	八.54	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
33 8	1号窯の焼物	八.54	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
33 9	1号窯の焼物	八.32, 33, 35, 45, 52	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
34 10	1号窯の焼物	八.25, 21, 28, 41, 36, 51, 54	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
34 11	1号窯の焼物	八.20, 23, 40, 61	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
34 12	1号窯の焼物	八.38	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
34 13	1号窯の焼物	八.39, 41, 53, 62	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
34 14	1号窯の焼物	八.4	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
34 15	1号窯の焼物	八.1	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
35 1	2号窯の焼物	八.3	土鍋類	小便	50%	13.0	8.8	9	ヨコハナ	褐色	白	8世紀後半		
35 2	2号窯の焼物	八.15, 20, 22, 43, 33, 35	土鍋類	小便	50%	13.0	6.8	10.5	ヨコハナ	褐色	白	8世紀後半		
35 3	2号窯の焼物	八.4, 26, 31, 38, 42	土鍋類	小便	50%	13.0	7.6	16.8	子牛	ハラナデ	白	8世紀後半		
35 4	2号窯の焼物	八.18	土鍋類	小便	50%	13.0	7.6	16.8	子牛	ハラナデ	白	8世紀後半		
35 5	2号窯の焼物	八.41	土鍋類	小便	50%	13.0	7.6	16.8	子牛	ハラナデ	白	8世紀後半		
35 6	2号窯の焼物	八.12, 28, 32	土鍋類	小便	50%	13.0	7.6	16.8	子牛	ハラナデ	白	8世紀後半		
35 7	2号窯の焼物	八.36, 37	土鍋類	小便	50%	13.0	7.6	16.8	子牛	ハラナデ	白	8世紀後半		
35 8	2号窯の焼物	八.1, 16	土鍋類	小便	50%	13.0	7.6	16.8	子牛	ハラナデ	白	8世紀後半		
35 9	2号窯の焼物	八.5, 17, 27, 29, 30, 34, 43, 51	土鍋類	小便	50%	13.0	7.6	16.8	子牛	ハラナデ	白	8世紀後半		
35 10	2号窯の焼物	八.25	土鍋類	小便	50%	13.0	7.6	16.8	子牛	ハラナデ	白	8世紀後半		
35 11	2号窯の焼物	八.1	土鍋類	高台形	90%	13.8	8.8	3.9	底面：横斜め切り	あごひげ	白	8世紀後半		
36 1	3号窯の焼物	八.41	土鍋類	高台形	90%	13.8	8.8	3.9	底面：横斜め切り	あごひげ	白	8世紀後半		
36 2	3号窯の焼物	八.50	土鍋類	高台形	90%	13.8	8.8	3.9	底面：横斜め切り	あごひげ	白	8世紀後半		
36 3	3号窯の焼物	八.4	土鍋類	高台形	90%	13.8	8.8	3.9	底面：横斜め切り	あごひげ	白	8世紀後半		
36 4	3号窯の焼物	八.52	土鍋類	高台形	90%	13.8	8.8	3.9	底面：横斜め切り	あごひげ	白	8世紀後半		
36 5	3号窯の焼物	八.6	土鍋類	高台形	90%	13.8	8.8	3.9	底面：横斜め切り	あごひげ	白	8世紀後半		
36 6	3号窯の焼物	一括	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 7	3号窯の焼物	八.7	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 8	3号窯の焼物	八.8	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 9	3号窯の焼物	八.22	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 10	3号窯の焼物	八.36	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 11	3号窯の焼物	八.1	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 12	3号窯の焼物	八.24	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 13	3号窯の焼物	八.15	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 14	3号窯の焼物	八.27, 39, 43	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 15	3号窯の焼物	八.19	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 16	3号窯の焼物	八.40	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 17	3号窯の焼物	八.16	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 18	3号窯の焼物	八.1	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		
36 19	3号窯の焼物	八.2	土鍋類	圓	1口横断	16.0	子牛	ハラナデ	褐色	白	8世紀後半	鋸切型		

問番号	出典場所	注記番号	種別	固有種	種名	原产地・ 原生地	原産地・ 原生地	花期(cm)	花期・ 開花時期(月)	蝶形・ 蝶形花柱(月)	色	調	前上	幼虫	寄生	宿主
36	23. 3引寄の植物	7,3	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	10月	秋後	蝶形	白色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	1. 4引寄の植物	八224～227	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	12月	8.8	3.9	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	2. 4引寄の植物	八53, 287	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	4月	10.0	4.2	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	3. 4引寄の植物	八65, 133	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	4月	10.0	3.9	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	4. 4引寄の植物	八315, 335, 339, 340, 345,	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	6月	13.6	8.2	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	5. 4引寄の植物	八38, 349	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	13.0	10.4	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	6. 4引寄の植物	八327, 一枯	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	12.0	10.0	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	7. 4引寄の植物	八328	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	8. 4引寄の植物	八19, 20	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	9. 4引寄の植物	八272	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	10. 4引寄の植物	八28, 45	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	9.25	6.4	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	11. 4引寄の植物	八25, 257	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	9.25	6.4	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	12. 4引寄の植物	八90, 96, 124	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	9.4	6.4	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	13. 4引寄の植物	八307, 一枯	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	7.6	3.7	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
37	14. 4引寄の植物	八321	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	8.2	3.7	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	15. 4引寄の植物	八13, 352, 354, 一枯	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	16. 4引寄の植物	八43, 91, 95, 304, 一枯	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	17. 4引寄の植物	八102, 184, 185, 190	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	18. 4引寄の植物	八301, 362, 377, 395	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	19. 4引寄の植物	八350	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	20. 4引寄の植物	八363	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	21. 4引寄の植物	八217, 218	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	22. 4引寄の植物	八157	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	23. 4引寄の植物	八204	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	24. 4引寄の植物	八216	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	25. 4引寄の植物	八189	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
38	26. 4引寄の植物	八71	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	27. 4引寄の植物	八55, 179, 307, 324, 一枯	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	28. 4引寄の植物	八138, 158	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	29. 4引寄の植物	八160	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	30. 4引寄の植物	八178, 一枯	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	31. 4引寄の植物	八132	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	32. 4引寄の植物	一枯	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	33. 4引寄の植物	八303, 304	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	34. 4引寄の植物	八64	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	35. 4引寄の植物	八46, 269, 280	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	36. 4引寄の植物	八109	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	37. 4引寄の植物	八58, 112	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	38. 4引寄の植物	八274	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本
39	39. 4引寄の植物	八325	蝶科	蝶	蝶	日本	日本	7月	10.0	3.3	淡青色	日付	日本	日本	寄生	日本





回	番号	出土地点	記号	種類	形種	頭骨 長軸 前後 横幅 高さ	口部 長軸 横幅 前後	足部 長軸 横幅 前後	身	土	地質	周	附
45	5	6月9日(晴)	/15	人頭骨	环	頭骨半 身頭骨	7.4	7.4	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	6	6月9日(晴)	/27	人頭骨	环	体・足部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	7	6月9日(晴)	/33	人頭骨	环	頭骨	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	8	6月9日(晴)	/12	人頭骨	环	頭骨	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	9	6月9日(晴)	/22	人頭骨	环	頭骨	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	10	6月9日(晴)	-15	人頭骨	环	頭骨	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	11	6月9日(晴)	-15	人頭骨	环	頭骨	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	12	6月9日(晴)	/8	人頭骨	环	頭骨	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	13	6月9日(晴)	/45, 46	人頭骨	環	口頭部 休部	2.4	2.4	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	14	6月9日(晴)	/89	人頭骨	環	頭部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	15	6月9日(晴)	/49	人頭骨	環	頭部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
45	16	6月9日(晴)	/5, 43	人頭骨	環	頭部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	17	6月9日(晴)	/8, 2	人頭骨	環	頭部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	18	6月9日(晴)	/26	人頭骨	環	頭部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	19	6月9日(晴)	/24	人頭骨	環	頭部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	20	6月9日(晴)	/24	人頭骨	環	頭部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	21	6月9日(晴)	/23	人頭骨	環	頭部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	22	6月9日(晴)	/51	人頭骨	環	頭部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	23	6月9日(晴)	/20, 42	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	24	6月9日(晴)	/44	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	25	6月9日(晴)	/39	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	26	6月9日(晴)	/17	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	27	6月9日(晴)	/36	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	28	6月9日(晴)	/14	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	29	6月9日(晴)	/1	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	30	6月9日(晴)	-12	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	31	6月9日(晴)	/7, 1	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	32	6月9日(晴)	/7, 1	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
46	33	6月9日(晴)	/1	人頭骨	環	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	4	7月10日(晴)	/1	人頭骨	休部	休部	6.0	6.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	5	7月10日(晴)	/55	人頭骨	休部	休部	7.0	7.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	6	7月10日(晴)	/24, 25, 34, 39, 45,	人頭骨	休部	休部	7.0	7.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	7	7月10日(晴)	/48, /6, 10, 53	人頭骨	休部	休部	7.0	7.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	8	7月10日(晴)	/14, 27	人頭骨	休部	休部	7.0	7.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	9	7月10日(晴)	-15	人頭骨	休部	休部	7.0	7.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	10	7月10日(晴)	/6, 16, 17	人頭骨	休部	休部	7.0	7.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	11	7月10日(晴)	/37, 46	人頭骨	休部	休部	7.0	7.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	12	7月10日(晴)	/11, 12	人頭骨	休部	休部	7.0	7.0	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	13	7月10日(晴)	/4, 20, 26, 31, 33, 38,	人頭骨	休部	休部	8.4	8.4	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	
47	14	7月10日(晴)	/15, 26, 28	人頭骨	休部	休部	8.4	8.4	頭・脚骨法 (内面)	骨	頭骨	自世紀後半	

問番号	出典場所	注記番号	補羽	高脚	尾羽 *	口唇	距脚	體長 (cm)	體形・體被特徴 (外因)	體形・體被特徴 (内因)	色調	前上	後足	腰帶	備考
48	15 7号房の健脚	7.2	尾羽	尾羽	尾羽	-	-	-	タガキ	当日起、ヘタケツノ	灰色	足・脚は地色	足・脚は地色	足・脚は地色	
48	16 7号房の健脚	7.1	尾羽	尾羽	尾羽	-	-	-	タガキ	当日起、ヘタケツノ	灰色	足・脚は地色	足・脚は地色	足・脚は地色	
48	17 7号房の健脚	7.3	尾羽	尾羽	尾羽	-	-	-	タガキ	当日起、ヘタケツノ	灰色	足・脚は地色	足・脚は地色	足・脚は地色	
48	1 8号房の健脚	8.25	土脚羽	环	土脚羽	80%	10.4	5.2	ヘタケツノ	赤色	赤色	赤色	赤色	赤色	赤色 (中間) 土脚
48	2 8号房の健脚	-15	土脚羽	环	土脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	赤色	赤色	赤色	赤色	赤色	赤色 (中間) 土脚
48	3 8号房の健脚	12.1, 15, 21, 34, 53, 55, 56, 59, 60, 65, 69, 70, 75	土脚羽	重	口脚・体部	24.0	-	-	ヘタケツノ	灰色	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
48	4 8号房の健脚	12.1, 29, 32, 35, 59, 62, 63	土脚羽	重	口脚・体部	33.7	-	-	ヘタケツノ	灰色	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
48	5 8号房の健脚	12.1, 21, 23	土脚羽	重	口脚・体部	2.0	-	-	ヘタケツノ	灰色	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
48	6 8号房の健脚	60, 111	土脚羽	小環	30%	13.2	7.0	11.8	ヘタケツノ	灰色	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
49	7 8号房の健脚	14.1, 61, 73, 74, 80	土脚羽	重	口脚・体部	1.2	-	-	ヘタケツノ	灰色	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
49	1 9号房の健脚	1.22	土脚羽	环	土脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	灰色	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀後半
49	2 9号房の健脚	1.43	土脚羽	环	土脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	灰色	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀後半
49	3 9号房の健脚	1.41	土脚羽	环	体・足部	-	-	-	ヘタケツノ	灰色	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
49	4 9号房の健脚	1.32, 50 - 52, 57, 58, 60	土脚羽	重	口脚・体部	60%	25.0	8.0	344 ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
49	5 9号房の健脚	1.31	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
49	6 9号房の健脚	1.42	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
49	7 9号房の健脚	1.44	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
49	8 9号房の健脚	1.44	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
49	9 9号房の健脚	1.33, 1.44	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
49	10 9号房の健脚	1.42	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
49	11 9号房の健脚	1.6, 1.18	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
50	12 9号房の健脚	1.15, 1.16, 37	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
50	13 9号房の健脚	1.3, 1	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
50	14 9号房の健脚	1.2 - 6	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
50	15 9号房の健脚	1.67	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	8世紀後半
50	1 10号房の健脚	1.49	土脚羽	环	土脚羽	60%	11.0	6.0	3.8 ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
50	2 10号房の健脚	1.2	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
50	3 10号房の健脚	1.2	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
50	4 10号房の健脚	1.2	土脚羽	重	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	1 11号房の健脚	1.14, 1.10	土脚羽	环	口脚・体部	90%	11.0	4.4	3.3 ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	2 11号房の健脚	1.35	土脚羽	环	口脚羽	60%	11.0	4.4	3.3 ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	3 11号房の健脚	1.19	土脚羽	环	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	4 11号房の健脚	1.5	土脚羽	环	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	5 11号房の健脚	1.26	土脚羽	环	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	6 11号房の健脚	1.21	土脚羽	环	口脚羽	-	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	7 11号房の健脚	1.21	土脚羽	重	口脚・体部	14.0	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	8 11号房の健脚	1.21, 80, 96	土脚羽	重	口脚・体部	26.4	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	9 11号房の健脚	1.21, 80, 96	土脚羽	重	口脚・体部	26.0	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	10 11号房の健脚	1.97	土脚羽	重	口脚・体部	19.8	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	11 11号房の健脚	1.59	土脚羽	重	口脚・体部	21.6	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半
51	12 11号房の健脚	1.61	土脚羽	重	口脚・体部	23.8	-	-	ヘタケツノ	木地絨	灰色	灰色	灰色	灰色	9世紀前半



調査番号	出土地点	記号	種別	固有種	頭骨・ 骨格部	口仔・ 尾部	法尺 (cm)	輪郭・ 輪郭法 (外因)	輪郭・ 輪郭法 (内因)	色	調	筋	皮	骨	備考
54. 3	遺跡外周土塁部	R-169	土塁部	土69	土69	土69	7.2	3.0+△ △+△+△	3.0+△ △+△+△	青灰色	青灰色	△	△	△	遺跡外周土塁部
54. 4	遺跡外周土塁部	R-6	土塁部	土6	土6	土6	12.6	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	青灰色	青灰色	△	△	△	8世紀後半
54. 5	遺跡外周土塁部	R-296	土塁部	土296	土296	土296	40%	13.0	2.5	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△	△	△	10世紀前半
55. 6	遺跡外周土塁部	R-459	土塁部	土459	土459	土459	30%	13.0	4.0	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△	△	△	10世紀後半
55. 7	遺跡外周土塁部	R-279	土279	土279	土279	土279	30%	13.0	4.0	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△	△	△	10世紀後半
55. 8	遺跡外周土塁部	R-117 ~ 119	土塁部	土117 ~ 119	土117 ~ 119	土117 ~ 119		△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△	△	△	4mm以下の灰白色・青 色
55. 9	遺跡外周土塁部	R-62	土塁部	土62	土62	土62		△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△	△	△	5世紀後半
55. 10	遺跡外周土塁部	R-38, 43, 46 ~ 48, 59	土塁部	土38, 43, 46 ~ 48, 59	土38, 43, 46 ~ 48, 59	土38, 43, 46 ~ 48, 59		△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△	△	△	8世紀後半
55. 11	遺跡外周土塁部	R-2, 3	土塁部	土2, 3	土2, 3	土2, 3		△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△+△+△ △+△+△	△	△	△	9 ~ 10世紀

第4表 金属製品観察表

図番号	出土地点	注記番号	種類	材質	部位	寸法(cm)	厚さ	重量(g)	備考
56 1	1号窓穴建物	キ 1	手鍼	鉄	刃部～基部	9.58	1.8	0.57	8.6 片側端部に孔。覆土上層から出土。
56 2	2号窓穴建物	キ 1	刀子	鉄	刃部～基部	3.26/6.51	1.22/1.1	0.34/0.53	3.4/5.3 覆土上層から出土。
56 3	4号窓穴建物	キ 1	刀子	鉄	基部	5.93	1.0	0.55	5.0 覆土上層から出土。
56 4	4号窓穴建物	キ 2	手鍼	鉄	基部	9.06	1.72	0.3	8.6 片側端部に孔。覆土上層から出土。
56 5	4号窓穴建物	キ 3	刀子	鉄	基部	7.34	1.1	0.51	6.1 刃部と茎部の境目に梅の留め具？が残る。覆土中から出土。
56 6	4号窓穴建物	キ 4	刀子	鉄	基部	2.81	0.75	0.37	1.2 覆土上層から出土。
56 7	4号窓穴建物	キ 5	刀子	鉄	基部	3.93	0.80	0.33	3.1 覆土上層から出土。
56 8	6号窓穴建物	キ 1	刀子	鉄	基部	5.32	0.78	0.38	3.7 覆土上層から出土。
56 9	10号窓穴建物	キ 1	棒状製品	鉄	基部	5.43	0.51	0.50	2.4 覆土上層から出土。
56 10	道標外	表ホ 1	刀子	鉄	刃部	3.65	1.43	0.28	3.8
56 11	道標外	表ホ 2	棒状製品	鉄	刃部	2.51	0.48	0.35	0.5
56 12	道標外	表ホ 3	棒状製品	鉄	刃部	2.08	1.02	0.99	2.7
56 13	道標外	表ホ 4	針	鉄	基部	1.14	0.76	0.81	8.9
56 14	道標外	表ホ 5	鑿	鉄	刃部～基部	7.8	2.52	0.75	14.3 刃部と茎部の境目に梅の留め具？が残る。
56 15	道標外	表ホ 54	刀子	鉄	刃部～基部	7.05	1.0	0.43	4.7
56 16	道標外	表ホ 172	棒状・鉗状製品	鉄	刃部	2.03	0.81	0.50	0.3

# 第4章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 第1節 胎土分析

### はじめに

三ノ側遺跡は、御坂山地東部を流れる桂川右岸に形成された段丘上に位置する。本遺跡では、発掘調査の結果、奈良～平安時代とされる竪穴建物跡等の遺構やそれらに伴う遺物が多数確認されている。その中でも、4号竪穴建物跡からは、甕、壺及び蓋等の土師器の一括資料が出土し、器型や胎土の特徴（色調、整形、質感）等から、甲府盆地および都留郡西部（堀之内原タイプ）と静岡地域（駿東）さらには神奈川地域（相模）等の産地と推定される土師器が含まれる可能性のあることが考えられている。

本報告では、上記した4号竪穴建物跡より出土した土師器の流通や製作事情に関わる資料の作成を目的として、土師器の材質（胎土）の特性を岩石学的な手法により把握し、既存の地質情報等との比較により、検討を行った。

### 1. 試料

試料は、三ノ側遺跡4号竪穴建物跡から出土した土師器30点（No.1～30）と、同住居跡で確認されたカマドの構築材2点（No.31, 32）の計32点である。このうち、土師器試料については、担当者による観察により、分析に供された試料の特徴や推定産地が記されている（表5）。カマド構築材については、分析前の観察により、以下の特徴が把握された。No.31は、にぶい黄橙色を呈する粘土質シルトの基質中に、径1.5～8.0mm程の粒径の淘汰の不良な灰白色を呈する角礫～亜角礫状のシルト塊（風化岩片か）が多量に含まれる。No.32は、灰黄色を呈するシルト質粘土の塊であり、径8.0mm程の灰白色を呈する斑状部分が認められるが、No.31の灰白色シルト塊ほど明瞭ではない。

第5表 試料一覧および胎土分類結果

試料 No.	周囲 No.	土器区分	断面	残存率	特徴・備考	产地想	胎土分類			
							粘物	岩石	粒状組成	碎屑物質
1	2	土師器	环	40%	盤状环	甲府盆地	F	V	1	
2	11	土師器	环	30%	真円环	甲府盆地	F	V	1	
3	9	土師器	环	体部破片	内面放射状暗文	甲府盆地	F	V	1	
4	14	土師器	瓶	つまみ部破片		甲府盆地	G	B	2	
5	16	土師器	瓶	口縁・体部破片	球軸彫。胎土が細密。	静岡（駿東型）	D	B	2	
6	34	土師器	瓶	口縁・体部破片		神奈川（相模型）?	C	B	2	
7	27	土師器	瓶	口縁・体部破片	花開内系の胎土。	甲府盆地	E	B	3	
8	30	土師器	瓶	口縁・体部破片	球軸彫。胎土が細密。	静岡（駿東型）	D	B	2	
9	43	土師器	瓶	口縁・体部破片	胎土に赤褐色の砂を多く含む。	都留郡西部（堀之内原タイプ）	C	B	1	
10	35	土師器	瓶	口縁・体部破片	体部外側へへたり。	都留郡西部（堀之内原タイプ）	C	B	2	
11	40	土師器	瓶	口縁・体部破片		神奈川（相模型）?	C	B	2	
12	56	土師器	瓶	口縁・体部破片		神奈川（相模型）?	C	B	1	
13	33	土師器	瓶	口縁・体部破片	胎土に明赤褐色の砂を含む。	?	C	B	2	
14	38	土師器	瓶	口縁部破片		?	C	B	3	
15	51	土師器	瓶	口縁部破片	口縁部凹凸	?	C	B	2	
16	54	土師器	瓶	口縁・体部破片	胎土に赤褐色の砂を含む。	都留郡西部（堀之内原タイプ）	C	B	2	
17	25	土師器	瓶	口縁部破片		神奈川（相模型）?	C	B	2	
18	58	土師器	瓶	口縁部破片	取りの深いハケメ。胎土に明褐色・黒色の砂を含む。	神奈川（相模型）?	C	B	2	
19	39	土師器	瓶	口縁・体部破片	胎土に赤褐色の砂を含む。	都留郡西部（堀之内原タイプ）	C	B	2	
20	29	土師器	瓶	口縁部破片		神奈川（相模型）?	C	B	2	
21	63	土師器	瓶	頭・体部破片	胎土に赤褐色の砂を多く含む。	都留郡西部（堀之内原タイプ）	C	B	2	
22	73	土師器	瓶	体部破片	体部外側みがき。	静岡（駿東型）	B	B	2	
23	77	土師器	瓶	体部破片	胎土に赤褐色の砂を多く含む。	都留郡西部（堀之内原タイプ）	C	B	2	
24	18	土師器	瓶	口縁・体部破片		神奈川（相模型）?	C	B	3	
25	19	土師器	瓶	50%	花開内系の胎土。	甲府盆地	E	B	3	
26	31	土師器	瓶	口縁・体部破片	胎土に暗赤褐色の砂礫を含む。	都留郡西部（堀之内原タイプ）	C	B	2	
27	17	土師器	瓶	口縁部破片	胎土に石片？	静岡（駿東型）	D	B	3	
28	22	土師器	瓶	口縁部破片	胎土が細密。	静岡（駿東型）	D	B	3	
29	57	土師器	瓶	口縁部破片	胎土に白色粗砂（長石）	?	A	B	2	
30	66	土師器	瓶	口縁部破片	胎土に赤褐色の砂礫を含む。外側みがき。	静岡（駿東型）?	A	B	2	
31	カマド構築材				白色粘土・粘物	二ノ側遺跡周辺	A	B	2	
32	カマド構築材				白色粘土	二ノ側遺跡周辺	H	I	3	

## 2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩石片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や切片による薄片作製等が主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいこと等の利点があり、その中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量や、その粒径組成、砂を構成する鉱物片、岩石片および微化石の種類等も捉えることが可能であり、得られる情報が多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレバラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

## 3. 結果

薄片観察結果を図57～65に示す。以下に、鉱物片および岩石片の種類構成、砂分全体の粒径組成、碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合の順に述べる。なお、以下に述べる胎土分類結果は、試料一覧を示した表5にも併記した。

### （1）鉱物片および岩石片の種類構成

ほとんどの試料において鉱物片では、石英および斜長石が多く、この他にカリ長石、カンラン石、斜方輝石、單斜輝石、角閃石、綠簾石、黒雲母、不透明鉱物の各鉱物片が試料によっては認められる。ただし、石英と斜長石以外の鉱物片は、いずれも微量であり、その出現によって胎土の特徴とすることのできるほどの産状ではない。

一方、岩石片では、試料によって多く含まれる種類が異なり、また共伴する岩石片の種類も異なっている。したがって、今回の試料は、岩石片の産状により、胎土の分類をすることが可能である。ここでは以下に示すA類からH類までの8分類を設定した。

#### 1) A類

玄武岩と変質岩を多く含み、他に微量または少量のスコリア、凝灰岩、安山岩等を伴う。変質岩の多くはスコリアや凝灰岩および火山岩類を原岩としている。この組成は、観察所見でも指摘されているようにおそらく三ノ側遺跡周辺の土に由来すると考えられるカマド構築材（No.31）に認められたことから、在地性の最も高い組成としてA類としたものである。なお、No.31の観察記載で述べた灰白色のシルト塊は、顕微鏡観察において変質岩と同定したものに相当する。今回の試料では、No.31以外にも土師器裏2点（No.29,30）がA類に分類される。

#### 2) B類

安山岩と変質岩を多く含み、少量の玄武岩を伴う。他に微量の流紋岩・ディサイトや花崗岩類等の岩石片も含まれる。変質岩は火山岩類を原岩としている。A類に類似する組成であることからB類とした。これに分類される試料は、土師器裏1点（No.22）のみである。

### 3) C類

凝灰岩と変質岩を多く含み、少量の珪化岩を伴う。試料によっては、スコリア、流紋岩・ディサイト、安山岩、玄武岩の火山岩類や花崗岩類等も微量または少量含まれる。凝灰岩は弱く珪化しているものが多く、また変質岩および珪化岩は、凝灰岩を原岩とするとみられる。今回の試料では、全試料の半数を超える 17 点もの試料が、この組成に分類されたことから、B 類に次いで在地性の高いことが示唆される組成として C 類とした。C 類に分類された試料は、土師器甕のみ 17 点 (No. 6, 9 ~ 21, 23, 24, 26) からなる。

### 4) D類

流紋岩・ディサイトを多く含み、少量の多結晶石英と花崗閃緑斑岩または珪長岩を伴う。流紋岩・ディサイトの岩相は花崗閃緑斑岩および珪長岩に近い。C 類以外の分類の中では、最も試料数が多いことから D 類とした。これに分類される試料は、土師器甕 4 点 (No. 5, 8, 27, 28) である。なお、No. 28 は、流紋岩・ディサイトは多結晶石英よりも少量であるが、花崗閃緑斑岩に近い岩相を示す珪長岩を伴うことと、他に上述および後述の分類の特徴となる岩石片が流紋岩・ディサイトよりも多くはないことから、D 類に分類している。

### 5) E類

花崗岩類が多く、少量の多結晶石英を伴う。これら以外の岩石片は含まれない。また、鉱物片では石英と斜長石が多く、カリ長石は少量であり、さらに少量の角閃石と微量の黒雲母が含まれる。後述するように今回の試料では、岩石片が特徴となる分類は本分類までであることから、D 類の次の E 類とした。今回の試料では、土師器甕 2 点 (No. 7, 25) が E 類に相当する。

### 6) F類

胎土における砂粒の全体量自体が少量であり、岩石片は含まれていない。砂粒の主体は、石英または斜長石の鉱物片であり、少量のカリ長石と微量の角閃石を伴う。これに分類される試料は、土師器甕 3 点 (No. 1 ~ 3) である。

### 7) G類

F 類と同様に砂粒の少ない胎土であり、砂粒の主体は石英と斜長石の鉱物片である。極めて微量のチャートおよび花崗岩類の岩石片が認められたことから、F 類とは区別して G 類とした。これに分類される試料は、土師器甕 1 点 (No. 4) のみである。

### 8) H類

No. 32 のカマド構築材の組成をここでは、H 類とした。No. 32 は、顕微鏡下の観察により、粘土化の進んだ火山礫凝灰岩とみられ、岩石を構成している岩片の粒界は非常に不明瞭となっている。変質岩は、ディサイト、安山岩、玄武岩等の火山岩類が原岩であると見られる。

### (2) 砂分全体の粒径組成

各試料のモードを示す粒径をみると、試料によって様々な粒径がモードとなっており、細粒側に偏った組成や粗粒側に偏った組成等も認められる。このような傾向をより明確に捉える目的で、細粒砂より粗粒側の粒径（細礫、極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂）と細粒側の粒径（極細粒砂、粗粒シルト、中粒シルト）に分けて、それぞれの割合を軸として散布図（図 64）に示した。

散布図では、右下の領域ほど細粒傾向が強く、左上の領域ほど粗粒傾向が強いことを示している。最も粗粒傾向が強い試料は、粗粒砂径以上の砂と細礫からなるカマド構築材 (No. 32) であり、下記の 4 点の試料以外の土師器甕試料とカマド構築材 (No. 31) も粗粒傾向の強い左上の領域に分布している。この土師器甕試料の多くが分布する領域からやや右下に離れた位置、すなわちや細粒傾向の強い領域には土師器甕 3 点 (No. 5, 8, 27) が分布し、これらに近い位置には土師器蓋 (No. 4) も位置している。さらに右下には土師器甕 (No. 28) が分布しており、土師器甕 3 点 (No. 1 ~ 3) は、いずれも細粒傾向の最も強い右下隅の領域に分布している。

このような散布図における分布状況から、粒径組成では、最も粗粒傾向の強い No. 32 を I 類とし、多くの土師

器甕試料が分布する領域内の試料をⅡ類、その右下に分布する3点の土師器甕と1点の土師器蓋の試料をⅢ類、それよりも細粒傾向の強いNo.28の土師器甕をⅣ類、最も細粒傾向の強い土師器坏の試料3点をⅤ類とする。

### 3) 碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合

多くの試料は、碎屑物の割合が10～15%の範囲にあるが、10%未満の試料や15%を超える試料も少數認められた（図65）。ここでは、碎屑物の割合が10%未満のものを1類、10%以上15%未満のものを2類、15%以上のものを3類とした。碎屑物の少ない1類には、土師器坏の試料3点（No.1～3）が分類されるが、土師器甕のNo.9とNo.12も1類に分類される。一方碎屑物の多い3類には、土師器甕6点（No.7、14、24、25、27、28）とカマド構築材（No.32）が分類される。土師器蓋（No.4）と上記した1類と3類の土師器甕試料を除く土師器甕試料およびカマド構築材（No.31）は、いずれも2類に分類される。

## 4. 考察

### （1）土器胎土の地域性

今回の分析では、それぞれ特徴となる岩石片の組成が得られたことから、岩石片の産状からA類からE類までの8種類の胎土に分類した。土器胎土中の岩石片の組成は、土器の材料となった粘土や砂の採取地の地質学的背景を反映していると考えられる。このことから、胎土中の岩石片の組成により、材料採取地すなわち土器の製作地域を検討してみたい。

#### 1) A類

A類はカマド構築材に認められた組成であることから、観察所見でも推定されているように三ノ側遺跡周辺の土の岩石片組成を示している可能性がある。三ノ側遺跡の位置する都留市周辺の地質を尾崎ほか（2002）等により概観すると、遺跡の位置する段丘の基盤は、後期更新世～完新世にかけて富士山から噴出した玄武岩溶岩であり、桂川流域の山地は、新第三紀中期中新世の火碎岩類からなる西八代層群（丹沢層群）により構成されている。カマド構築材（No.31）の岩石片組成において、スコリアと玄武岩およびその風化変質岩を主体とすることは、段丘構成層に由来する碎屑物が多く含まれていることを示唆しており、少量の凝灰岩や安山岩および微量の流紋岩・デイサイトを伴っていることは、西八代層群に由来する碎屑物が混在していることを示していると考えられる。なお、H類としたカマド構築材（No.32）を構成する火山疊凝灰岩も西八代層群に由来すると考えられる。

A類に分類した土師器甕（No.29、30）は、ともに都留市周辺で作製された可能性がある。ただし、No.30については、静岡（駿東型）の可能性があるという所見が示されている。ここで、駿東地域として例えば沼津市や三島市周辺の地質を杉山ほか（2010）等でみると、その地質学的背景の主体は、富士火山、愛鷹火山および箱根火山のそれぞれの噴出物となる。富士火山の噴出物は上述したように玄武岩質であり、愛鷹火山は玄武岩～安山岩質、箱根火山は安山岩～デイサイト質である。また、箱根火山の噴出物には火碎岩からなる噴出物も比較的広く分布している。No.30の岩石片組成では、玄武岩と変質岩の他に安山岩と凝灰岩とスコリアおよび軽石が検出されている。これらのうち、安山岩や凝灰岩および軽石は箱根火山の噴出物に由来すると考えることも可能であり、中でも軽石はNo.31のカマド構築材では認められていない。したがって、現時点では、No.30の土師器甕について、胎土分類はA類ではあるが、その産地としては、都留市周辺と沼津・三島市周辺の両者の可能性があるとする。今後、当該地域出土土器の分析事例を得て比較する等の検討が必要であると考えられる。なお産地不明との所見のあるNo.29については、安山岩も軽石も検出されなかったこと、および極めて微量検出された泥岩は沼津・三島市周辺には分布しないこと等から、現時点では沼津・三島市周辺の産地の可能性は低いと考えられる。

#### 2) B類

B類は、安山岩の多いことを特徴とする。安山岩の顕微鏡下の特徴では、新鮮なものと風化したものとが混在することから、その由来を第四紀の火山噴出物とするか新第三紀の堆積層とするか、あるいは两者混在するかは

特定できない。カマド構築材（No.31）の安山岩と同様に新第三紀の堆積層に由来する考えれば、B類の胎土が示す地域性も都留市周辺とccessできる。安山岩が玄武岩より多いという組成については、例えば山地斜面に近接した場所の碎屑物等を想定すれば、山地の地質すなわち新第三紀の堆積物に由来する碎屑物がより多く含まれているという組成を考えることができる。一方、安山岩の由来を第四紀の火山噴出物とした場合、富士山の噴出物はほとんど玄武岩質であることから、都留市周辺の地質では安山岩の由来を求めるることはできない。ここでB類に分類した土師器表（No.22）には、No.30と同様に静岡（駿東型）という所見が示されている。上述した沼津・三島市周辺の地質学的背景を考慮すれば、安山岩の多い岩石片組成は、その所見には整合すると言えることができる。特にNo.22の岩石片組成には軽石も検出されている。しかし、その一方でNo.22には沼津・三島市周辺には分布しない花崗岩類の岩石片も微量ではあるが検出されている。花崗岩類の岩石片の由来については、下記のC類で述べるが、その場合には、さらにC類から推定される産地の可能性もあることになる。いずれにしても、現時点でのB類の地域性については、都留市周辺、沼津・三島市周辺およびC類の地域の3通りの可能性が並立するとしておきたい。

#### 3) C類

C類は、凝灰岩と変質岩および珪化岩を特徴とする胎土である。凝灰岩は弱く珪化したものが多く認められることから新第三紀の堆積層を構成する凝灰岩である可能性が高い。さらに、C類とした組成の中で共伴する岩石の種類をみると、スコリアや玄武岩が含まれていることが多い。スコリアや玄武岩は富士山の噴出物に由来すると考えられ、新第三紀の凝灰岩は上述したように桂川流域の山地に西八代層群として広く分布している。したがって、C類の地域性としては、まず桂川流域であると考えることができる。次にスコリアや玄武岩以外にもC類には共伴する岩石片が認められるが、その中で注目されるのは花崗岩類およびホルンフェルスである（例えばNo.18等）。花崗岩類の分布は、至近では、いずれも新第三紀中新世に貫入した甲府盆地南東部の芦川深成岩体や東部の和徳深成岩体があげられる。そしてこれらの深成岩体の周囲にはホルンフェルスが産出している。桂川水系をみると、これらの深成岩体の碎屑物が河川堆積物中に混在する可能性があるのは笛子川や真木川である。したがって、C類の地域性をさらにはじめると、桂川流域でも笛子川や真木川の合流する大月市付近より下流側の地域であることが推定される。また、その付近になると都留市付近に比べて富士山に由来する碎屑物の量比は当然下がっていると考えられるから、A類に比べるとスコリアや玄武岩の割合が低いC類の組成とも整合する。

なお、C類に分類した試料には、産地の所見として神奈川（相模型）の可能性があるとされたものと、都留郡西部（堀之内原タイプ）とされたものの両者が含まれている。上述したC類の地域性を考慮すれば、今回の分析結果は、神奈川（相模型）とした所見を支持しているといえる。その場合、C類の地域は、桂川が相模川となる流域まで含まれる可能性がある。凝灰岩の由来する地質は西八代層群という名前よりも丹沢層群とした方がよい。一方の都留郡西部とされた所見については、現時点ではまだ否定するものではないが、胎土分析の結果との整合性はよくない。都留郡西部というならば、おそらく今回の分析におけるA類のような胎土になることが考えられる。

#### 4) D類

D類は、流紋岩・デイサイトとそれに伴う花崗閃緑斑岩または珪長岩を特徴とする。流紋岩・デイサイトは、桂川流域の山地に分布する西八代層群中にも含まれているが、A類からC類までの説明にあるように、桂川流域の堆積物であれば、玄武岩や凝灰岩が混在する可能性が高いが、D類に分類した組成にはそれらは検出されていない。また、花崗閃緑斑岩や珪長岩は岩脈として産出することが多いが、それらの岩脈の顕著な分布も桂川流域の山地には認められていない。したがって、D類の地域性としては、少なくとも桂川流域外である可能性が高いと考えられる。この時点では、D類に分類した4点（No.5、8、27、28）がいずれも桂川流域外の地域である静岡（駿東型）という所見が付されていることとは整合する。

なお、D類の地域性を考える場合、まず流紋岩・デイサイト質の溶岩や火碎岩が広く分布しているような地域

を想定し、さらに堆積岩類や花崗岩類が混在しないような水系の地域も考えなければならない。そして岩脈の分布である。上述した尾崎ほか（2002）や杉山ほか（2010）では、そのような地域を御坂山地から甲府盆地および相模川流域や沼津・三島市周辺まで広げた範囲の中には見出すことはできない。すなわち、D類の胎土は「駿東」という地域性までは示してはいない。そこで、さらに範囲を広げると、静岡平野の北側に分布する賤機山や安倍川下流の右岸側の沖積低地の縁辺に分布する山地を構成する地質に、竜爪層群と呼ばれるデイサイト溶岩および火碎岩からなる地質が認められる。現時点で、D類の地域性をここまで広げることはできないが、今後の検討対象地域としては考慮する必要がある。

#### 5) E類

E類は花崗岩類を特徴とする胎土である。花崗岩類の岩種としては、共伴する鉱物片の組成においてカリ長石が少ないと角閃石が多い傾向が窺えることから、角閃石黒雲母花崗閃緑岩～石英閃緑岩が推定される。このような岩石の分布は、甲府盆地南東縁の御坂山地に貫入する芦川深成岩体に見ることができる。E類に分類した2点（No.7, 25）には、ともに甲府盆地が推定産地であるという所見が付されていることから、分析結果は、この所見を支持している。

なお、河西（1989）は、甲府盆地各地の河川堆積物の岩石鉱物組成を調べ、その組成の違いから、新第三系分布地域、釜無川地域、荒川地域、笛吹川地域に大別している。これらのうち、笛吹川地域は花崗岩類の卓越を特徴とすると述べられている。笛吹川地域の背後には上述した芦川深成岩体が分布しており、本分析のE類は、甲府盆地の中でも笛吹川地域の堆積物に由来する可能性がある。

#### 6) F類およびG類

F類およびG類については、地質の指標となる岩石片が殆ど含まれていないため、具体的な地域性の検討には至らない。産地の所見では、F類に分類した3点（No.1～3）とG類に分類した1点（No.4）について、いずれも甲府盆地とされている。胎土分析結果からも甲府盆地の地域性が推定されたE類の鉱物片組成と比べると共通して角閃石が含まれているという特徴が指摘できる。上述したように角閃石は甲府盆地南東部に分布する芦川深成岩体の岩石に由来すると考えられるから、F類およびG類の地域性を甲府盆地と想定したい。

#### （2）土器胎土と器種

今回の分析に供された土器器の器種と胎土との関係では、岩石組成でみると、环はF類、蓋はG類であり甕はそれ以外という対応関係が認められた。この特徴は、胎土中の砂の粒径組成に、より明瞭な形で表されており、环は細粒傾向の非常に強いV類、蓋はやや細粒傾向の強いIII類、甕の多くは粗粒傾向の強いII類となっている（図65）。おそらく、器種の用途や形状、大きさ等に合わせて、素地土の調整等の製作事情が異なっていたことが窺える。

また、土器器では、少数の細粒傾向を示す試料が4点（No.5, 8, 27, 28）認められた。粒径組成分類ではIII類およびIV類とした試料である。これらの試料の岩石片組成はいずれもD類であり、また、産地の所見はいずれも静岡（駿東）とされている。前述したようにD類の地域性は桂川流域外である可能性が高いとしたが、この粒径組成の違いはその所見を支持する傾向といえる。

### 5.まとめ

三ノ側遺跡の4号竪穴建物跡から出土した土器器試料及びカマド構築材の胎土分析（薄片作製観察）結果から得られた成果と課題は、以下の通りである。

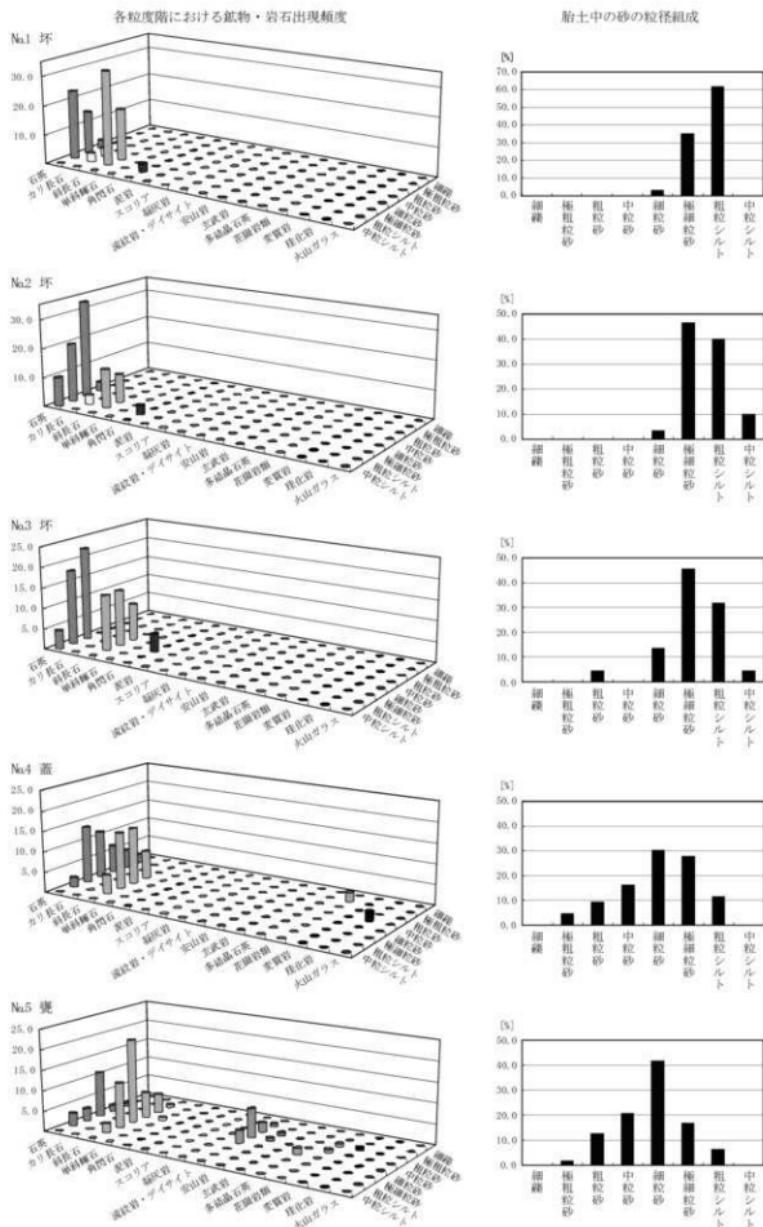
（1）岩石片組成から、A類からH類までの8種類の胎土が分類された。既知の地質情報との比較により、A類は在地または駿東地域、B類は在地または駿東地域または大月市付近より下流の桂川流域のいずれか、C類は大月市付近より下流の桂川流域、D類は桂川流域外であるが、具体的な地域は特定できず、E類・F類・G類は甲府盆地、特にE類は笛吹川流域、H類は在地という地域性が推定された。

(2) 器種間では、岩石組成および粒径組成において比較的明瞭な違いが認められた。さらに上述した岩石組成による胎土の違いからは、环と蓋は甲府盆地、甕は複数の地域に由来する資料が混在している可能性が高い。

(3) さらに胎土分析による具体的な地域性を検討するため、遺跡出土土師器の調査分析とともに、桂川流域や甲府盆地、相模川流域、さらには沼津・三島地域等の各地の自然堆積物の分析データの蓄積および比較検討も必要と考える。

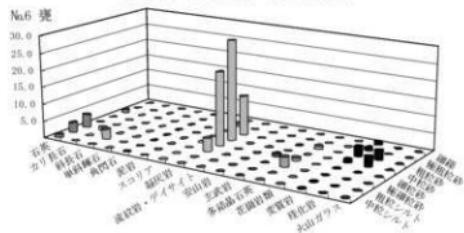
#### 引用文献

- 河西 学, 1989, 甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成－土器胎土分析のための基礎データ, 山梨考古学論集Ⅱ, 505-523.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－, 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
- 尾崎正紀・牧本 博・杉山雄一・三村弘二・酒井 彰・久保和也・加藤碩一・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久, 2002, 20万分の1地質図幅「甲府」, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 杉山雄一・水野清秀・狩野謙一・村松 武・松田時彦・石塚 治・及川輝樹・高田 亮・荒井晃作・岡村行信・実松健造・高橋正明・尾山洋一・駒澤正夫, 2010, 20万分の1地質図幅「静岡及び御前崎(第2版)」, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

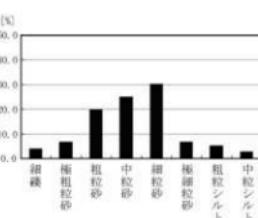
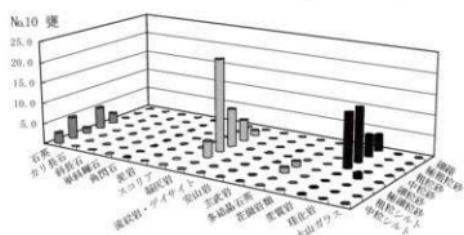
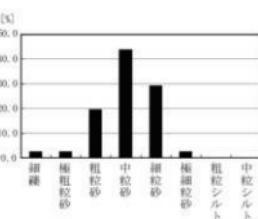
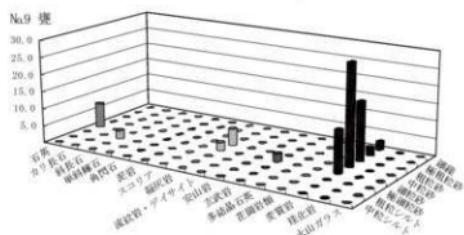
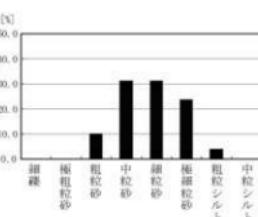
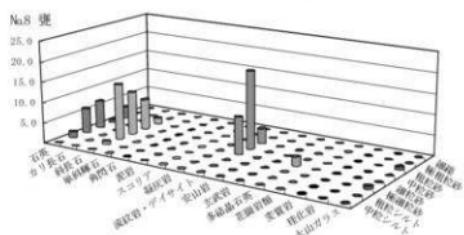
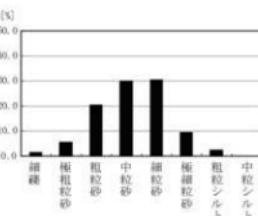
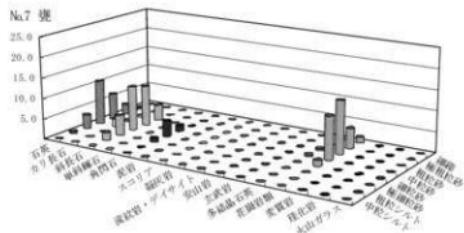
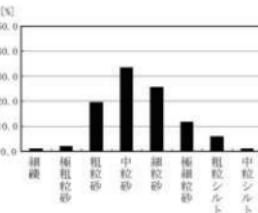


第57図 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その1)

各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

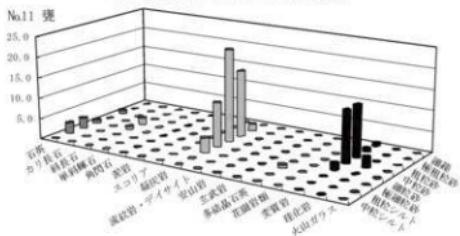


胎土中の砂の粒径組成

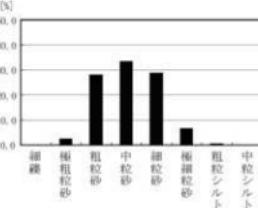
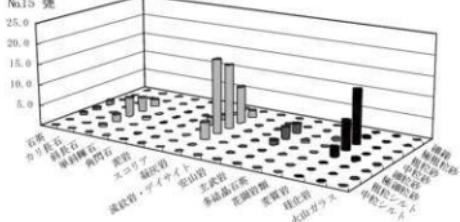
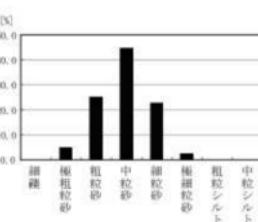
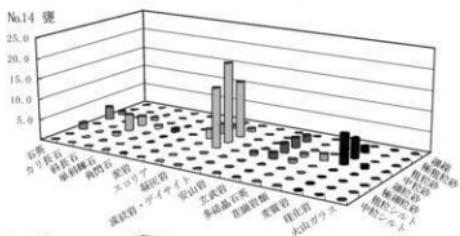
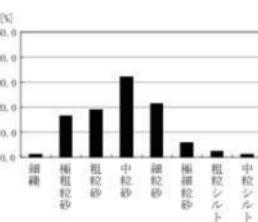
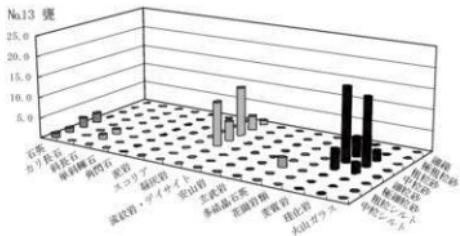
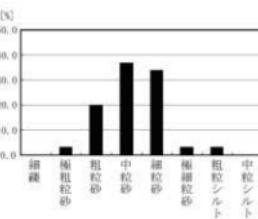
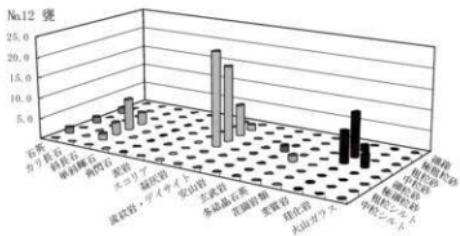
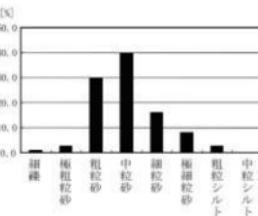


第58図 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その2)

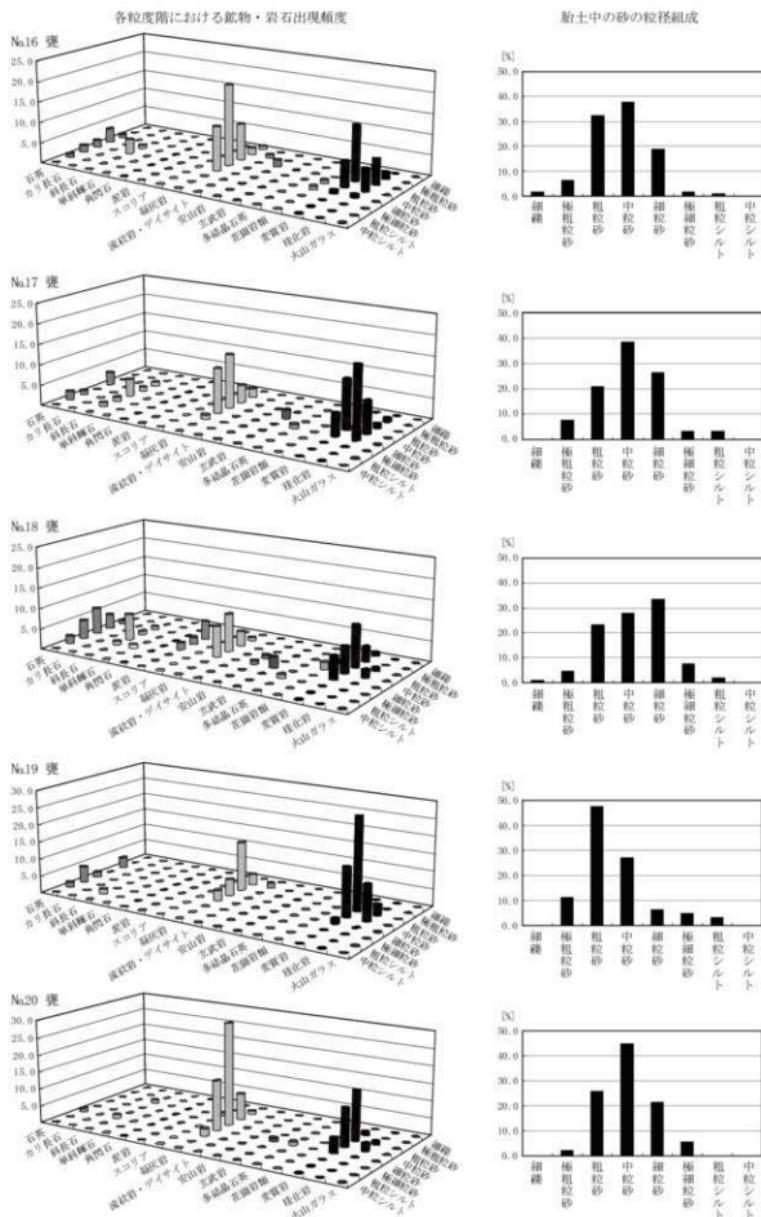
各粒度階における鉱物・岩石出現頻度



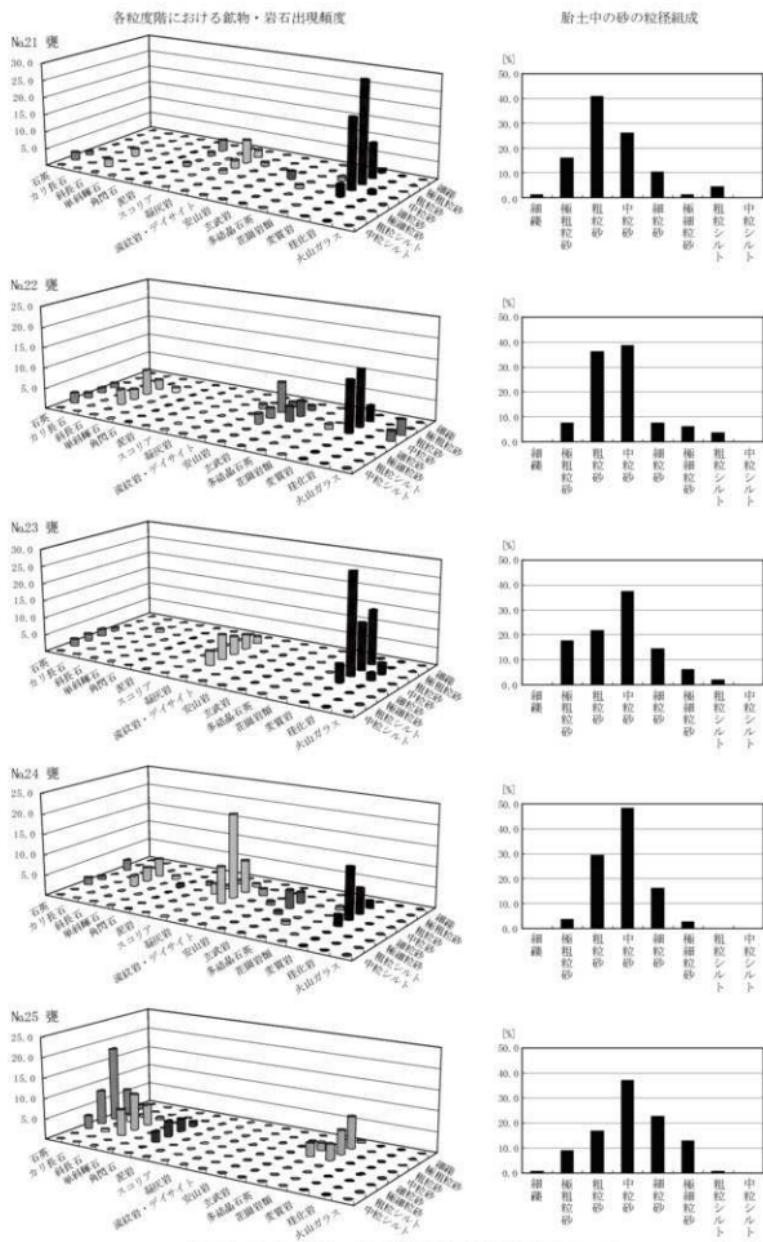
胎土中の砂の粒径組成



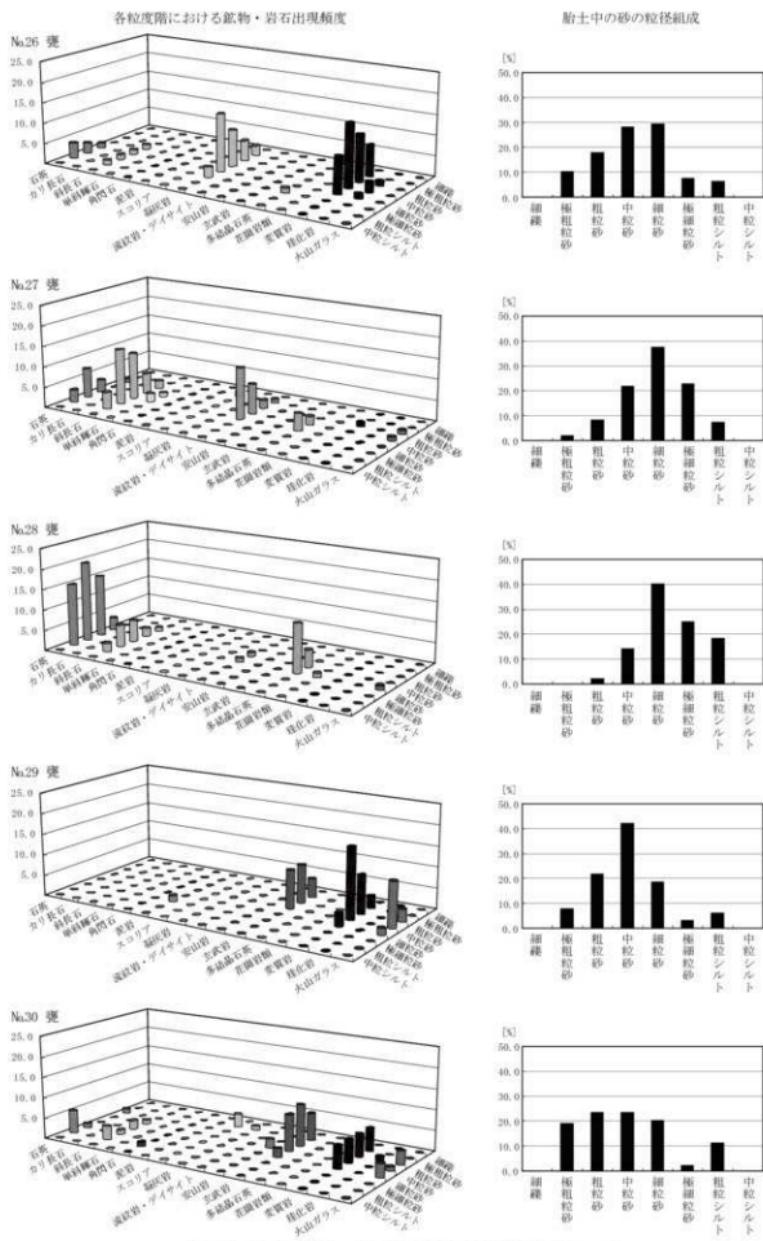
第59図 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その3)



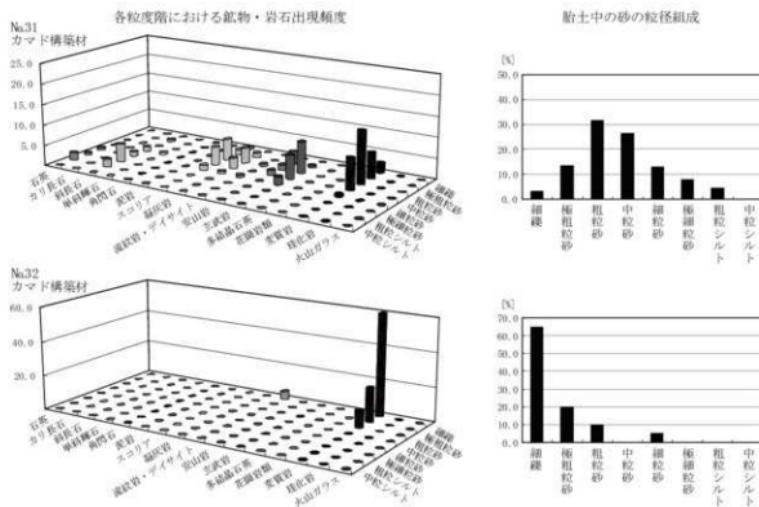
第60図 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その4)



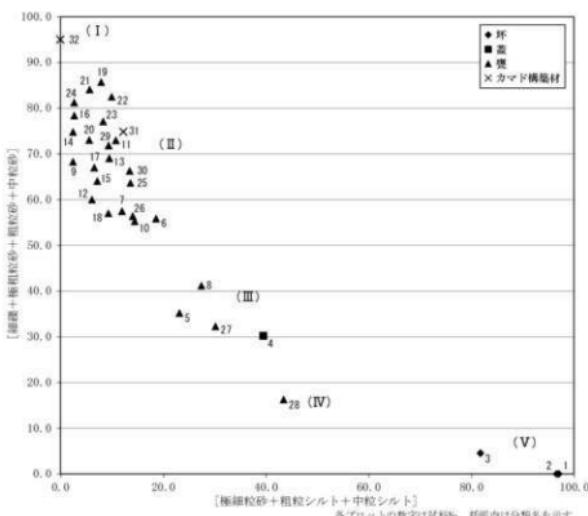
第61図 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その5)



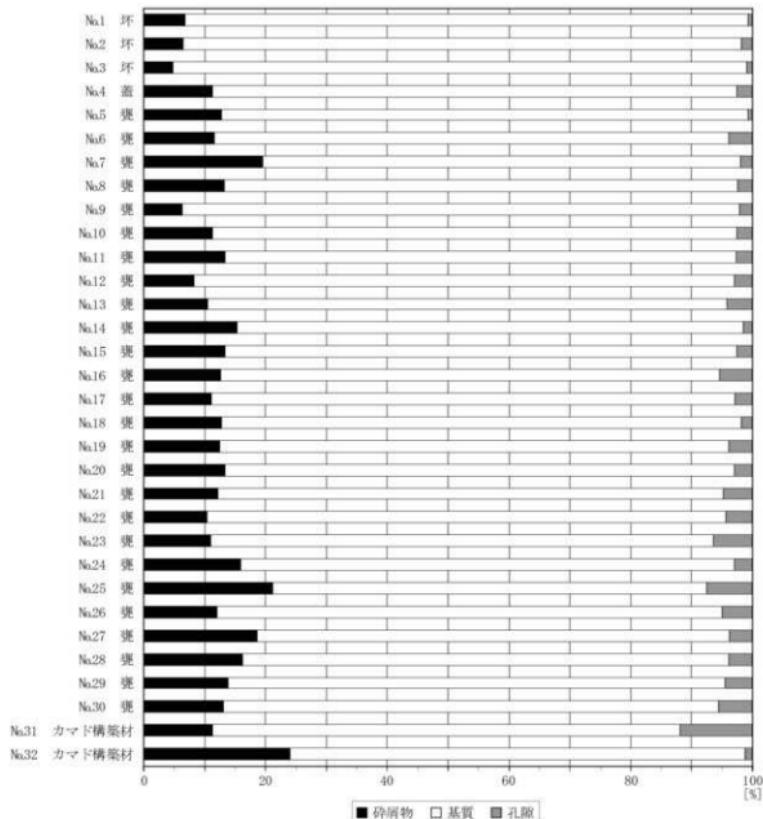
第62図 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その6)



第63図 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その7)

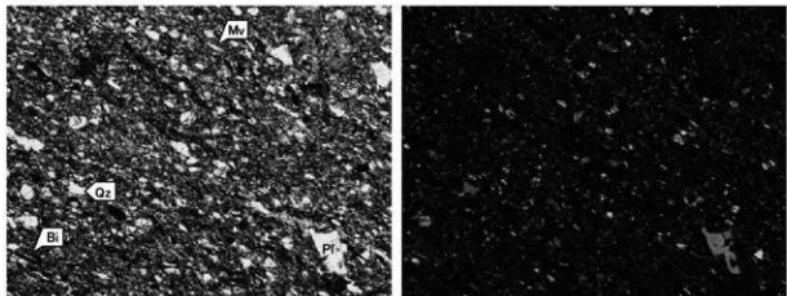


第64図 胎土中の砂の粒径組成散布図

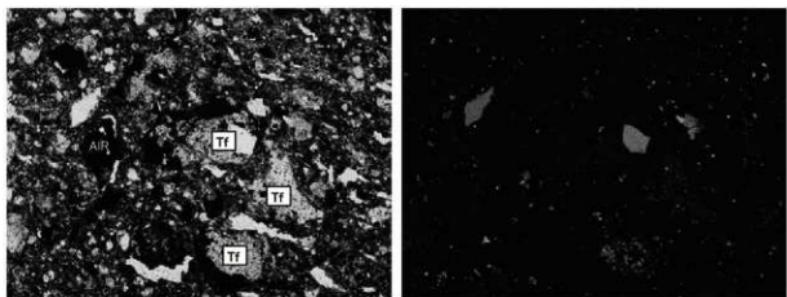


第65図 碎屑物・基質・孔隙の割合

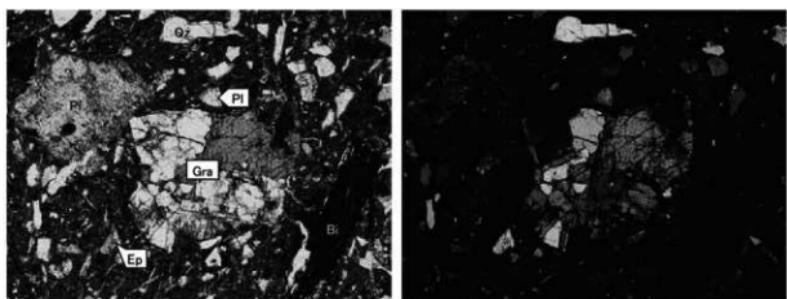
図版1 胎土薄片(1)



1. No.2(実測図No.11 土師器 壺 高台壺)



2. No.6(実測図No.34 土師器 壺 口縁・体部破片)



3. No.7(実測図No.27 土師器 壺 口縁・体部破片)

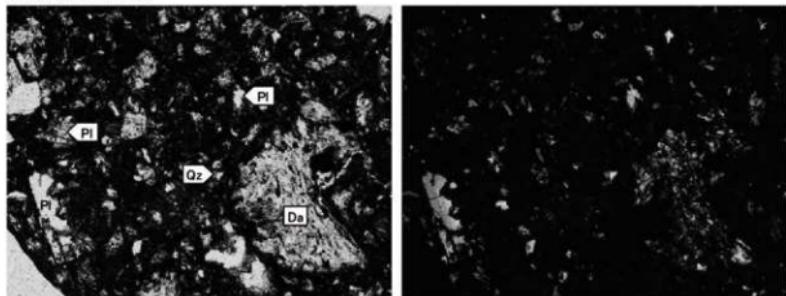
0.5mm

Qz:石英, Pl:斜長石, Ep:緑レン石, Mv:白雲母, Bi:黒雲母, Tf:凝灰岩, Grs:花崗岩,

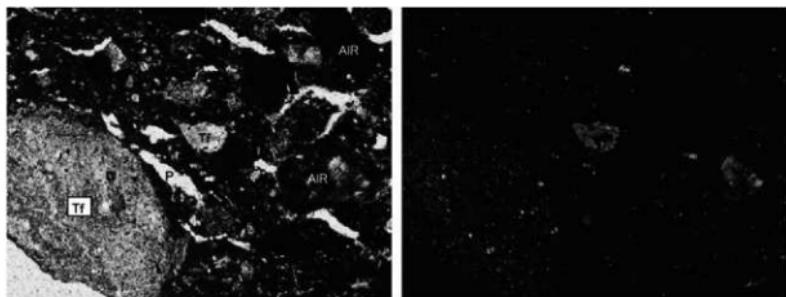
AIR:変質岩。

写真左列は下方ポーラー、右列は直交ポーラー下。

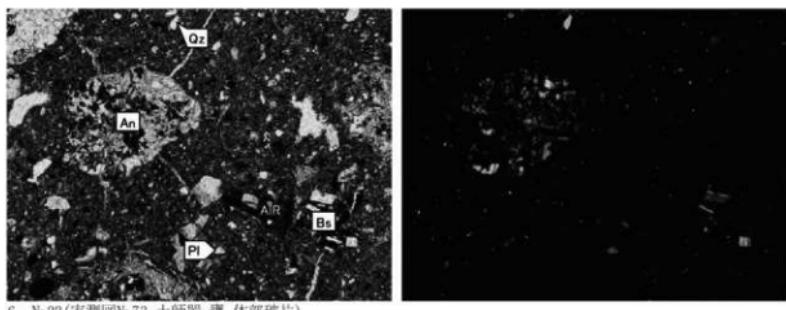
図版2 胎土薄片(2)



4. No8(実測図No.30 土師器 頸 口縁部破片)



5. No.15(実測図No.51 土師器 頸 口縁部破片)

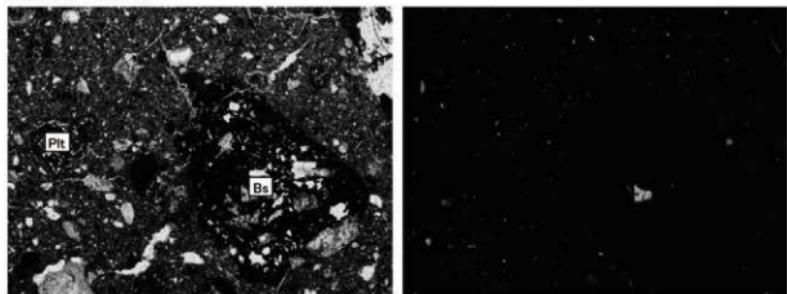


6. No.22(実測図No.73 土師器 頸 体部破片)

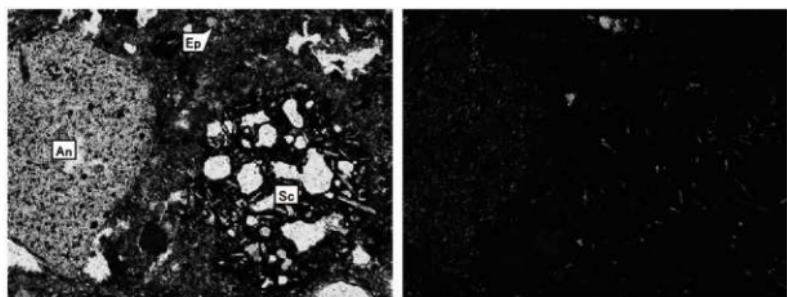
0.5mm

Qz:石英, Pl:斜長石, Tf:凝灰岩, Da:デイサイト, An:安山岩, Bs:玄武岩, AIR:変質岩,  
P:孔隙。  
写真左列は下方ポーラー、右列は直交ポーラー下。

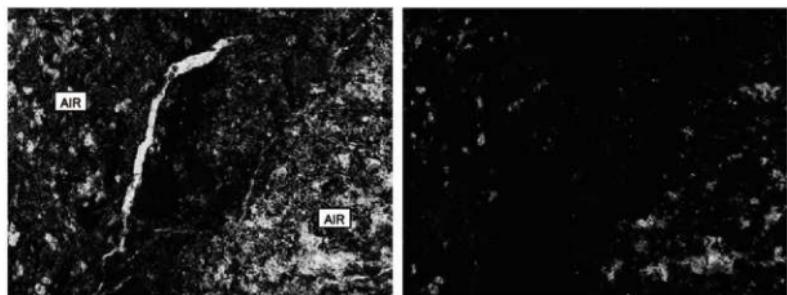
図版3 胎土薄片(3)



7. No.30(実測図No.66 土師器 壺 頭部破片)



8. No.31(カマド構築材)



9. No.32(カマド構築材)

0.5mm

Ep:緑レン石, Op:不透明鉱物, Sc:スコリア, An:安山岩, Bs:玄武岩, AIR:変質岩,  
Plt:植物片, Mtx:基質.  
写真左列は下方ポーラー, 右列は直交ポーラー下.

## 第2節 放射性炭素年代測定・樹種同定・土壤理化分析

### はじめに

三ノ側遺跡（都留市上谷5丁目地内）は、桂川右岸の河岸段丘上に位置する。本遺跡の発掘調査では、奈良～平安時代（8世紀前半～9世紀前半）の竪穴建物跡をはじめとして、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構などが確認されている。

本報告では、遺構の年代、竪穴建物跡のカマドの燃料材と考えられる炭化材の樹種および木材利用、さらに土坑墓の可能性がある土坑の性格の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

### I. 放射性炭素年代測定

#### 1. 試料

試料は、5号土坑の上部壁面付近から出土した炭化材2点（5号土坑 炭1, 炭2）である。5号土坑は、平面が円形を呈し、直径が約1.2m、深さが約0.55mを測る。当遺構からは、遺物は出土していないが、埋積物（覆土）の特徴から、奈良～平安時代の遺構と推定されている。

測定に供された炭化材2点は、いずれも板状を呈する長さ約2cm、幅約1～1.5cm程度、厚さ0.5cm前後の破片である。なお、本分析では、試料の履歴（樹種）に関する情報を得るために、それぞれ測定試料の一部を採取し、樹種同定を行った。樹種同定結果は、後述するII.に示す。

#### 2. 分析方法

試料に土壤や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀浴（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空中にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いて<sup>13</sup>Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を校正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ （ $\sigma$ は統計的に真の値が68%、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対

的に示したものである。

第6表 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	測定機関 Code No.
				$\sigma$	cal AD 691	—	cal AD 750	0.788			
5号土坑 炭1 炭化材 (ヤマグワ近似種)	1250 ± 20	-19.24 ± 0.41	1247 ± 23	cal AD 763	—	cal AD 779	0.212	IAAA-112761	IAAA-112761	IAAA-112761	
				cal AD 682	—	cal AD 784	0.812				
				2σ	cal AD 786	—	cal AD 827	0.130			
				cal AD 839	—	cal AD 864	0.058				
5号土坑 炭2 炭化材 (ヤマグワ近似種)	1230 ± 20	-21.84 ± 0.38	1232 ± 23	cal AD 713	—	cal AD 745	0.352	IAAA-112762	IAAA-112762	IAAA-112762	
				cal AD 767	—	cal AD 783	0.201				
				cal AD 788	—	cal AD 819	0.314				
				cal AD 842	—	cal AD 859	0.133				
2σ				cal AD 691	—	cal AD 750	0.349				
				cal AD 763	—	cal AD 877	0.651				

### 3. 結果および考察

5号土坑から出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、炭1が1,250 ± 20yrBP、炭2が1,230 ± 20yrBPを示す。較正暦年代（測定誤差 $\sigma$ ）は、炭1がcalAD 691-calAD 779、炭2がcalAD 713-calAD 859である（表6）。

上記した5号土坑出土炭化材の較正暦年代を参考とすると、炭1が7世紀末～8世紀後半、炭2が8世紀前半～9世紀中頃に相当する。調査所見によれば、土坑の年代は奈良～平安時代と推定されており、今回の結果は概ね整合する値と言える。また、炭化材は、後述するように2点ともにヤマグワ近似種であった。2試料は、測定結果、出土状況および確認された樹種などから同一の個体に由来する可能性もあるが、接合関係および形状観察からは特定には至らなかった。

## II. 樹種同定

### 1. 試料

試料は、奈良時代（8世紀前半）と考えられる4号建物跡から出土した炭化材1点（炭1）、平安時代（9世紀前半）と考えられる8号建物跡から出土した炭化材1点（炭1）および9世紀前半～後半と考えられる10号建物跡から出土した炭化材2点（炭1, 炭2）の、計4点である。10号建物跡の炭2を除く炭化材は、カマド構築材に由来する白色粘土中から出土しており、カマドで使用された燃料材と推定されている。

また、本分析では、上述した放射性炭素年代測定に供した炭化材2点も対象としたことから、結果を表2に併記した。

### 2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

### 3. 結果

樹種同定結果を表7に示す。建物跡および土坑から出土した炭化材は、広葉樹4分類群（ブナ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、ヤマグワ近似種、ムラサキシキブ属）に同定された。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴などを記す。

#### ・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、單列～2列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

#### ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1列、道管は孔圈外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高のものと複合放射組織がある。

#### ・ヤマグワ近似種 (cf. *Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圈部は3-5列、孔圈外への移行は緩やかで、晩材部の道管は単独または2-4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は潰れており、形態や大きさは不明。

木口の道管配列の特徴から、ヤマグワと考えられるが、放射組織がほとんど観察できないことから近似種とした。

#### ・ムラサキシキブ属 (*Callicarpa*) クマツヅラ科

散孔材で、横断面では多角形、道管は単独または2-3個が複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-25細胞高。

第7表 樹種同定結果

遺構	出土位置	取上No.	状態	樹種	備考
4号建物跡	カマド	炭1	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
8号建物跡	カマド	炭1	破片	ブナ属	
10号建物跡	西壁北西隅 カマド	炭1 炭2	破片 破片	ムラサキシキブ属 コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
5号土坑	土坑覆土	炭1 炭2	破片 破片	ヤマグワ近似種 ヤマグワ近似種	放射性炭素年代測定試料 放射性炭素年代測定試料

### 4. 考察

奈良時代および平安時代の竪穴建物跡から出土した炭化材には、広葉樹のブナ属、クヌギ節、ムラサキシキブ属が確認された。ブナ属は山地の落葉広葉樹林に生育する落葉高木であり、クヌギ節は二次林や水辺に生育する落葉高木である。また、ムラサキシキブ属は、落葉広葉樹林の明るい林内や林縁などに生育する落葉低木である。

分析に供された炭化材は、一部の試料を除きカマドの燃料材と推定されているが、確認された樹種は4号建物跡がクヌギ節、8号建物跡がブナ属、10号建物跡がクヌギ節からなる。数量が少なく量比の比較はできないが、山地に生育する分類群や二次林を構成する分類群が多いことから、おそらく近傍の森林より調達できる木材が燃料材として利用されたと考えられる。

### III. 土壤理化学分析

#### 1. 試料

試料は、調査区南西側に集中する奈良～平安時代と考えられる土坑群のうち、3基（11号土坑、15号土坑、16号土坑）の土坑埋積物（覆土）より採取された土壤である。以下、遺構毎に試料の概要を記す。

##### （1）11号土坑

11号土坑は、直径が約0.85m、深さ約0.6mを測る、平面が円形を呈する土坑である。本土坑は、覆土上層から古代の都留郡特有の土器類（壺之内原タイプ）の甕が出土したことから、葬送儀礼が行われた土坑墓の可能性が指摘されている。試料は、土坑半裁時の覆土断面より採取された、覆土上層（A）、中層（B）および下層（C）と、土坑周辺の地山（D）の土壤4点である。

##### （2）15号土坑

15号土坑は、直径が約1.2m、深さが約0.35mを測る、平面が円形を呈する土坑である。本土坑の規模は、今回の三ノ側遺跡の発掘調査で検出される土坑の典型とされ、土坑墓の可能性が示唆されている。試料は、土坑半裁時の覆土断面より採取された、覆土上層（西側:A、中央:C、東側:E）、下層～底面直上（西側:B、中央:D、東側:F）と、土坑周辺の地山から採取された土壤1点（G）の、計7点である。

##### （3）16号土坑

16号土坑は、直径が約1.45m、深さが約0.5mを測る、平面が円形を呈する土坑であり、15号土坑の東側に隣接する。試料は、土坑半裁時の覆土断面より採取された、覆土上層（西側:A、中央:C、東:E）、下層～底面直上（西側:B、中央:D、東側:F）と、土坑周辺の地山から採取された土壤1点（G）の、計7点である。

今回の分析では、上記した各土坑の機能や用途に関わる資料を得るために、土壤の化学性について検討した。

#### 2. 分析方法

本分析では、土壤理化学分析として、腐植含量、リン酸、カルシウム含量の調査を実施する。リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解一バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解一原子吸光法、腐植含量はチューリン法（土壤標準分析・測定法委員会、1986）でそれぞれ行った。以下に、各項目の操作工程を示す。

##### （1）試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作製する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

##### （2）腐植含量

粉碎土試料0.100～0.200gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

##### （3）リン酸、カルシウム含量

粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

### 3. 結果

土壤理化学分析結果を表8に示し、以下に遺構別の結果について記す。

#### (1) 11号土坑

野外土性（ペドロジスト懇談会編, 1984）は、いずれの試料もSiC（シルト質埴土）に分類される。土色は、10YR2/3 黒褐、10YR3/2 黒褐と黒色味が強い。腐植含量は、3.72～4.24%であり、土色に相応した腐植集積量である。これら試料のリン酸含量は、3.41～3.76P2O5mg/gと腐植含量に応じた推移を示す。カルシウム含量は、30.5～34.9CaOmg/gの範囲で概ね一定しており、大差はない。

#### (2) 15号土坑

野外土性は、いずれの試料もSiC（シルト質埴土）に分類される。土色は、10YR2/2 黒褐、10YR2/3 黒褐、10YR3/2 黒褐と黒色味が強い。腐植含量は、4.43～5.55%であり、土色に相応した腐植集積量である。これら試料のリン酸含量は、3.48～4.55P2O5mg/gと腐植含量に応じた推移を示す。カルシウム含量は、22.8～34.4CaOmg/gの範囲であり、試料G（土坑周辺 地山）が最も高い値を示す。

#### (3) 16号土坑

野外土性は、いずれの試料もSiC（シルト質埴土）に分類される。土色は、10YR2/2 黒褐、10YR2/3 黒褐、10YR3/2 黒褐と黒色味が強い。腐植含量は、4.97～6.07%であり、土色に相応した腐植集積量である。これら試料のリン酸含量は、3.49～5.09P2O5mg/gと腐植含量に応じた推移を示す。カルシウム含量は、19.5～30.9CaOmg/gの範囲であり、試料G（土坑周辺 地山）が最も高い値を示す。

第8表 土壌理化学分析結果

遺構	試料	土性 <sup>*1</sup>	土色 <sup>*2</sup>	有機炭素 (%)	腐植 <sup>*3</sup> (%)	全リン酸 P2O5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	備考
11号土坑	A	SiC	10YR2/3 黒褐	2.16	3.72	3.69	30.5	
	B	SiC	10YR2/3 黒褐	2.24	3.86	3.41	33.6	
	C	SiC	10YR2/2 黒褐	2.35	4.05	3.47	34.9	
	D	SiC	10YR3/2 黒褐	2.46	4.24	3.76	34.6	土坑周辺
15号土坑	A	SiC	10YR3/2 黒褐	3.22	5.55	4.55	30.8	
	B	SiC	10YR2/3 黒褐	3.06	5.28	4.43	32.1	
	C	SiC	10YR2/3 黒褐	3.04	5.24	4.09	26.5	
	D	SiC	10YR2/3 黒褐	3.00	5.17	4.41	27.0	
	E	SiC	10YR2/2 黒褐	3.19	5.50	4.19	22.8	
	F	SiC	10YR2/3 黒褐	3.13	5.40	4.38	22.8	
	G	SiC	10YR3/2 黒褐	2.57	4.43	3.48	34.4	土坑周辺
16号土坑	A	SiC	10YR2/2 黒褐	3.39	5.84	4.67	20.6	
	B	SiC	10YR2/2 黒褐	3.52	6.07	5.09	26.4	
	C	SiC	10YR2/2 黒褐	3.21	5.53	4.53	30.7	
	D	SiC	10YR2/3 黒褐	2.96	5.10	4.61	21.0	
	E	SiC	10YR2/3 黒褐	3.43	5.91	5.06	19.5	
	F	SiC	10YR2/3 黒褐	2.88	4.97	4.40	26.2	
	G	SiC	10YR2/3 黒褐	2.88	4.97	3.49	30.9	土坑周辺

\*1 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編, 1984）の野外土性による。

SiC：シルト質埴土（粘土 25～45%、シルト 45～75%、砂 0～30%）

\*2 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修, 1967）による。

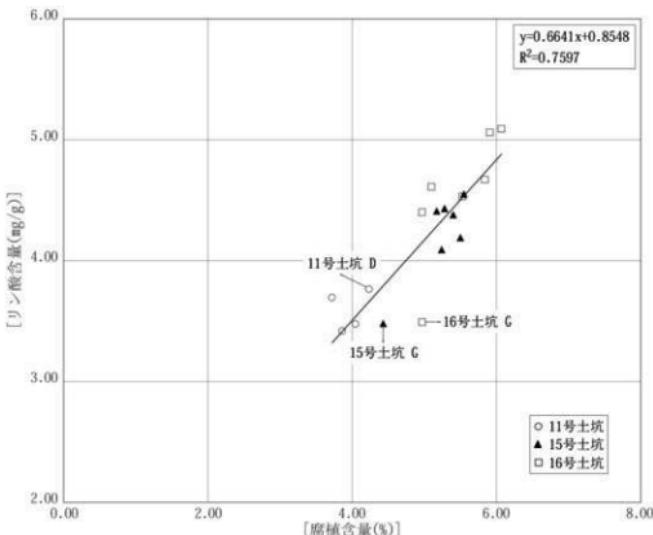
\*3 腐植：有機炭素量 × 1.724

### 4. 考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄や

アルミニウムと難溶性の化合物を形成する。特に活性アルミニウムの多い火山灰土壌ではリン酸の固定力が高いことから、火山灰土壌の上に立地する遺跡では生物起源残留物の痕跡確認などに有効である。

土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があり (Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度であるが、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g (川崎ほか, 1991) という報告例がある。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 1 ~ 50mg/g (藤貫, 1979) といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。



第 66 図 腐植含量とリン酸含量の相関図

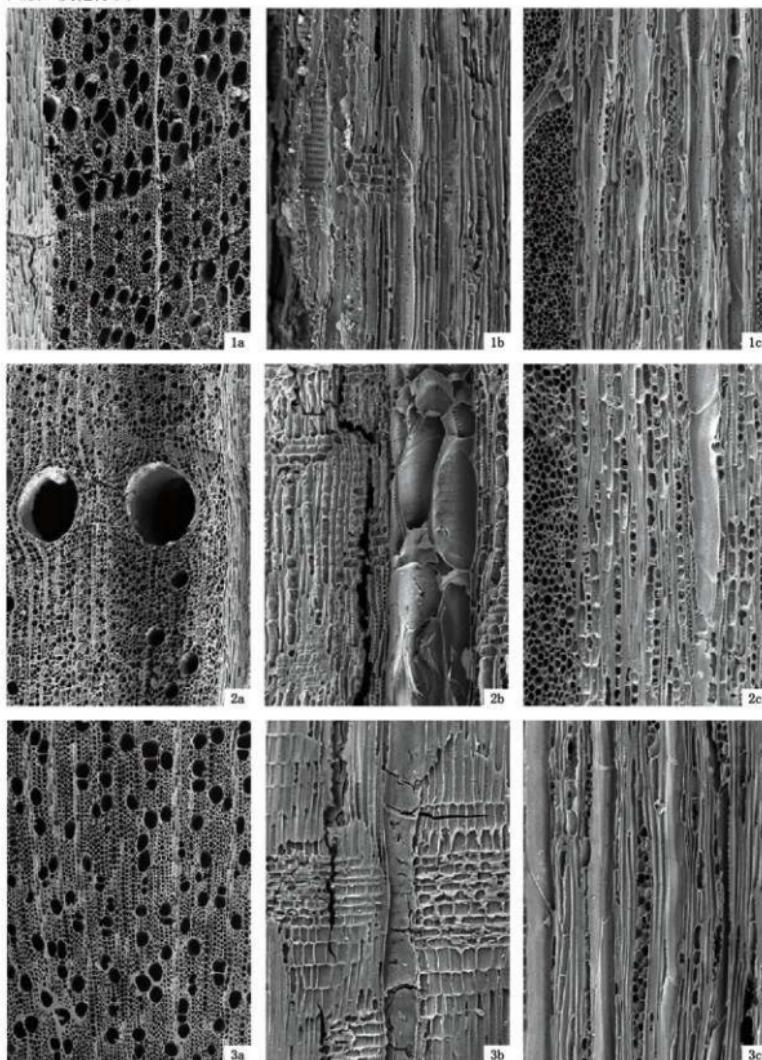
分析に供された試料のうち、土坑覆土試料はいずれもリン酸含量が天然賦存量である 3.0mg/g を上回る。一方、土坑周辺の地山試料も全て天然賦存量を超える値を示し、土坑覆土試料と測定値に大きな違いが見られない。このことから、調査地周辺の土壌は、リン酸の天然賦存量が 3.0mg/g 以上であることが考えられる。

11号土坑では、出土遺物から土坑墓の可能性が示唆されたが、腐植含量とリン酸含量の相関関係（図 66）をみると、リン酸は腐植累積に伴うとみられ、遺体埋納の痕跡を支持することは難しい。一方、15号土坑と16号土坑は、地山試料と比較して、腐植含量とリン酸含量がともにやや高い傾向を示す。図 66 からは、腐植含量の増加に伴うリン酸の富化と捉えられるが、リン酸の増加が 11号土坑に比べて顕著である。そのため、植物遺体を給源とした自然蓄積以外にも富化の原因が存在する可能性があるが、遺体埋納による富化とするにはリン酸の富化に対してカルシウムが付随しないため、後世の施肥などの影響も考慮する必要がある。

## 引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信,1991,中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量.土壤蓄積リ  
ンの再生循環利用技術の開発.農林水産省農林水産技術会議事務局編,28-36.
- Bowen,H.J.M.,1979,Environmental Chemistry of Elements. [浅見輝男・茅野充男(訳),1983,環境無機化学,元  
素の循環と生化学,博友社,297p.]
- Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.,1976,SOILCHEMISTRY. [岩田進午・三輪春太郎・井上隆弘・陽 捷行(訳),1980,  
土壤の化学,学会出版センター-,309p.]
- 土壤標準分析・測定法委員会編,1986,土壤標準分析・測定法,博友社,354p.
- 藤貫 正,1979,カルシウム,地質調査所化学分析法,52,57-61.
- 林 昭三,1991,日本產木材顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本產広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 川崎 弘・吉田 隆・井上恒久,1991,九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量.土壤蓄積リンの再生循環利  
用技術の開発.農林水産省農林水産技術会議事務局編,23-27.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会,1984,土壤調査ハンドブック,156p.
- 鳥地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊  
東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)  
IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版4 炭化材(1)

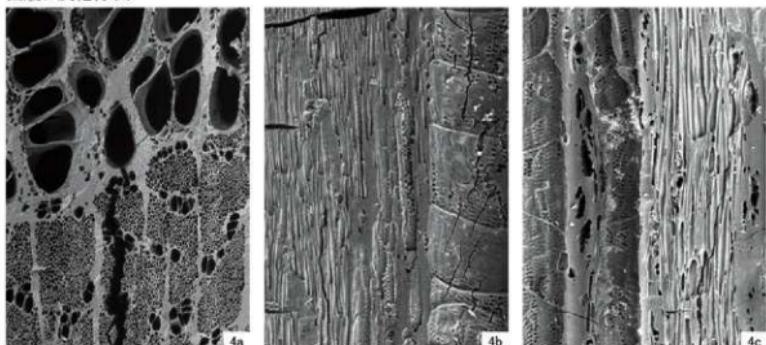


1. ブナ属(8号住居跡;炭1)
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(4号住居跡;炭1)
3. ムラサキシキブ属(10号住居跡;炭1)

a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm:a  
200 μm:b, c

図版5 炭化材(2)



4. ヤマグワ近似種(5号土坑;炭1)

a:木口, b:桿目, c:板目

## 第5章 総括

今回の三ノ側遺跡の調査では、奈良・平安時代（8世紀後半～9世紀前半）の竪穴建物跡13軒、ほぼ同時期に該当すると推測される掘立柱建物跡4棟、溝状遺構7条、奈良・平安時代～中世（8世紀後半～14世紀ごろ）の土坑129基などを検出した。

ここでは出土数の多い土師器や竪穴建物跡の特徴についてまとめ、若干の考察を加えて遺跡全体の傾向を捉えることとする。

なお、時期の設定については、山梨県史における編年をもとに、段階的な変化が捉えやすい甲斐型の土師器環を中心とした基準として行ったが、全体的に土師器環の出土数が少ないので、その他の遺物や共伴する土師器甕の産地構成も判断基準としている。

### 第1節 土師器の特徴

#### 1. 土師器の産地について

三ノ側遺跡を含む都留市域に存在する奈良・平安時代の遺跡からは、甲府盆地で生産された土師器に加え、駿東型、在地系壠之内原タイプの土師器が多く出土する。この傾向は、特に奈良時代において顕著である。

今回の調査においても同様の傾向が見られ、大型の竪穴建物跡である4号竪穴建物跡からは比較的良好な一括資料が得られたため、土師器甕を中心に胎土分析を実施した（第4章第1節）。分析の結果、相模型と判断した土師器甕と壠之内原タイプの土師器甕の胎土組成に大きな差は認められず、ともに桂川流域の大月市付近よりも下流部に産地が推定された。

壠之内原タイプは、都留市の壠之内原遺跡出土の土器を基に提唱された都留市周辺に特有の土器型式で、色調が古代紫色もしくは肌色で、胎土に古代紫色の2～3mm大の粒子を多量に含んでいる土師器である。整形方法の特徴としては、外面のヘラ削り及びナデ調整があげられ、ヘラ削りは長胴甕、ナデ調整は胴張甕に施される傾向がある。また、壠之内原遺跡での出土状況からはヘラ削りの長胴甕の方がより古い段階の型式となる傾向が認められる。整形方法や時期的な型式変化の特徴においても、壠之内原タイプの土師器甕は相模型の土師器甕に類似しており、今回の胎土分析から推定される土器の産地とともに、相模地域との繋がりの強さを示していると思われる。

#### 2. 土師器の時期別特徴について

4号竪穴建物跡を含む8世紀後半の竪穴建物跡からは、壠之内原タイプもしくは相模型、駿東型の土師器甕が多く出土したが、土師器環に関してはほぼ甲斐型の土師器環に統一されていた。このような状況は、8世紀後半の当地の集落が、甲府盆地以外の地域との地勢的な強いつながりを持ちながら、政治的には甲斐国の統制下にあつたことを示していると考える。

9世紀前半になると竪穴建物跡から出土する土師器は甲斐型土器が大半を占めるようになり、甲斐国の統制力が強化されたことを窺わせる。また、煮炊具である甕の一般化から、甲府盆地方面からの人の流入あるいは政治的な投入があったのではないかと考えられる。

以下に、今回の調査で出土した土師器の特徴を産地ごとにまとめる。なお、胎土の特徴は、主に土器の断面（割れ口）の観察によるものである。

甲斐型：环・皿

明赤褐色～橙色の色調で、胎土に赤色・黒色粒子を少量含む。

8世紀後半の环は、箱形で、外面の底部付近に丁寧なヘラ削り、内面はみこみ部に暗文が施される。底部は回

転糸切り後周囲をヘラ削りする。やや身の浅い盤状に近いものや内外面に磨きが見られるものが、8世紀後半の中でも古い段階に位置づけられる（4・7・13号建物）。皿は存在しない。

9世紀前半の坏は、低径が縮小し、みこみ部の暗文が消滅する。口唇部は8世紀後半と同様で、外反や肥厚化しない。底部は全面をヘラ削りする（8・10・11号建物）。内面に渦巻状の暗文が施された皿が見られる（10号建物）。

10世紀前半の坏・皿は、暗文がなくなり、口唇部が玉縁化する。墨書き器が見られるようになる（遺構外）。

#### 甲斐型：甕

赤褐色～暗褐色の色調で胎土に石英や雲母を多く含む。

外面に縱方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目や指頭痕が見られる。カマド周辺から多く出土し、完形に近い形まで復元できるものが多い。8世紀後半から9世紀前半にかけて顕著な差異は認められないが、9世紀前半の新しい段階のものは、頸部のくびれがなくなり、口縁部が立ち気味になる（8・10号建物）。8世紀後半には、ロクロ整形の甕（2・3号建物）や甲斐型成立前のものと思われる器壁が分厚く刷毛目の彫りが深い長胴甕、球形で口縁部が薄く立ち上がる小型甕が見られる（4号建物）。

#### 駿東型：甕

橙色～明褐色の色調でやや赤味を帯びるものもある。胎土は非常に緻密で石英をごく少量含むものもある。

8世紀後半では、甲斐型の土師器甕を上回るほどの量が出土しているが、9世紀前半にはほとんど見られなくなる。球胴もしくは胴張型で、頸部が「くの字」状に鋭く屈曲し、口縁部は開きながら立ち上がるが、わずかに内反しながら立ち上がるものと外反しながら立ち上がるものがある。外面の刷毛目は非常に目が細かく彫りは浅い。内面の刷毛目は外面同様目が細かいものと外面に比べてやや幅があり彫りの深いものを見られる。頸部から体部上半にかけて磨きが見られる。上部と下部を分けて製作してから接合しており、体部の中央からやや下方に接合部がはっきり残る。接合部は刷毛目が消え指頭痕や指でなでた痕跡が残る。

#### 堀之内原タイプ・相模型：甕

赤褐色～ぶい橙色の色調で色の幅が広いが、全体的にくすんだ色調である。胎土は素地がぼそぼそしており、隙間（孔隙）が多く見える。暗赤褐色～赤色の礫を含む。礫の状態は、3～8mmほどの礫を大量に含むものからほとんど含まないものまで様々ある。胎土分析を実施する前の段階では、ほぼこの礫の含有量で産地を推定し、礫を多く含むものを堀之内原タイプとした。なお、胎土分析によれば、この礫は安山岩もしくは凝灰岩が風化したものと考えられるとのことである。

8世紀後半では比較的多く出土しているが、単独の破片が多い。駿東型と同様に9世紀前半にはほとんど見られなくなる。外面の調整には、縱方向に大胆なヘラ削りが施される長胴型のものと、ヘラナデが施される長胴型や球胴型のものがある。長胴型の口縁は体部から口縁部へ緩やかに外反するものが多く（4号建物他）、ヘラ削りが施されるものには直線的にわずかに屈曲するものも見られる（3号建物）。球胴型のものは器壁が1cm前後と厚く、体部から口縁部まで均一な厚みで整形される。頸部がカーブを描いて曲がり、口縁部はやや開いて立ち上がる。長胴型に比べて表面が均一にならされており、丁寧に作られている印象を受ける。球胴型のものとヘラ削りが施される長胴甕に礫が多く含まれ、ヘラ削りが施される長胴型のものほど色調が暗くなる傾向が見られる。

## 第2節 積穴建物跡の特徴

### 1. 積穴建物跡の時期について

今回の調査で発見された積穴建物跡の時期は、8世紀後半の10軒と9世紀前半の3軒に分かれる。さらにそれぞれの時期において、甲斐型の土師器坏の変化や土師器甕の産地構成から古段階と新段階に細分され、次のようになると考えられる。

8世紀後半（古）：1号～4号竪穴建物跡、7号竪穴建物跡、13号竪穴建物跡

（新）：5号竪穴建物跡、6号竪穴建物跡、9号竪穴建物跡、11号竪穴建物跡

9世紀前半（古）：11号竪穴建物跡

（新）：8号竪穴建物跡・10号竪穴建物跡

また、それぞれ各時期の中でも多少前後すると思われるが、4号竪穴建物跡と5号竪穴建物跡においては、遺構の距離が20cmほどしかないので、確実に同時には存在しなかったことがわかる。

## 2. 竪穴建物跡の分布状況について

調査区全体図を見ると、竪穴建物跡は調査区の西側と東側に分かれて分布していることがわかる。この状況は掘立柱建物跡も同様である。調査区中央部分は南北に土坑群が分布しており、この辺りに竪穴建物跡は見られないことから、土坑群を境に西側と東側に居住区が設定されていたと推測される。

時期ごとの分布状況を見てみると、東側の居住区画ではすべての竪穴建物跡が8世紀後半のものとなり、西側では8世紀後半新段階のものが2軒、9世紀前半が3軒となる。東側では、大型の竪穴建物跡である4号竪穴建物跡を中心として配置される傾向が見られる。西側では、8世紀後半のものが北側に、9世紀前半のものが南側に位置している。また、調査区西壁や南壁にかかる竪穴建物跡が見られることから、さらに西側や南側に竪穴建物跡が分布していると推測される。調査区の南西側へ100mほど離れた地点には、昭和56年に都留市教育委員会が調査した地点があり、8世紀後半と10世紀前半の竪穴建物跡が発見されていることから、この地点との間にかけて建物跡が広く分布していると想定される。

## 3. 竪穴建物跡の形状・規模について

竪穴建物跡の形状・規模は第9表のとおりである。形状には隅丸の方形と長方形が見られる。時期別に見てみると、8世紀後半の古段階に限って隅丸長方形のものが存在する。また、隅丸長方形のものは方位に関係なくカマドが設けられる壁側が長くなる傾向がある。

規模は4号竪穴建物跡が飛びぬけて大きい。時期別に見てみると、8世紀後半の古段階に比較的規模の小さい1・2号竪穴建物跡があり、4号竪穴建物跡を含め様々な規模のものが存在する傾向がある。

主軸を南北方向に設定して竪穴建物跡の向く方向を見てみると、角度にやや幅はあるが、全て南南西を向いて構築されている。掘立柱建物跡も同様の傾向にある。軸線を90°振ると北側の桂川に並行しているので、桂川に向かって低くなる地形の傾斜に合わせたか、あるいは調査地点北側の国道139号部分に想定される古代道路に並行して建物が建てられたのではないかと推測される。また、この傾向は江戸時代の溝状遺構及び現代の周辺建物にも同様に見られる。

## 4. カマドについて

4号竪穴建物跡を除いて竪穴建物跡のカマド及びカマド周辺の床面上からは、溶岩礫が検出されており、カマドは溶岩礫を用いた石組みカマドであったと考えられる。6・7・11号竪穴建物跡では石組みの両袖が残る。また、7号竪穴建物跡では、両袖の最上部にだけ細長い凝灰岩を用いるやや特殊な状況が認められた。4号竪穴建物跡には溶岩礫がほとんど見られず、建物の規模や出土遺物の量など他の建物跡とは性質が異なるため容易には判断できないが、カマドが人為的に破壊された痕跡が認められるため、カマド廃棄時に住居外へ持ち出された可能性が高い。カマドの奥壁にトンネル状の煙道を持つものは認められなかった。ほとんどのカマドからは灰白色粘土が大量に検出されている。建物跡が構築される地山はスコリアを多く含みザラザラして粘性が非常に弱いため、カマドを構築する際には他の地点で採取した灰白色粘土が選択的に用いられたと考えられる。この灰白色

粘土が部分的に赤味や紫色に変色していたことから、堀之内原タイプの土師器と同じ粘土ではないかと考え、土師器一括資料とともに胎土分析を行ったが、岩石組成からの類似性は認められなかった。

カマドには、竪穴の北壁に設けられる北カマドと東壁に設けられる東カマドが見られるが、北カマドが主流を占め、東カマドは調査区東側の中でも最も東寄りに位置する3・7・8号建物跡にのみ認められた。東カマドは調査区から南西へ200mほど離れた平成13・14年の都留市教育委員会による調査地点（C・D地点）でも確認されている。

第9表 三ノ側遺跡竪穴建物跡一覧表

遺構名	位置(グリッド)	主軸	規模(m)			形状	柱穴	貼床	カマド		時期
			東西	南北	深さ				位置	構造	
1号竪穴建物跡	K-7・8, L-8	N-24°-W	2.87	2.25	0.33	楕円長方形	不明(外1)	なし	北壁	石組み	8世紀後半(古)
2号竪穴建物跡	M-7・8	N-21°-W	2.75	2.45	0.19	楕円方形	不明(床1)	なし	北壁	石組み	8世紀後半(古)
3号竪穴建物跡	M-10, L-9・10	N-25°-W	2.76	3.78	0.48	楕円長方形	不明(床1)	なし	東壁	石組み	8世紀後半(古)
4号竪穴建物跡	N・O-8・9	N-24°-W	5.82	4.47	0.56	楕円長方形	不明	なし	北壁	不明	8世紀後半(古)
5号竪穴建物跡	O-7	N-27°-W	3.2	不明	0.3	(楕円方形)	不明	なし	北壁	(石組み)	8世紀後半(新)
6号竪穴建物跡	O-8・9, P-9	N-33°-W	3.29	3.43	0.57	楕円方形	不明	なし	東壁	石組み	8世紀後半(新)
7号竪穴建物跡	O-10-P-9・10	N-17°-W	3.55	3.21	0.46	楕円長方形	不明	なし	北壁	石組み	8世紀後半(古)
8号竪穴建物跡	B・C-6	N-26°-W	不明	3.0	0.42	(楕円方形)	不明	なし	北壁	石組み	9世紀前半(新)
9号竪穴建物跡	A・B-9	N-11°-W	不明	3.82	0.62	(楕円方形)	不明	なし	北壁	石組み	8世紀後半(新)
10号竪穴建物跡	D・E-6・7	N-19°-W	3.99	不明	0.25	(楕円方形)	不明	なし	北壁	石組み	9世紀前半(新)
11号竪穴建物跡	C-9・10, D-9	N-21°-W	4.33	4.23	0.52	楕円方形	壁穴外(壁2)	なし	北壁	石組み	9世紀前半(古)
12号竪穴建物跡	B・C-10・11	N-14°-W	3.49	3.17	0.48	楕円方形	不明	なし	北壁	石組み	8世紀後半(新)
13号竪穴建物跡	J-11・12	N-22°-W	3.69	2.79	0.31	楕円長方形	壁穴内	なし	北壁	石組み	8世紀後半(古)

\*「主軸」は比較を容易にするため全て南北方向を基準に計測した。

\*「柱穴」には柱穴に当たるビットのおおまかな位置と数を()内に記した。

今回の調査では、以上のような状況が認められた。三ノ側遺跡は、遺跡の推定範囲からも分かるとおり、非常に大規模な遺跡である。今回の調査においても、濃密とまでは言えないが、竪穴建物跡が広範囲にわたって存在することが確認された。平成23~24年度に山梨県埋蔵文化財センターが行った県立谷村工業高校地点の試掘調査の結果、奈良・平安時代の文化層が確認され、さらに東側へ遺跡の推定範囲が拡大されている。今後も、遺跡の全容解明に向けたさらなる資料の集積に期待したい。

また、今回の調査では4号竪穴建物跡から出土した産地の異なる土師器一括資料の胎土分析を実施し、詳細な岩石組成の情報を得ることができた。古代都留郡及び周辺地域の生産・流通の状況を検討するうえでの基礎的なデータとして活用されることを期待したい。

## 引用・参考文献

- ・神奈川考古同人会 1983『神奈川考古』第14号 シンポジウム奈良一平安時代土器の諸問題と周辺地域の様相一
- ・杉本悠樹 2008『古代甲斐国都留郡の様相』『山梨県立博物館調査・研究報告2 古代の交易と道 研究報告書』山梨県立博物館
- ・都留市 1986『都留市史』資料編 地史・考古
- ・都留市 1988『都留市史』資料編 都留郡村絵図・村明細帳集
- ・都留市 1996『都留市史』通史編
- ・都留市教育委員会 2003『三ノ側遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告書第12集
- ・都留市教育委員会 2010『山梨県都留市内発掘調査報告書 平成17~21年度調査』都留市埋蔵文化財調査

報告書第13集

- ・奈良泰史 1980 「『堀之内原 type』の提唱に関する覚書き」『山梨考古』3 山梨県考古学協会
- ・日本考古学協会 2011 年度査定大会実行委員会 2011「シンポジウムⅢ 古代社会の生業をめぐる諸問題」『一般社団法人日本考古学協会 2011 年度査定大会研究発表資料集』
- ・室伏 輝・平野 修 2004 「大月遺跡について - 都留郡家(衙)としての再検討 - 」『山梨考古学論集』V 山梨県考古学協会
- ・平野 修 2011 「鷹の巣遺跡」都留市埋蔵文化財調査報告第14集 (財)山梨文化財研究所
- ・山梨県 1999 『山梨県史』資料編2 原始・古代2
- ・山梨県 2004 『山梨県史』通史編1 原始・古代
- ・山梨県教育委員会 2012 『滝沢遺跡(第2次)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第282集
- ・八巻與志夫 1986 「古代甲斐国の郷配置の基礎的操作」『山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会

# 写 真 図 版



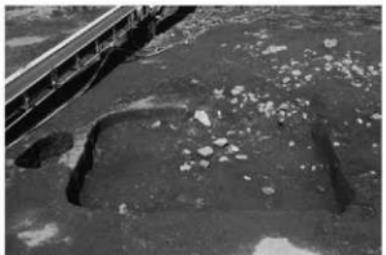


調査区第 2 地点全景（東側上空から）



調査区第 3 地点全景（西側上空から）

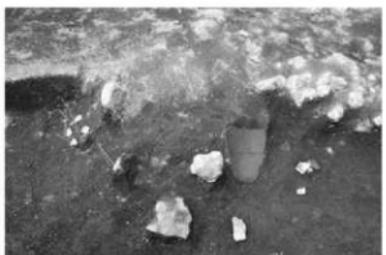
写真図版 2



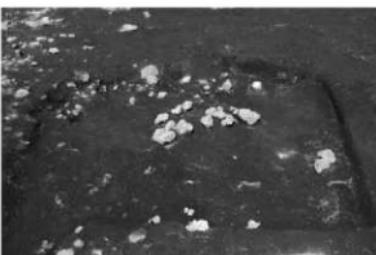
1号竪穴建物跡遺物出土状況



1号竪穴建物跡完掘状況



1号竪穴建物跡カマド周辺遺物出土状況



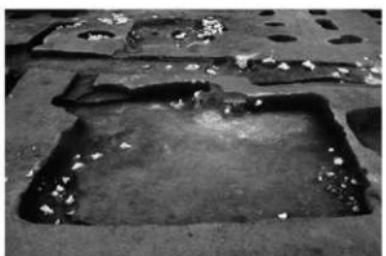
2号竪穴建物跡完掘状況



2号竪穴建物跡遺物出土状況



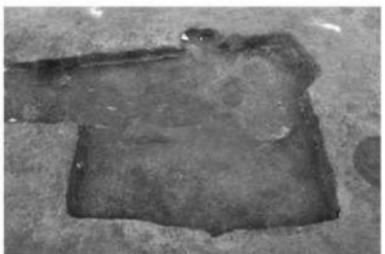
3号竪穴建物跡完掘状況



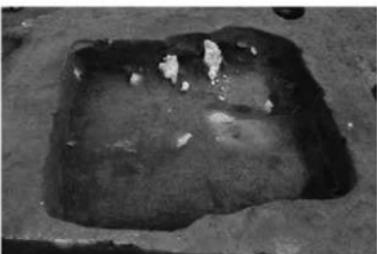
4号竪穴建物跡完掘状況



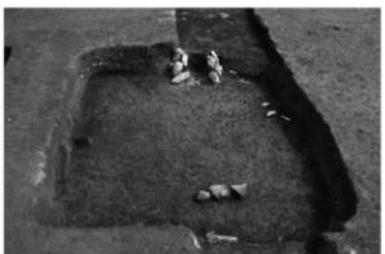
4号竪穴建物跡カマド周辺遺物出土状況



5号竪穴建物跡完掘状況



6号竪穴建物跡完掘状況



7号竪穴建物跡完掘状況



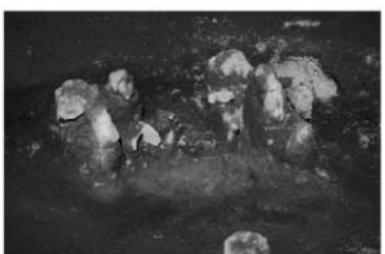
7号竪穴建物跡カマド検出状況



7号竪穴建物跡カマド遺物出土状況



8号竪穴建物跡完掘状況

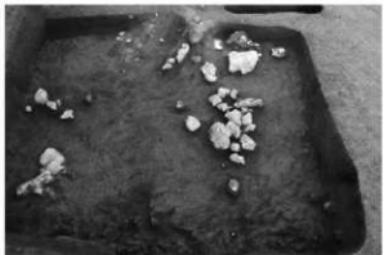


8号竪穴建物跡カマド遺物出土状況

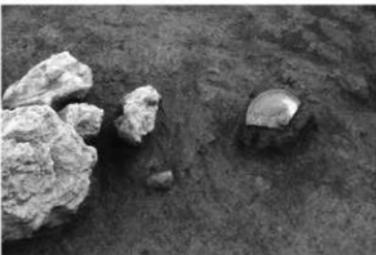


9号竪穴建物跡完掘状況

写真図版 4



9号竪穴建物跡溶岩礫検出状況



9号竪穴建物跡遺物出土状況



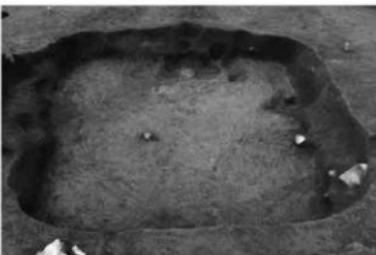
9号竪穴建物跡調査区壁断面



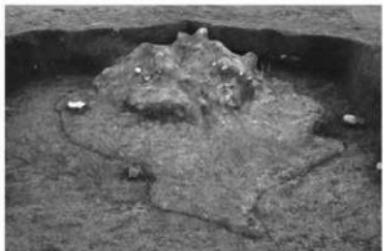
10号竪穴建物跡完掘状況



10号竪穴建物跡調査区壁断面



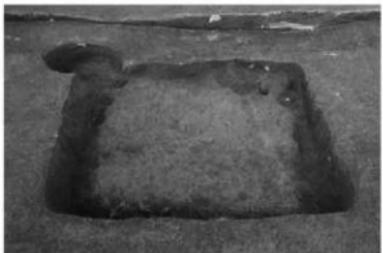
11号竪穴建物跡完掘状況



11号竪穴建物跡カマド検出状況



11号カマド石組み検出状況



12号竪穴建物跡完掘状況



12号竪穴建物跡溶岩礫検出状況



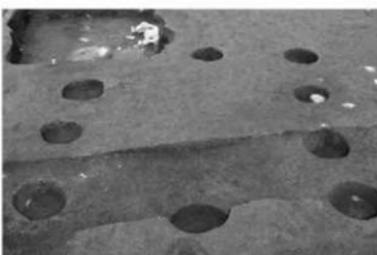
12号竪穴建物跡カマド遺物出土状況



13号竪穴建物跡完掘状況



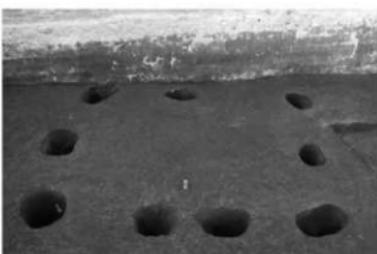
1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡



3号掘立柱建物跡



4号掘立柱建物跡

写真図版 6



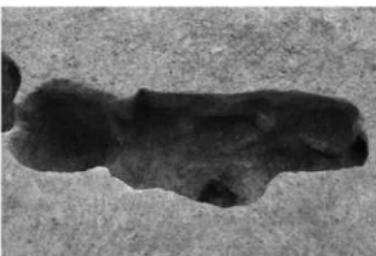
1号溝状遺構



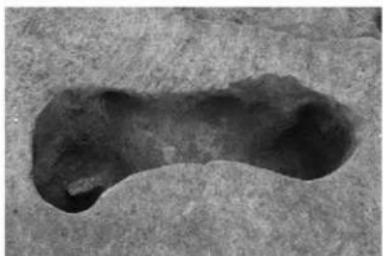
1号溝状遺構・河川跡



河川跡近景



2号溝状遺構



3号溝状遺構



4号溝状遺構



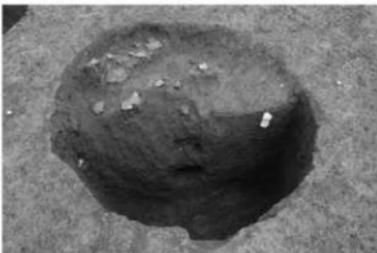
5号溝状遺構



7号溝状遺構



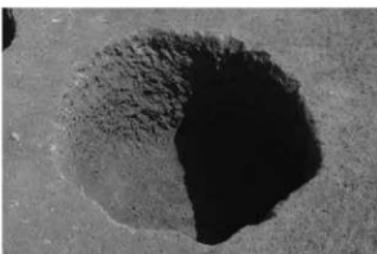
5号土坑と周辺に露出する溶岩



11号土坑遺物出土状況(1)



11号土坑遺物出土状況(2)



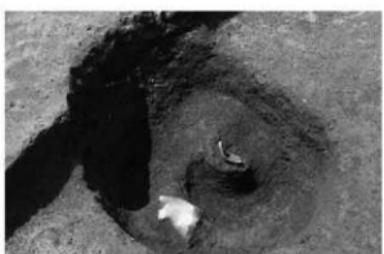
11号土坑完掘状況



15号土坑完掘状況



16号土坑完掘状況

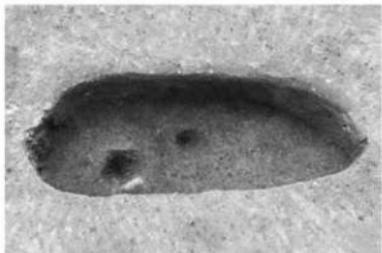


23号土坑遺物出土状況



24号土坑遺物出土状況

写真図版 8



24号土坑完掘状況



34号土坑溶岩礫検出状況



79号土坑



89・90・91号土坑



115号土坑



31・32号土坑、II層4~6号溝状遺構



II層8・9号溝状遺構に切られる35号土坑



II層20号溝状遺構



1号竪穴建物跡出土遺物 (No. 6)



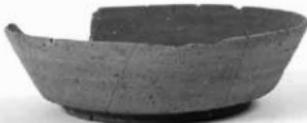
1号竪穴建物跡出土遺物 (図版 No. 15)



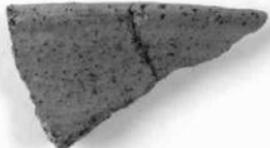
2号竪穴建物跡出土遺物 (No. 2)



2号竪穴建物跡出土遺物 (No. 3)



2号竪穴建物跡出土遺物 (No.11)



3号竪穴建物跡出土遺物 (No. 6)



3号竪穴建物跡出土遺物 (No. 7)



3号竪穴建物跡出土遺物 (No.15)

写真図版10



4号竪穴建物跡出土甲斐型土師器基  
(No.107)



4号竪穴建物跡出土遺物 (No.15)



4号竪穴建物跡出土遺物 (No.17)



4号竪穴建物跡出土遺物 (No.18)



4号竪穴建物跡 (No.19)



4号竪穴建物跡出土遺物 (No.35)



4号竪穴建物跡出土フイゴの羽口 (No.107)



5号竪穴建物跡出土甲斐型土師器基  
(No.15)



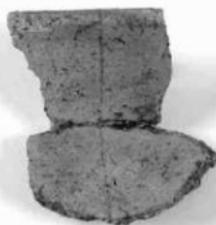
5号竪穴建物跡出土遺物 (No. 4)



5号竪穴建物跡出土遺物 (No. 6)



6号竪穴建物跡出土遺物 (No.13)



6号竪穴建物跡出土遺物 (No.16)



7号竪穴建物跡出土遺物 (No. 5)



7号竪穴建物跡出土駿東型土師器甕



8号竪穴建物跡出土遺物 (No. 1)



8号竪穴建物跡出土遺物 (No. 3)

写真図版12



8号竪穴建物跡出土遺物 (No. 6)



9号竪穴建物跡出土遺物 (No. 4)



9号竪穴建物跡出土遺物 (No.11)



9号竪穴建物跡出土遺物 (No.14)



10号竪穴建物跡出土遺物 (No. 1)



10号竪穴建物跡出土遺物 (No. 3)



10号竪穴建物跡北東コーナー供伴遺物



11号竪穴建物跡出土遺物 (No. 1)



11号竪穴建物跡出土甲斐型土師器壺



11号竪穴建物跡出土遺物 (No. 7)



11号竪穴建物跡出土遺物 (No.25)



12号竪穴建物跡出土遺物 (No. 1)



12号竪穴建物跡出土遺物 (No. 3)



13号竪穴建物跡出土遺物 (No. 1)



13号竪穴建物跡出土遺物 (No. 2)

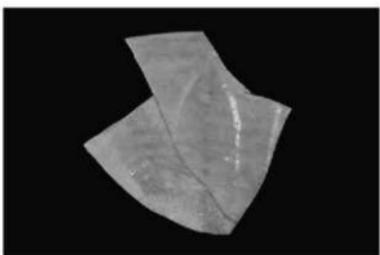


11号土坑出土遺物 (No. 1)

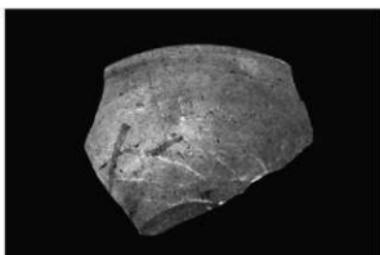
写真図版14



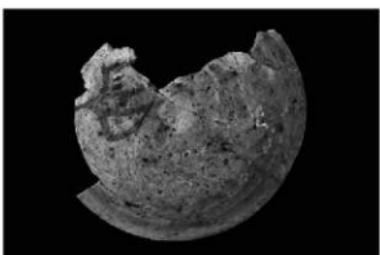
23号土坑出土遺物 (No. 1)



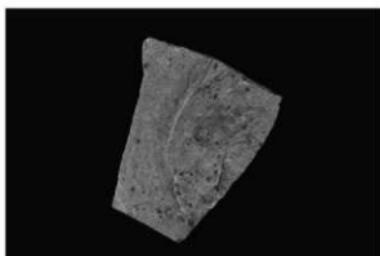
79号・115号土坑出土遺物 (No. 1)



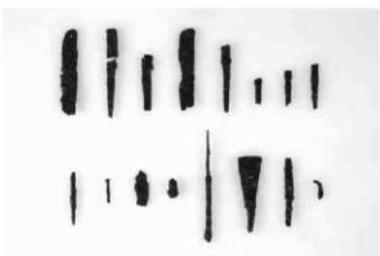
遺構外出土墨書土器 (No. 1)



遺構外出土墨書土器 (No. 2)



遺構外出土墨書土器 (No. 3)



鉄製品



手鎌 (1・4号竪穴建物跡出土)



鑿 (遺構外出土)

# 報告書抄録

ふりがな	さんのがわいせき							
書名	三ノ側遺跡							
副題	県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う発掘調査報告							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第290集							
著者名	依田幸浩 加々美鮎実 パリノ・サーヴェイ株式会社							
発行者	山梨県教育委員会・山梨県産業労働部							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016							
発行年月日	2013年3月22日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さんのわいせき	やまなしけんつるぐんかみ やごちょうめ	19204	84	35° 32' 36"	138° 54' 03"	20110629 ~ 20111226	3,800m <sup>2</sup>	記録保存 調査
三ノ側遺跡	山梨県都留郡上谷五丁目							
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
三ノ側遺跡	集落	奈良・平安・中世・近世		竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・河川跡		土師器・須恵器・金属製品		土師器の胎土分析を実施
要約	古代甲斐国都留郡多良郷に推測される集落の発掘調査である。奈良時代後半から平安時代初頭にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出された。竪穴建物跡出土の土師器一括資料の胎土分析を実施し、遺跡周辺の生産・流通を検討するうえでの基礎的データを得ることができた。							

## 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第290集

# 三ノ側遺跡

—県立産業技術短期大学校都留キャンパス建設事業に伴う発掘調査報告—

印刷日 2013(平成25)年3月15日

発行日 2013(平成25)年3月22日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055-266-3016 FAX 055-266-3882

発行 山梨県教育委員会・山梨県産業労働部

印刷 株式会社峠南堂印刷所

